

IS—KaRaKuRi /Knight—

reizen

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

IS学園が襲撃され、専用機持ちたちが夢の世界から帰還したある日、1人の男が転校してきた。しかしその男は――

「初めまして、平坂零司です。えっと……まあ……僕は――」

――ISに乗れるわけではありません

ISに乗れないのにIS学園に来た男、平坂零司。

まだあどけなさが残る彼にはとある目的があった。

目次

	e p.	1	恋する男子の評価勘定	
	e p.	2	その思い、君の届け	16
	e p.	3	早坂零司という少年	30
	e p.	4	編入したよ、権力で	43
	e p.	5	零司の本音	58
74	e p.	6	その誓いは結束を固め……	
	e p.	7	最初からの目的	89
	e p.	8	激怒する零司	104
119	e p.	9	我を忘れ、飲んだくれ	
	e p.	10	それはあくまで天才基準	134
	e p.	11	嫉妬にデートに荒れ模様	148
	e p.	12	揺れる京都	164
	e p.	13	交換条件	184
	e p.	14	少年たちの行動	197
	e p.	15	自ら進む混沌の道	213
	e p.	16	人外たちの狂宴	228
	e p.	17	最悪の覚醒	242
	e p.	18	破壊と惨滅のロマン	
	e p.	19	牙を向く零司	281

e p. 1 恋する男子の評価勘定

ようやく完成した。完成した時は授業中にも関わらず立ち上がってガッツポーズをしてしまったが、恥ずかしかったのはあの時だけで今になっては平然としている。

ともかく今はI S学園に向かわないと。完成品は陶芸とか見るだけが目的の物ならともかく、そうでないものは使わなければ意味がないんだ。

「平坂、どこ行くんだよ」

後ろから五反田が声をかけてくる。ああもう、普段は気さくだけどこういう時はウザい。

「ちよつと用事だよ。午後はサボる」

「サボるって、一体——」

声を無視して階段を降り、すぐに靴を履き替えて駅に向かう。

(……流石に制服のままはマズいか)

補導されて時間を食ってしまったら試行時間がなくなるからな。駅員にはマークされるだろうけど、どこまで行くかとか監視はないだろう。

そう思って念のためにトイレで持ってきていた私服に着替え、ちよつとした装備もし

て駅のホームに降りてそのまま電車に乗る。着くのは大体1時間ぐらいかと思い、向こうに連絡した。

10月も下旬に差し掛かった頃、僕はようやくあるシステムを完成させた。その名は「マルチロックオン・システム」。複数のターゲットを同時に補足してそれぞれ撃つシステムだ。

小さい頃からISというワードスーツが登場したことによつて独学も含めプログラミングの授業を受けた俺は興味を持つてそのまま特技の一つとして伸ばしていた。ある日、IS操縦者をしている幼馴染の機体開発プロジェクトが凍結されたらしい。その幼馴染の実家の力もあつたのか、彼女は凍結された機体のコアを借りることができたみたいだけど、彼女の整備知識は操縦者の中でもかなり高いらしいが結局は本職に劣る。まあ、あの子は努力家だから今では一般整備人ぐらいの知識と技術は持つてそうだけども。

閑話休題

ともかく、彼女の機体の完成の手伝いをするために僕は今までちよつと複雑なシステムを作っていた。……つて、本当はこれで3回目なんだけどね。これまでの2回は見事

に失敗している。

(今度こそ……こそは……)

絶対に大丈夫。確認テストを何度もしたし、これで間違いないだろう。……つていうか、これで間違っていたらたぶん泣く。

(……そう言えば、荷物は大丈夫かな)

IS学園に入るには許可証が必要だ。それが無ければ入園できずに門前払い……とはいえ、僕の場合は知り合いというか幼馴染というか、微妙な立ち位置にいるけど決して親しくないわけではない人が学園内で有名だし、電話したら迎えに来てくれるはずだ。

(……でも、ちょっと心配だな)

パソコンはある、許可証、そしてデータメモリもある。学校の教科書とノートは置いてきたから問題ない。後は制服に財布、そして水と朝買っておいておにぎり3つだ。

(今の内に食べとこ)

IS学園に着いたら昼飯どころじゃないし。

この時、僕は樂觀していたんだ。まさか、IS学園であんな目に遭うなんて全く考えていなかった。

「はい。個人証明書に生徒手帳ね。くれぐれも余計なことをしちやダメよ」

「大丈夫です。するとしても精々、ISに触れる程度ですから」

「そんなことしたって動かせないわよ」

そう言つて睨んでくる受付嬢に、愛想を含んだ苦笑いをする。というかそんなことになつたら困るんだけどな。

なんて思いながら中に入ると、築年数がそこまでないからか真新しく感じるIS学園の校舎に目を奪われた。

「……なんて……最新技術の塊」

思わずそう呟いてしまった。いや、実際そうだ。ここは僕が見たことがない科学があるはずだ。本当は軍事機密を除けば話が早いのもかもしれないけど、僕にはその技術はな
いだろうし何よりも捕まりたくない。

「そういえばあなた、どこに向かうつもりなの？」

後ろから声をかけられ、僕は現実に引き戻される。

「ええと、確か生徒会室にいるからたぶんそこ——」

「はああああ!?!」

何故か物凄く驚かれた。

「あなた、本気で言ってるの!? あそこには——」

「更識楯無さんに布仏虚さん、そして本音さんがいるんですよね?」

「ちよ、何で知ってるのよ!?!」

幼馴染だから、です。……というのは、おそらく違うだろう。

そもそも、彼女らとは家が近所だったこともあって遊んでいただけだし、4人が女子校に行ったぐらいからたまに会う程度の疎遠となっている。というのはあくまで表面の話で、実はよく彼女らの家に遊びに行っているからたまに会っていた。

「あなた、まさかストーカーね」

「落ちていてください。彼女らがストーカーに許可証を発行するわけがないでしょう?」

それから10分ほど費やして何とか説得し、僕は生徒会室に向かった。どうやら彼女らは書類整理に追われているから人を付けることはできないって話だったけど、わがままを言えば良かったと後悔することになる。

「……GPSが、こんなにも役に立たないなんて……」

IS学園の敷地が広すぎて迷ってしまいました。

というかよくみんなこんな広い敷地に通うと思つたよね。たぶん、技術力の高さに目を奪われて迷ってしまう。

「やつぱり、誰か付けてもらえば良かったな……」

誰もいないこともあつてつい独り言をつぶやく。みんなにも事情があるからと流していたけど、こんなにも広くてややこしいなら誰か付けてもらえば良かった。

——それから、どれくらい時間が経つただろう

「……………」

認めたくないものだね。若さゆえの過ちというものを。……つまり、迷子である。

(そ、そりゃあ、確かに初めてだけどき、こんなにも広いなんて思わないじゃん……)

やつぱり、9月にあつた学園祭に行つておけば良かったって後悔している。せつかく本音から招待してくれていたのに、システム開発を優先してたから断つた。結果的に色々あつたらしくて電話口で不満を漏らしていた。

(もういいや。迎えに来てもらおう)

そう思つて刀奈さんに連絡を取ろうとしたけど、何故か出てくれなかった。

(…………どうして?)

もしかして、着いた時に連絡しなかつたから怒っているのだろうか？ それはない

……つて思いたい。

(……もしかしてトイレかな?)

なんて思っていると、僕の後ろで爆発が起こった。

(……え? まさか考えていることがバレた?)

それで怒って周囲を爆発? いやあ、いくら何でもそれはな——

——ドオンツ!!

……どうやら彼女は、予想以上にシスコンが進んでいたようだ。

この爆発は、アレだろう。ようやく妹の機体が完成するかもしれないものが中々届かないからイライラしてそこらを爆発しているのだろう。

(そういえば、以前からそんな気があったなあ)

あれは本当に偶然だったけど、ある日ばったりと僕は簪さんと出会った。どうやら買物に行くようで、意外なことに彼女と僕の行き先が同じだったのである。で、目当ての刀奈さんと遭遇。この時、何故か睨まれたけどその時は簪さんが萎縮したから彼女を睨んだと思っただけど実際は違う。僕を睨んでいたのだ。

(いやあ、あの時は本気で焦ったな。結構目に毒な姿で現れたかと思っただら、急に足で壁ドンされてその日の詳細を話させられたんだから……)

未だにあの時の恐怖は忘れられない。ああ、思い出しただけで寒気がしてきた。

(……こうなったら、虚さんに電話して迎えに来てもらおう)

考えてみれば、ここはＩＳ学園。そこら中に銃火器があるから爆発なんて自然なことのはず。ただ、僕にはあまり馴染みがないだけだ。そうだ。そうに違いない。

(……じゃあ、爆発した方に行ったら誰かいるんじゃないか?)

そう思った僕はすぐにそっちに急いだ。

やがて校舎が見えてきて、持参していた上靴に履き替えて中に入る。戦闘音は近づくにつれて大きくなるけど人の姿はなかった。それにひとつ、気になることがある。

(何でこんなところ……?)

人に会って道を知るためにほかのことは考えずに移動していたけど、冷静になって考えると校舎なんかで戦うなんてありえないはずだ。

そんなことを思っていると、戦闘音はなくなり、静かになった。

「——動くな。出血が多くなるぞ」

男の声だった。

いや、ここに男だっているはずだろう。いくらＩＳがあるからって言ってもＩＳには限度数が存在する。だから個人でＩＳを所有することは難しいはずだから、ＩＳを装備しなければ同じ人生を歩んできた男女では間違いない男性がスペックを上回るのだ。

僕はおそるおそる覗くと、その状況はとも信じられなかった。

(…刀奈さんが捕まってる！ な、何で……)

僕の記憶が間違いじゃなければ、刀奈さんはとても強かったはずだ。それに、IS だって持っているんだからそうそうやられることはないはずなのに……。

(一体どうなって……いや、今は……)

今は、刀奈さんを助けることが先決だ。

(相手はIS 操縦者を倒した人たち……普通なら逃げるべきだ……でも——)
ここで逃げたら、簪さんに嫌われる。それだけは嫌だった。



「——止まってください！」

唐突に声をかけられた「アンネイムド」の隊員たちは動きを止める。数人が腕を離して銃を構えた瞬間、彼らは吹き飛ばされた。

『どこから攻撃されている!?!』

『4時の方向だ!』

すぐさま、楯無を置いて全員が戦闘態勢を取る。すると彼らが行った場所とは別の——1時の方向から銃弾が飛んできた。

『相手は馬鹿なのか!?! こっちには更識楯無がいるのだぞ!?!』

『落ち着け。もしかしたら動けない彼女を切ったのかもしれない』

「——返してもらいます」

突然だった。彼らが反応できない速度で何かを通り過ぎ、楯無と奪っていた彼女の扇子を奪われて通過を許してしまう。

『男だ?!?!』

『こんなところに作業員が——』

『ともかく、奴の動きを止めろ!』

全員が乱入者に向かって発砲するが、まるで見えているのか銃弾を巧みにかわしている。だが一発が乱入者の足元に当たり、爆発した。そのせいか乱入者は吹き飛ばすように倒れるが無理やり楯無を庇う。

『——撃ち方、止め』

一人が止めると、全員がトリガーから指を離す。そして、目の前にいる乱入者を確認すると、何人が驚いた。

『……こんなところに何故男が……それに、彼はリストにいないはず』

『だが、あの女を庇うなら関係者だろう。悪いがここで死んでもらう他あるまい』

銃口を向けられたその乱入者——平坂零司は睨みつけた。

『……ただの一般人を撃つつもりですか？』

『!? 貴様、英語を話せるのか？』

どう見ても日本人の容姿をしている零司から発せられた別の言語に動揺を見せる。零司は気にすることなく続けた。

『英才教育つて奴ですよ。まあ、もっぱら今は作業用BGMとして様々な曲を聞いているんですが……それは今は関係ないですよね』

『そうだ。その女、そしてI Sを渡せ。それなら命だけは助けてやる』

おそらく指揮官と思われる男が隊員を制止しながらそう言うと、零司は首を振った。

『……何故その女を助ける?』

『この人が死んだら、悲しむ人がいるからです。そして僕は、彼女が泣く姿を見たくない』

それを聞いた隊員らは笑みを浮かべた。馬鹿にしているのではなく、心から称えているのだ。

『それに、この状況で僕らが助からないとどうして思ったんです——僕は、一人じゃないんですよ』

途端に隊員たちの銃が爆発を起こした。

『何だ!?!』

『一体どうなってる!?! 貴様、何をし——』

零司は左腕を——正しくは左腕についている竜を象つたとされる砲台を向けた。

「——ばん」

隊長格の男が吹き飛び、遠くまで飛ぶ。その光景を見ていた他の隊員は唾然としていたがすぐに銃を構えようとするが、次々に吹き飛ばされた。

『ファック!!』

「確かに僕は弱いしI Sを動かせない。でも、それをカバーできるほどの物は作れるし、あなたたちを撃退するぐらいはできる」

——カチツカチツ

弾切れか、砲台から正体不明の弾丸が発射されない。一人がその隙に零司に接近した。

『死ね！ クソガキ!!』

「見切った」

——ガッ!!

振り下ろされる警棒。しかしその刃が零司の大きな右手に掴まれたため、届くことはなかった。

『何だその武器は!?!』

「ブレイクシザー」……僕の壮大な夢を……誰にも邪魔させる気はない!!」

細身の零司に一体どんなそんな力があるというのか、厳しい訓練に耐え、鍛え抜かれたその男を持ち上げたのだ。

本来ならその男も、零司を殺そうと思えばできたはずだ。しかしそれができなかったのは謎の怪力によって彼が持つ電気を帯びた警棒ごと上に持ち上げられたからである。そして彼は投げられ、既に吹き飛ばされてダメージを負った他の隊員たち同様、動けなくなった。

だが彼らが復帰するに1分もかからなかった。

零司は壊されたモーター式ローラースケートを捨て、楯無に応急処置をして走ってその場から退避する。だが楯無を抱えている以上はあまりスピードを出すことはできず、すぐに復帰したアンネイムドの隊員たちは零司を追ってきた。

『そこまでだ。どうやら、貴様には情は必要なかったみたいだな』

一般人にいともし簡単にやられたことに、彼らのプライドは粉碎されてしまった。故にもう彼らはただ目の前の障害を排除するためにしか動いていない。

だが零司とて諦めていなかった。一体どこから調達してきたのだろうか、何かを放つて逃げ出した。放られたそれは爆音を鳴らす彼らには効かなかったようで、再び颯ごっこが始まる——そう思われた。

「お前らあああああ!!」

突如、上から何かが乱入してきたのである。

その気配に気付いた零司は少し速度を上げ、近くの曲がり角に身を潜めた。後ろでは爆発が起こり、風を切るような音がしたような気がした零司の前に白い機体が現れる。

「誰だ、お前は。どうして楯無さんと一緒にいる」

「……僕は敵じゃないよ。ちよつと彼女に用事があつて来たのさ」

目の前の存在が何者か気付いた零司はそう言うが、その存在が自分の言葉を信じるか半信半疑だったがそれよりも楯無をどうにかした方がいいと思つた零司は言葉を続け

る。

「それよりも織斑君。君はさっきの奴らの見張りをしてくれ。僕は彼女を保健室に連れて行く」

「だったら、俺も行くぜ。アンタだけじゃ、他のがいた時に対処できないだろう？」

そう言われ、零司は本気で迷った。

目の前にいる織斑一夏なる男子は零司が戦えることを知らない。だがこれまで様々なものを開発してきて、それを今役立てられることができるかと証明された。が、戦えるのはあくまで「一人」だったらの場合である。今は楯無というお荷物がいる、場合によっては守り切れないかもしれない。

(長持ちする盾は必要だね)

そう結論した零司は一夏に言った。

「じゃあ頼むよ」

「ああ、任せろ」

快諾する一夏。それを見た零司は内心、邪悪な笑みを浮かべた。

——ああこいつ、きつと女たちにチャホヤされてきたんだ

e p. 2 その思い、君の届け

刀奈さんを無事送った僕たち。すると、刀奈さんは眠たいのを無理やり我慢するかのよう地下に織斑先生つて人がいると教えてそのまま眠った。何故か心配そうに僕を見たけど、気にしないで言つて地下に行かせた。

「で、君は一体何者なんだい？」

避難せずに待機していた養護教諭に尋ねられたので、証明書を見せる。

「……まさか、君みたいな子に許可が出るとはね」

「今回のことは関係ありませんよ。僕も巻き込まれただけです」

そう言うが、訝し気な視線を送られるだけだった。

「すみません。ちよつとトイレに行つてきます」

ちよつと居心地が悪くなったので、そう申し出て僕は部屋を出る。

そして弾倉をチェックして、今度は前髪を上げるためにカチューシャを付けた。……

いや、正しくはカチューシャ型のヘッドセットだ。それを起動させて僕は周囲を探る。

(……やっぱり)

たぶん追つてくると思つていた。

「プライドですか？」

「そうだ」

そう言つて銃を抜く男性。銃種は詳しくないからどんなものかわからないけど発砲してきた。だけど僕だつて準備を怠つているわけじゃない。僕専用のバリアが銃弾を防ぐ。

「君は一体何者なんだ。どうしてISのようなバリアを持っている」

「ISのような、ですか。その認識は間違つていますよ」

左腕に砲台を装備して素早く空気砲を撃った。

すると男性が後ろに押し返される。

「そろそろ明かしてもらおうか。君は一体どこの所属だ」

「所属なんてありません。中二病を患つた一介のからくり技師です」

もつとも、僕の装備は非現実的だ。

砲筒はもちろんのこと、何よりも僕の周囲に漂う3つのシールド。このシールドを浮遊させるのに使つたのは、「電磁浮遊」だ。

古来より、物体が宙を浮いていた理由として重力に逆らうほどの力場を発生させてきた。僕の場合は安価で済ませたかつたこともあつて、莫大の電気を必要とするけどその分命を預けられる「電磁シールド」を開発したのである。浮いているのは床が離れた

くなる種類の電気を発生させて浮かせているのである。……その分のコード量は半端ない。

「まあいい。あの尻軽女ではなく君を捕らえて吐かせばいいだけだ」

「捕らえる、ですか。できればいいですね」

弾質を砲筒外側のレバーで設定する。この砲筒もかなり特殊で、内部でレールガンのように空気を圧縮して撃ち出している。

もつとも、連射式ではないのですぐに接近された。振り下ろされるナイフを砲筒で受け止め、リストバンドに隠していた大型破壊爪を出して顔を掴み、投げた。

「仕方ないですね」

相手が本物を使うなら、こつちだって本物を使うしかない。

腰のベルトの裏に隠していたグリップを出す。

「死ね、ガキー！」

接近してきてもう一度振り下ろされるナイフ。僕はそれをグリップで受け止めた。

「そんな小さいので——」

相手の男は言葉を切る。それもそうだろう。今も自分の首にヒカリモノが接近しているとあれば誰だって話をしてる余裕はない。すぐに距離を取ってくる。だが、相手はそこで逃げることはない。

——ピッ!

間一髪で避けたけど、かすったから血が滴り始めた。

「勘のいい奴だ」

「……ここで死んだら、彼女たちがあらぬ批判を浴びそうだから死ねないですよ」

実際、ありえそうな展開だから怖い。僕がこれまで何をしてきたのかあの両親は知っ
てしまっているし、そのせいで死んだとかなったら本気で怒り狂いそうだ。……まあ、
それだけ大事にしてくれている証拠だと思うけど。

「だが、こっちにはあずかり知らぬことだ」

そう言つて男性は僕に銃口を向けて引き金を引く。飛び出す弾丸を勘でナイフを振
り抜いて彼方へと弾いた。

「やはり、お前は異常だ。異常すぎる」

酷い言葉ようだ。

「僕はそのつもりはないんですけど——ね!」

接近して相手の首を狙つて刃をむき出したナイフで振るう。距離を一度取られたけ
ど、すぐに詰められて腹部を蹴り飛ばされた。

(や、やばい——)

鳩尾に入った。それに、痛みで体が動かない。

こんなところで倒れるわけにはいかないのに。こんなところで、倒れるわけには……
いかない。

ナイフを投げて腕に刺す。今の僕を見たら誰だつて正気か疑うけど、僕は正気だ。

「お前、何の真似だ」

「僕は倒れるわけにはいかないんです。相手が誰であろうと、勝たないと」

誰に強制されたわけじゃない。傍から見れば僕が勝手に動いたことだ。

でも、その暴走で誰かが被害を被るのはごめん。

「それに試してみたいじゃないですか。僕の中二病が本物相手にどこまで通じるか」

そう言つて僕は跳び蹴りを繰り出す。それを叩き落とした男は僕に向けて銃を向け

るが、遅い。

「果てろー!」

左腕に付いている砲筒を向けて発射する。

砲筒は通常の空気砲の他にもう一つ機能が付いている。それは弾丸を装填した時の機能だ。

一般的だが攻撃力を持った空気を圧縮して撃ち出す機能だが、僕が開発した弾丸は一般的なものとは違って、着弾と同時に爆発する仕組みだ。

周囲を破壊するほどの爆発。それによって発生した爆風で僕は後ろに下がる。

「まだま——」

男は無事だったようで僕を攻撃しようとした瞬間、銃声と共に僕らの足元に銃弾が埋まった。

「誰——」

銃声が繰り返される。僕は上を見ると、知り合いがライフルを構えていた。

「ちっ。増援か」

「予定とは違いますが、捕獲させてもらいます」

素早く砲筒にとっておきを装填して男に向かって撃ち出した。

男は回避できずに浴びてしまう。超強力とりもちが瞬時に男を動けなくした。

「何を考えているんですか、あなたは！」

祝！ 男の身でありながらIS学園の校舎内に入りましたよ！ なんて思っていたのは束の間。僕は助けてくれた知り合いこと布仏虚さんに怒られていた。

「ろくに戦闘訓練を受けていないあなたが、よもやあんなことをしでかすなんて。一歩間違えれば死んでいたんですよ!」

「で、でも、仕方なかったんですよ……。だって……」

「だって何もありません!」

それから説教は軽く3時間続き、胸が大きい女性に止められてからは事情聴取が行われた。担当した人は美人だけど男がいなさそうな感じだったけど、僕が来た目的を言うのと、何故か睨みつけられた。

「……それで、更識からは極秘データを持ってきているはずだと聞いているが……」

「あ、これですね。でも渡しませんよ」

「そうか? まあ、極秘ならば仕方あるまい。だがな、争いの火種を持ち込むなよ」

「わかりました」

そう言って僕は目的の人物を——更識簪を探す。

これまで何度か失敗した。でも、今度こそは——今度はちゃんとISに適応するマルチロツクオン・システムになっている。本もちゃんと買って勉強もしたんだから。

(……………そう言えば、今どこにいるんだろう……)

IS学園は広い。それに基本的には男性禁制だから変に行動すれば注目する。ここは手早く渡して帰りたい。そう思った時に彼女を見つけた。

「あ、かん——」

呼びながら前に進もうとすると、目の前には僕がさつき知った男がいた。織斑一夏だ。

正直、あまり興味なかったけどこの状況はどういう——

——その時聞いた彼女の声は、僕にとつてはとても耳障りな感じがした

とても嬉しそうな声。僕には向けてくれなかった声だ。それがどうして……あんな男に？

そう思った僕はどんな返事が来るのか、それがもしかして嫌な物じゃないのかと思
い、黙ってその場から去った。



——カラント

何かが落ちた音に遮られ、簪はその方向を見る。

「ん？ 何の音だ？」

「……さあ？」

「ちよつと見てくる。さつきも侵入者がいたから、もしかしたらそれかもしれない」

「……うん」

戦闘態勢を取った2人はゆつくりと接近し、音がした場所に近付く。だがそこには――

「どうしました？」

「虚さん……」

「いえ。さつき物音がしたので侵入者かと思って……」

「……そういふことですか。すみません。先程ボールペンを落としたのでその音でしよう」

「あ、そういうことですか」

「では、私はこれで」

虚はその場から立ち去り、自分の部屋に向かった。

翌日。少し空いた時間を使って虚は自分のパソコンを起動させる。ステイック型メモリを取り出して起動したパソコンに差し込む。中にはデータが入っており、彼女は躊躇いなくそのデータを開いた。

騒動から2日が経過した。

生徒会は処理で忙しく、遊ぶ暇がないほどだ。そうなれば——約一名が突発的な行動を起こしたくなる。

「そう言えば虚ちゃんは？　本音ちゃん、何か知らない？」

「そーいえばー、やることあるって言ってましたよ」

そんな会話を2人がしていると、ドアが開かれる。話に出ていた虚が入って来た。

「虚ちゃん、どうしたの？　今忙しいんだからあまり勝手な行動は慎むように」

「会長、たまには手鏡でご自身のお顔を確認することも大事ですよ」

「うっ……。それで、どうしたの？　虚ちゃんが来るのが遅いってとても珍し——」

会長——更識楯無は口をつぐむ。

虚が普段以上に真面目な顔をして楯無を見ていたからだろう。幼馴染であり、自身の側近でもある虚の真面目な顔でも特別——それこそ何らかの問題があると思ったようだ。

「話して頂戴」

「わかりました。襲撃当日。零司君を探している所におそらく彼が所持していたと思われるメモリスティックを発見しました」

そう言つて虚はスティック型のメモリデバイスを2人に見せる」

「……確かに、それは零司君のものね。見たことあるわ。……もしかして、その中に例のシステムが？」

「はい。3つほど」

「……3つ？」

「これまで、零司君は3回ほど見せに来ていましたから……それで例のシステムですが……すべて完成していました」

「!？」

2人はその言葉に驚きを見せる。2人も零司がこれまでマルチロックオン・システムを作成していたことは知っていたが、これまでISの知識はからつきしでおそらく触り程度しか知らない男が完成させたという話なのだから。

「もつとも、素人らしく言語を間違えたり、一部修正する必要がありますがすぐにも可能です」

「じゃ、じゃあすぐにしませう！　そうすれば簪ちゃんもちゃんとした第三世代機を持つことができるわ！」

「……………しかし、一つ大きな問題があります。ソフトを移植するには——本人が知るパスワードを知る必要があるのです」

———　　「そ、そりやそうだ!!」

心の中で頷く楯無と本音。そこで本音はあることに気付く。

「え？　じゃあ何でお姉ちゃんはマルチロックオン・システムが完成しているってわかったの〜？」

「私の誕生日を入れたら普通にアクセスできたわ。でも、あくまでも仮だから本アクセス権が必要なのだ」

「なるほど〜」

「そして問題が一つ。おそらく零司君は織斑君と簪様が会っているところを見て、簪様が織斑君に惚れていることに気付いてしまいました」

「え？　何か問題があるの？」

「……………気付いていないのですか？　零司君は簪様の事が好きなんですよ？」

それを聞いた楯無と本音は固まった。

「……………ど、どういうこと!? いつから?!」

「どういうことよ虚ちゃん! 教えて!!」

「……………はあ」

心からため息を溢した虚は頭を抱える。

「まあ、普段はそういった感情を表に出しませんし無理はありませんが」

「で、いつからなの!?!」

「……………ほとんど一目惚れだったかと」

そう言われて楯無はこの世に絶望したようで、膝と手をついてしまう。

「私っていつもそう。どうでもいいものばっか手に入って肝心の欲しいものは中々手に入らないの……………何で簪ちゃんなの? 昔はあんなに甘えてきたのに……………私の方が胸が

大きいのに!!」

「……………はあ」

虚は自分の上司が異様に弟分である零司に入れ込んでいたことは知っていたが、まさかここまでだとは思っていなかった。

「まあ、あなたが誰を好きになろうかこの際どうでも良いのですが」

「え? 扱い酷くない?」

「それよりも、今は零司君がこれほどの技術力を持つている事が問題なのでは？」

平坂零司——いや、平坂家は更識家の武器庫とも言える存在だ。

祖先からの取り決めなのか、非常時では常に更識家に援助をしてくれている。更識家としても個人的に店舗を経営してはいるが、それでも平坂家が所有する「平坂コーポレーション」という大企業には遠く及ばない。

ある意味では御曹司として生まれた零司だが、彼が持つ才能は幼少の時より発揮されていて、彼女らはその技術力を既に知っている。

「近い内に例の催しも行われるようですから、今は抜け殻みたいな状態になっているとはいえ油断はできません」

「……今どんな状態になっているって言ったの？」

「抜け殻みたいな状態です。授業もただ座っているだけで呆然としているみたいですし、注意されても聞いていないのか正すことはしないみたいです」

それを聞いた楯無は檄を飛ばすという事を口実に会いに行こうとしていたが、虚に止められてしまった。

e p. 3 早坂零司という少年

IS学園から帰ってきて数日が経った。

僕はしばらく時間を無駄にしていたけど、自分がするべきこと——したいことを思い出した。だから僕は授業中とはもかく休み時間の大部分をそれに充てていた。

「まあ、元気になった良かったけど……さつきから何を描いているんだよ」

「モデルかな。どういふものを作りたいかっていう設計図。これがないと意味がないからね」

と言っても、作成中に所々弄るからあまり意味はないかもしれないけど。

パンを左手に持って作成していると、スピーカーから放送部がいつもしているラジオではなく連絡が流れる。

『1年3組 平坂零司君。至急、応接室に来てください。繰り返します。1年3組 平坂零司君。至急、応接室に来てください』

………応接室？

?
これまでの授業態度が悪くて呼び出されるのはわかるけど、何故応接室なのだろうか

疑問に思いながらも五反田と御手洗に挨拶してからパンを呑み込み、口の周りを拭いて移動する。

(一体何なんだろう……?)

そこまで怒られる謂れは……あるけど、成績含めて問題は起こしていない。だとしたら呼ばれるとしたら……

(どうしよう。心当たりがない)

いや、一つだけある。僕がIS学園に行ったことだ。

もしそれで気に入らない女性がいたなら、それは女にとってメリットもあるのだからと説得するしかない。そう思っていたけど入ってみると——予想外の人たちがいた。

「平坂零司君、ですね。初めまして。私は日本政府の者です」

「……………は、初めまして……………」

——日本政府?

え? どういうこと? 一体何がどうなって日本政府が出てくるの?

「あの、政府の人が一体何の用でしょうか? 僕は他国をクラッキングして不利益を与えたとか、そういうことはしていませんよ?」

「いえ、そういう話ではありません。ただ、我々のプロジェクトにご協力いただく思い、ここに訪れました」

よく見ると、ここにいるのは理事長と学園長だけで担任はおろか学年主任もない。一体何がどうなっていると言うのか……？

「平坂君のこれまでのテストや、先日行われた全国テストの内容を拝見させていただきました。どれも素晴らしい答えを導き出して、特に全国テストでは誰にもない発想をなさっていた。故に——我々はあなたを誘いたい。我々のプロジェクトに」

「……………プロジェクトに？ っていうか、一体何をするんですか？」

まだ何も聞いていないからどう答えれば良いのかわからない。

「失礼。まだ説明をしませんでしたね。我々のプロジェクト。それは——この世に人型兵器を生み出すのです」

「……………な、何を言い出すかと思えば……………この世に人型兵器を作るって……………そんな……………」

ダメだ。笑顔が隠し切れない。

僕の顔が笑っているのがわかる。だって仕方ないじゃないか……………そんなのさあ。

でもまずは、ここで冷静にならないといけない。もしここで舞い上がってしまったら自分に不利になる。

軽く深呼吸をして、僕は冷静になって口を開いた。

「で、その話を受けるにあたって、僕に何かメリットはあるのでしょうか？」

「そうですね。現段階で判明していることですが、まずは前金として100万円を振り込ませていただきます」

「!？」

高校生には過ぎた額でしょ!？」

前金100万円はいくら何でも高すぎる……。それほどまで、僕の能力を知っているのかそれだけの価値があると思っているのだろうか。

「先に言っておきますが、会社の技術は使えないと考えてください」

「ええ。それはわかっております。あなたはただ、全力を出してくださいさえいいのです」
……少し引つかかるけど、今は黙っておこう。

「話を続けますね。契約期間はまずはお試しとして1か月。仕事はIS学園でしていただきます」

「……………IS学園って、あの…………？」

「はい。4月に織斑一夏君が入学したIS学園です」

しかしどうしてそんなところで——ああ、そういうことか。

この人は——いや、この人を使いとして寄越した人はISに勝てるような兵器が欲しいのだろう。もしそのロボットがISに勝つようなことがあれば、女性優遇制度を無くすことができる可能性を考えたかもしれない。

「……………なるほど。では次に質問ですが、作業者は日本人だけででしょうか？ もしこのことが公になれば、間違いなく各国は黙っていないと思いますか？」

「良い質問ですね。当然ながら、このことは既にアメリカをはじめ、各国に通知し参加を呼び掛けております……………ですが、今のところ他の国の参加は難しいようです……………」

「まともに動ける経験があるならばともかく、こちらに言わせてもらうとロマンを求められない人が来たところで邪魔ですからね」

理事長が何かを言いたそうに口を開くけど、僕はそれを腕を上げて制した。

「ところで、設計図はどういうものがあるのでしょうか？ 指定する全長とかを知りたいのですが」

「……………設計図はまだできていないのです。ただ、全長はできれば5mから最高でも10mで収めて欲しいというのがクライアントの要望でして……………」

「……………待ちたまえ」

口を挟んだのは理事長だった。

「さつきから聞いていればおかしなことばかり。君の言うクライアントとはまさかI Sで戦わせる気かね?! 一学生の彼にその手を担わせると?! もしそれで彼の命が狙われたら君たちはその責任を取れるというのか?!」

「それに関しては問題ありません。万全の警備網を敷き、全力で彼を守ります!」

「だが……それに平坂君、まさか君はこの話を乗る気じゃないかね!」
「乗る気ですよ」

あつさり答えると理事長は呆然として僕を見る。信じられない、という言葉が顔に書かれているように見えた。

「あなたとしてはその方が良いかもしれませんが、僕には僕の目的があるので条件が合うならば話を受けようと思っっています」

「な、何だ……その目的というのは……」

「ISを超える兵器を作ること」

ISは確かにすごい。そのスペックは確かに他の兵器を圧倒していると言えるだろう。

だけどそれはさらなる不完全な社会を生み出した。

「ISが兵器としての価値を失えば、時間がかかるとはいえ世界は本来あるべき姿に戻るでしょう。おそらくあなたが言うクライアントは今の社会を良しとしないと思っ
ている。それもそうでしょう。理不尽な理由で貶められて、尚且つ無罪をいくら主張して
も理不尽な証拠を突きつけられて犯罪者となるのは嫌ですから」

過去の資料を漁れば、明らかにおかしい点は存在している。むしろ何故詰問しなかつたのかという証拠が。だっておかしいでしょう? 最初から痴漢している現場を撮影

しているなんて。

「それにロマンに犠牲はつきものですよ。もっとも犠牲になるのは僕じゃありませんが」

とりあえず、僕は理事長と学園長には退場してもらった。そうじゃないと後から色々と言われる恐れがあるし、正直なところ邪魔だ。

「よろしいのでしょうか？ 彼らに退場してもらおうというのはあなたにとってはかなり不利に——」

「なるならなるで構いません。社会勉強、させてもらって良いですよね？」

大人がいなくて不利になるって言うなら、僕の器はその程度というだけのこと。ただ——

「ですが、私以外に色々な面倒が絡みながらも確実な利益が出る存在はあるでしょうか？ 政府の人間だと言うのなら、私の背景も既にご存知でしょうか？」

「……………ええ。ですがこれは賭けでもありません。もし一か月でできないのであれば先に断っていただけと——」

「可能ですよ。僕の技術力と僕の下に付く度量を持つ人間が50人程いれば。要望通り、10m以下の者を。ですが、それをする前にまず私の親と話をつけなければいけませんので、すみませんが随伴していただけないでしょうか？」

何せ一部は会社のものでして扱われるものがある。その許可を取るためにもこの人はもちろん、もしくははこの人以外に事情を把握できる人が必要だ。

政府の人は僕の頼みを聞いてもらい、平坂コーポレーションに付いてきてもらった。

父に会いに来た理由は技術の使用許可はもちろんのこと。だけどそれ以上にあることが必要だ。

僕は政府の人の話と併用して、あることを頼みに来た。

「ということです。父さん、IS学園に転校させてください」

そう。息子として、そして何より学費を出してもらっている関係として筋を通す必要はあるのだ。

IS学園に通うにしても、そしてそれが偽りだとしても一部は出してもらおう必要がある。なので、そのお願いをしに来たのだ。

「……………そんなことだ。話は軽く聞いていたが、まさか本当に零司が選ばれて本人が乗り気だとは……………」

「……………父さんの言いたいことはなんとなく想像つくけど、僕が今したいことはISを超える兵器を作り出すことなんだ」

それを聞いた父は嘖き出した。

「失礼。……良いだろう。ＩＳ学園に転校することを許可しよう。そしてコーポレーションで使用されている技術が零司が携わるモノに使われていたとしても、少しは目を瞑ろう。だが、息子の安全は保障してくれるのかね？」

「ええ。それはもちろん。責任を持って息子さんを守らせていただきます」

その返事を聞いた父は満足そうに頷いた。

「結構。では今日のところは——と言いたいが、零司、席を外しなさい。彼に少し話がある。会議室の一室を確保したのでそこで待つていなさい」

「わかりました」

父さんからのメールでその会議室のマップが渡される。僕はそこに先に言って待つていると、少し顔を青くした政府の人が現れた。

「お待たせしました」

「その様子じゃ、とても面白い話をされたみたいですね」

すると政府の人の口がわずかに動いた。彼にとってはとても面白くない話だったに違いない。

「ええ。とても為になるお話でした」

「そうですか。では、僕から頼みがあるのですか良いですか？」

「何でしょう?」

僕は笑顔を浮かべ、はつきりと言った。

「もし女性がI Sを使用して襲撃した場合、撃退時に確保したコアを私が保有すること、そしてプロトタイプを作り上げた後、僕専用の機体を作る許可をください」

まるで地獄に叩き落とされたような絶望感を漂わせる政府の人。どうやらこればかりは予想していなかったのかもしれない。いや、もしかしたら父の話の通りになってしまつて焦っているのかもしれない。

もしかしたら話自体がなくなると思つたのは杞憂で、もし要求期間内に機体が完成させられなかったら賠償金が発生することになると言う話になり、さらに前金が70万に減額になつただけで僕専用の機体開発とコアの所有権の移譲は許可された。



零司から政府の人と呼ばれた男性——舞崎晴文はため息を吐いた。

苦勞して卒業したレベルの高い大学から官僚職につけた——と思つたら最初の仕事兵器開発ができる人間を探し出して、ISを超える兵器を生み出させるといふものだった。明らかに罨じゃないかと、自分の立場を危うくする人間の仕業かと考えた。

實際、ISの登場から10年経つたがその間に各国は秘密裏に人型兵器を開発しているが、それを實現させたところはいない。晴文は諦めたある日、とある噂が耳に入ったのだ。

——藍越学園に、天才がいる

それも篠ノ之東に匹敵するほどだと聞いた晴文はダメ元でその噂の少年を調査した。聞くところによると、日本の中でもトップクラスの技術力を持つ倉持技研ですら放棄したマルチロツクオン・システムを完成させたということを知りつけた時は是が非でも引き入れたいと思つた。

第一印象は、高校1年生の平均身長を下回る小柄さだった。少し不安になつたが、平

坂コーポレーションという、世界的に有名な大企業の息子だという事で上手く行けばその技術力の手に入れられるかもしれないという思いで頼んでみたが——その父親に言われて呆然とした。

「実は、我が社の技術力の90%はあの子が生み出したものなんです。あの子は優しいが容赦のない残虐性を秘めている。なので、あまり敵に近付けさせないでください」

——死人が出ますよ

その死人第一号は自分ではないかと思った晴文は、できる限り上に善処させようと心に決めた。

例えば期間だ。いくら晴文でも一か月やそこらで人型兵器を開発できるとは思っていない。二か月……いや、三か月ほどの期間を見て再申請しようと考えた頃に、零司に呼び出された。

「……………これは何でしょう?」

「10年前に作ったコックピットですよ。まあ、最初は簡単なものだったんですけど、父が僕に甘くていつも欲しいものを聞いてくれるので、ついつい甘えちゃって」

試しにさせたもらった晴文だったが、一瞬で負けてしまった……………のだが——

「すみません。難易度を「リアル」にしたままでした」

「……………そのリアルというのは?」

「実際の戦場を想定しています」

最高記録に「評価S」が見えていたが、夢だと思いたかった。

だが晴文は同時に思う。自分とは違い、普通よりも優遇された人生を送った人間が戦場の何を知っていると言うのだろうか、と。

その顔を感じたのか、零司は笑みを浮かべた。

「確かに僕は実際に人が死んでいく姿を見たことはありません。このリアルの設定も所詮は空想上のモノでしかない。……じゃあ早速挑んでみますか？ このゲーム超難易度の物を」

「……………いや、いい」

だが晴文は思い知るのである。早坂零司が見えたものは——ほんの序の口でしかないという事を。

e p . 4 編入したよ、権力で

(……………まさかこんなことになるとは思わなかったな……………)

IS学園の制服に身を包んだ自分の姿を見て、僕はふと笑ってしまった。

ISは普通、女にしか扱えない。今年は男子生徒が入学できたけど、僕を含めISを動かせる人間はその男を除いて0なのだ。そして僕は義務教育課程を修了しているとはいえ、元々高校生ということもあつて学生としてIS学園に入る。異例中の異例だろう。異例度というものがあれば僕は織斑一夏を超えることになる。

(……………なんて、妄想はともかくとして……………迎えが遅いなあ)

既にIS学園の入り口にいるんだけど、誰も来ない。もしかして忙しいのだろうか……………?

(まあ、ここは問題児が多いって話だし、おかしくはな——)

——ドンッ!!

突然の爆発。それを見た僕はこれからの生活に少し不安を覚えてしまった。

突然の転校。当然、緊張がないと言えば嘘になる。僕だって緊張の1つや2つするさ。人間なんだから。

周りから興味的な視線を注がれる。正直、そう言うのは苦手なんだ。

「初めまして。藍越学園から事情があつて転校してきました、平坂零司です。好きなことは何かを作る事。嫌いなことは場を乱すことです。価値観は異性という事で合いくいかもありませんが、よろしくお願いします」

できるだけ無難に自己紹介を済ませる。みんなは僕が男という事もあつて警戒しているみたいだ。

(……それが普通か)

ISが出て以降、強姦事件は頻繁に起きている。理由は同じ男子として理解できなくもないけど、流石にそれはやり過ぎだろう。

「ん？ それだけか？ 舞崎からお前から連絡があると言つてあつたのだが？」

「え？ ……ちよつと待つてください」

一度教室に出て、舞崎さんに連絡する。

『どうしました?』

「少しお聞きしたいのですが、あの事は言つて良いのですか? どうやら織斑先生はそのつもりらしいですが」

『ああ、あの事ですね。いずれ隠していてもバレるでしょうし、今の内に打ち明けても構いません。大きさに隠すこと自体が難しいですし、あなたは今後とも注目されるので』
「……………わかりました」

確認も取れたので、僕は教室に戻る。そうか。良かったんだ。

「確認は取れたか?」

「はい。では改めて……………」

空気を変えるために咳払いした僕は言おうとした瞬間、とある少女を見つけた。
…………つと、危ない。今は言う事があるんだつた。

「詮索されるのも面倒なのでここで言つてしまいますが、僕はISを使うことができない普通の男です」

途端にぎわめく。どうやらそれは知っていたらしい織斑先生は特に驚きはしない。

「それ、どういうこと?」

「じゃあ何でここに入学できたつて言うの?」

まあ、騒ぐよね。それは仕方ないし。

「僕がここに来たのはあるものを開発するためです。この学園は最新設備が揃っていますし、ここは一応は学園ですから僕に気を遣った、というところでしょう。まあ、仕事の手伝いしつつ、学生として青春を謳歌しろってことでしょね」

もしくは、今の内に女の子に慣れさせるのが目的だったりして。無い話ではないのがちよつと怖い。

「ま、推測はともかく、これからよろしくお願いします。って言ってもこれから会議などで早速席を外すんですけどね！」

「ん？ もうそんな時間か。行つていいぞ」

「じゃあみなさん！ シーユー、アツゲインですっ!!」

そう言つて僕はドアを開け放つて教室を出る。そろそろ行かないと本当に遅れる。

「……………そういえば、今のつて何かのアニメでやっていたような……………」

そんな声が聞こえたけど、意外なことにそれは僕の知り合いじゃない女の子の声だった。

なんとか間に合った。だけど既にみんな集まっていて、入るのが億劫だと言っておく。

僕は技術顧問というか、とりあえず開発さえできれば良かったんだけど、いつの間にか開発主任という事になっていたけど、自己紹介には「相談は僕ではなく舞崎晴文氏にお願いします」と擦り付けたし問題ない。

「さーて、バリバリ作るッゾー！」

つて言っていたのが今から8時間前だったりする。

「平坂君、そろそろ5時なんだけど……」

「えっ？ もうっ？」

気が付けば時計は午後5時を指している。どうやら打ち合わせの後はずっとプログラムを作っていたらしい。まあ、こういうことは割とあることだ。

僕は背筋を伸ばして辺りを見回す。予め設計図とかは作って渡しておいたけど、流石に初日では作業はあまり進まない。

「じゃあ、そろそろ時間だし今日は解散つてことで！ わかっていると思いますけど、I S 学園生は襲わないでくださいねー」

全員から「誰が襲うか！」という声が上がったけど、実はあまり信用していない。

「さーて、テストパイロットの方はどうです？」

「概ね順調、と言いたいですかね……初級レベルの最終段階で苦戦してまして……」
「なるほど。でも今日は休ませてください。あんまり根を詰めたところで成長はしませんから」

そう言つて僕はテストパイロットを休ませるように指示を出す。実際、シミュレーションとは言えかなり本格化させているから意識の消耗は激しいはずだ。僕もかなり消耗したしね。

「じゃあ舞崎さん、後はお願ひします」

「ええ。ゆっくり休んでください。それとこれがあなたの部屋番号とその鍵です。寮の場所はこれに書かれています」

そう言つて僕はメモと鍵を受け取った。鍵のキーホルダーの一つにタグがあり、どうやらそこが僕の部屋なようだ。

撤収作業を整えている周りを見無視して先に寮へ向かう。今、僕らが間借りしているのは第六アリーナの整備室。後々はそのアリーナで試験を行つて、来るべきISとの戦闘に向けて製作中、というところだ。

今回の人員は兵器の整備技師や開発室の人間が200名。国籍問わず送られており、プログラマーも僕以外で100人。今日はテストパイロットは1人だけど、明日はあと1人来る予定だ。なお、全員男でどれも20歳以上。たぶん20歳未満なんて僕ぐらい

だろう。中には不満そうに僕を見る人間がいるから、もしかしたら裏切るかもしれない。

（まあ、他の人に裏切りは死をもつて償うように言っているから、問題ないだろうけどさ）

実際、どうなるかわからない。今は様子を見ながら僕は僕の仕事に専念するしかないか。

そう思いながら地図の場所に移動すると、何故か生徒たちがチラホラと見かけるようになってきた。

（……………あれ?）

疑問を感じつつ、とりあえず進む。確かに地図通りに渡されたけど、ここは確か学園生用の寮のはずだ。

とりあえず邪魔にならない場所に移動して舞崎さんに連絡すると、

『ああ。あなたの部屋は学生寮ですよ？ あなたがIS学園に編入という形で入ったのって、実はそのこともあるんです』

「……………うそん…………」

『残念ながら現実です。何も恋愛を禁止しているわけじゃありませんから、いつそのことそこで彼女でも作ってみてはいかがでしょう?』

「……………はあ。まあ、わかりましたよ」

要するに諦めれば良いのだろう。

『それに、むき苦しい男たちと生活したいと言うのなら、仕方ありませんが——』
「わがまま言つてすみません。百倍マシです」

たぶん周りから見れば僕は真顔になってているだろう。確かに男の中で寝泊りとか冗談じゃないからね。どうせ年上だし僕ったら特殊だし、話は合わない可能性が高い。

(今はともかく、明日に備えて養生しよう)

そう思つて施設に入る。既に帰っている生徒もいて、その人たちからの視線が辛い。
(確かにI Sを動かせない奴が生徒としてこの学校に来るのは異例だしねえ)

しかも今後現れることがないタイプのものだ。以前はI S学園の生徒と一緒に学ばせて整備士として育てると言う計画もあったけど、強姦事件が多発してからというもの無くなった。

それほどまで男女間での認識というか、警戒というか、溝は深まっているわけだ。

(僕には関係ない! ……とは言つても、今後の事を考えれば仕方ないか)

それに基本的に僕は女を信じていない。一部は別にしても信じるに値しない存在だというだけだ。

というのも以前、藍越学園で夏休みの宿題としてとある課題を班で行つたけど、その

内の1人がボイコットしたのだ。それだけならまだ良かったけど、終了時に集まって得た儲けの取り分に口を出して来た。

——私も班の一員なんだから、もらう権利はあるわよね？

最初は出てきたけど、バイトなどを理由に出て来なくなつた。元々使えないという事もあつていなくなつた時はせいせいしたと言うのが本音だけど、それでも5人班で僕以外の3人はちゃんと出て自分なりに作業をこなしたんだ。途中で逃げ出した奴に渡すつもりはなかつた。そのことで揉めに揉めた結果、その女にも金は払うことになり、生徒の一人——僕の親友とも言える奴が退学になつた。

そういう事もあつて、僕は基本的に他人を見下している。

(ここにいる奴らは、少なくともその気があつて来ているんだから大丈夫、か)

仮に彼女らにとつて僕らの存在が邪魔だとしても、文句を言わせる筋合いはない。僕らは僕らで好きにやらせてもらうさ。

と、自己完結していると指定された部屋に着いたので部屋番号を確認する。うん。同じ1560だから問題ない。

鍵を挿して捻り、施錠が外れたことを確認してドアを開けると、

「お帰りなさい。ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ それとも、わ・た・し？」

ドアを素早く締めて改めて施錠をしてもう一度鍵の番号とドアに付けられている番

号を確認する。うん。間違いない。

深呼吸してもう一度施錠を解除してドアを開けと——

「お帰りなさい。私にします？ 私にします？ それとも、わ・た・し？」

もう一度ドアを閉めて施錠。うん。間違いない。

僕はとある場所に連絡することにした。

「あ、虚お姉ちゃん？ 今かた……じゃない、楯無お姉ちゃんが——」

ドアが開いて僕は素早く部屋の中に入れられ、ドアを閉めながら僕の電話機を奪った楯無お姉ちゃん……もとい、楯無さん。危ない。もうちよつとで幼名を言っちゃうところだった。——じゃない。

「あ、虚ちゃん。別になんでもないわよ。じゃあね」

そう言つて楯無さんは電話を切った。

改めて下から楯無さんの姿を確認する。髪は湿っていて身体はバスタオル一枚。角度的に見えないけど、たぶんパンツは履いていない。

たぶん彼女のファンはこの状況を見たら間違ひなく僕を殺しに来るだろう。そんな羨ましい状況に僕はいる。

「焦ったわ。いきなり虚ちゃんに連絡するなんて……」

「いや、いきなりそんな格好で目の前で立たれたこつちの身にもなつてよ」

とはいえ、眼福ではあるのは確かだ。この状況はまさしく恵まれて……じゃなく、

「何でこの部屋にいるの？」

「私もこの部屋で暮らすのよ」

「へー。そうなん………はい？」

年頃の男女が同居？ しかも相手はあの更識家の当主？ もつと言えば彼女の父親は未だに娘離れできない親ばかな父親？ そんな馬鹿な。

「謹んで辞退させていただきます」

「え？ 嫌なの!？」

「嫌というより……死にたくない」

僕は知っているんだからね？ というか未だにこの人の父親の憤怒の形相はトラウマだからね！

実はだいたい前に一度誘拐されているけど、内部犯で捕まった人たちはそれ以降見かけていない。後は言わなくても理解できるはずだ。

「バレたらどんな極刑で殺されるだろうか………」

「大丈夫よ。いざという時は私も弁護するし……それに私の両親はあなたの事を気に入ってるから大丈夫」

「確かに雪音さんは優しいもんね」

本当なら「おばさん」と呼ぶべきところなんだけど、流石にそれじゃあ問題かと思つて今は名前で呼ばせてもらつてゐる。考えてみれば、自分の母親より母親をしているのではないだろうか。

ちなみに更識家内では雪音さんを狙つている男衆がいたりする。美人だし仕方ないかもしれないけど。

「つて言うかどうして同居？ 普通そこは織斑君じゃない？」

「別に良いけど………一時期男子と性別を偽つて入学した女子がかなり悲惨な目に遭つてたつて話よ？ それに、私じゃ……嫌？」

「そういうわけじゃないよ」

「じゃあ何が不満なの？ もしかして簪ちゃんと一緒にの方が良い——」

「それはないかな」

それはそれで困るし、そう考えると専用機を持つてゐる彼女の方が適任と言えば適任かもしれない。ただ、今頼めるとしたら——

「ともかく着替えてもらえるかな？ 僕はこれから風呂に入つてくるから」

「わかつたわ。あ、でも私が先に入つたからつて残り湯を飲まないでね」

「僕はそんな変態じゃないからね?!」

そう突つ込み、僕は疲れたこともあつて先に風呂に入ることにした。



何も知らず、幸せそうにベッドで寝る零司。楯無はその隙を見て零司のベッドに入り、思いつきり抱きしめた。愛おしそうに相手の顔を見て、耳たぶを甘噛みしたり頬にキスしたりとやりたい放題である。

普段の彼女ならいくら妹でもこのようなことはしない。さらに言えば以前は織斑一夏と同居した彼女だが、その時はバスタオル姿はもちろんのこと、裸エプロンで彼を出

迎えるという事すらしなかった。

そう、あくまで任務のため。そして護衛のために一夏を生徒会に入れたが、それもあくまでもまだ一夏に対して良い感情を抱いていない生徒から守るためだ。

(うん。やっぱり私は……………)

——平坂零司彼のことが、好き

零司の両足に自分の足を絡め、零司の顔を自分の胸に押し付ける。

もしその姿を楯無のファンが見れば卒倒するだろう。だが彼女はそれほど零司の事が好きでたまらないのだ。

彼女がそこまで零司に惚れたのは、とある事件に関わったことがきっかけだ。

それは今から5年前。楯無がまだ幼名である「刀奈」を名乗っていた時のことだ。

女尊男卑に染まりつつあった世界で、次期当主になるであろう刀奈を狙った誘拐事件が起こった。当時の更識の人間が誘拐し、犯行声明として刀奈と早急に当主の器である同年代の子ども——もしくは自分たちの誰かと婚約するように迫ったのである。

しかしそれは、たった一人の存在によって破綻したのだ。そう、零司だ。

零司は情報を得るとすぐに敢えて侵入して捕まり、刀奈と共に生還したのだ。しかも

——犯人を無傷で捉えるという偉業を成し得て。

それほどまでの事をできたのは、零司のとある能力があつてこそだ。それ以降は刀奈
——楯無は零司をずつと気にかけている。どれくらいかというところ、隙あらばバツタリ
と会つた風に装つてデートするほどだ。

(……まだ言えないけど、ずつと大切にしているからね)

そのこともあつて零司はかなり幸せな状況に陥っているが、零司は自分が胸に挟まれて
いることに気付いて取つた行動は抜け出して枕で距離を取る行動で、楯無は一人泣い
た。

e p. 5 零司の本音

僕は人間がそこまで強い存在だと思つたことはない。

権力や圧力にはどうしても逆らえないし、逆らえるとしてもそれは——常識破りの異常者たちぐらいだろう。以前、僕は僕でやらかしているけどそれでもまだまだもな事はしていたと思う。

「零司君、だーいすき」

少なくとも、自分にとつても姉とも言える存在が幼児退行しない程度には。

そう言えば、あの後はいつも起こしに来てくれたりしてたっけ。と少し懐かしく思っている、そろそろ時間なので僕は楯無さんの身体に触って揺らした。

やっぱり視線を感じる。そりやそうだ。僕は本来ならI S学園の食堂で食事をするような人間じゃない。増してや、楯無さんみたいな人と一緒にいたら誰だつて気になるか。

「はい、あーん」

「あ、あーん……………」

そして僕は何故か楯無さんに食べさせてもらっていた。ダメだ。それだけで周囲から殺意が籠った視線を感じる。もしかしたら楯無さんに恋愛感情を抱いている人がいるかもしれない。レズとかは所詮空想の産物と思っていたのに、こんなところでお目にかかれるとは。

「ところで楯無さん、僕の荷物漁りしました？」

「どんなエロ本があるか気になって」

「そんな理由で漁られるとは思いませんでしたよ」

まずは殺気を帯びる視線。たぶん、食堂から離れたら僕を殺そうとする人たちが出てくるかもしれない。

「なあ、ちよつといいか」

「ん？ 何？ えつと……………確か、クズ斑ワンサマー？」

「誰だよ!?! 合ってるの「斑」しかないじゃないか!?!」

「ごめん。他人の名前って覚えるの苦手なんだ。確か、織斑いっぴーだっけ？」

「もはやあだ名!?!」

それにしても視線がキツイなあ。ちよつとふざけたただけなのに鋭い視線が一気に増えた。面白いことに、金魚の糞たちからだ。

「じゃあ、僕はもう行くよ。仮にもリーダーだから先に行っておかないと」

「え？ どういうこと？」

「たぶん技術力だと他の国単位で僕に敵う存在がいらないからじゃないかな。リーダーの役目は他の人に任せただけから問題ないけどね」

そう言つて立ち上がり、僕はある存在を素通りして食堂を出たところで誰かに手をかけられたので咄嗟に銃を抜いて相手の腹部に押し付ける。

「僕の背後に立つと死ぬよ？」

「ちよつ!? た、タンマ!!」

「……………何だ。織斑君か。どうしたの？」

「いや、まだご飯を残してるだろ。全部食べるよ」

「……………ああ、あれね。いらないよ。そもそも僕は朝はあまり食べないんだ」

口に付けるのは精々レーションとかそんなものだろう。そっちの方が効率が良いし。

「なに言ってるんだよ。朝から食べた方が力が出るし、作ってくれた人に失礼だろ」

「どうでも良いかな、そういうのは。僕は娯楽に付き合っただけ。それにさ———どうしようも僕の勝手でしょ。いくら何でもお節介が過ぎるよ、織斑君」

「でもよお———」

僕は織斑君から離れてそのまま仕事場に向かった。



「だから「止めた方が良い」って言ったじゃない」

「そうですけど……………」

楯無にそう言われて落ち込む一夏。

「にしても驚いたわね。本当に一夏以外の男子が編入してくるなんて。まさか偽装とか？」

「それはないわ。入学前にちゃんと確認したし……………それに、今気にするところは性別

じゃないと思うけど?」

楯無に真面目に返されたことで鈴音は驚く。最も、驚いたのは鈴音だけではないが。

(え? どういうこと……?)

(今のは少し、楯無さんらしくなかったというか……)

(……)

ただ一人、簪だけはその変化に気付いていた。

(……お姉ちゃん、流石にそれはマズいんじゃない?)

周りからはその優秀さ故に尊敬と慈悲を向けられる楯無だが、本人はそんな人間じゃないと思っている。ただ、自分が生まれた家が特殊でそれに合わせただけであり、中身は普通の女でもある、と。だが、周りはそれを容認せず、それを知っているからこと楯無にとってストレスでもあった。それを唯一忘れさせてくれるのは零司だった。

零司は過去の弱い自分を知っている。だからこそ優しくしてくれるし甘えることを許してくれる。だからこそ数年経って自分に振り向いてくれなくても零司の事を思えた。楯無は思っている。

「でも、大丈夫なんでしょうか? ここには大人しいとは言え女性が多いですから必然的に狙われるのでは……」

「その心配はないと思うわよ。零司君はここに居る人たちと違って I S を持ち出さない

と勝てない男だから」

IS学園とはいえ、原則的には指定された敷地内でしかISの使用は許可されない。もしそれを犯せばいくら女性とはいえ簡単に処所はできないし、下さられる判決も並なものではないのだ。

「何を馬鹿な。ISより劣るとはいえどの兵器もかなりのモノだ。そう簡単に後れを取るわけが——」

「まあ、普通ならそうでしょうね。普通の人間なら、まず兵器を向けられて動けなくなる。けど……零司君は違うわ。って言うかむしろ、あの子と戦って死人が出そうな気がするんだけど……」

それを聞いたその場にいた全員が内心笑った——

——しかし、事は既に起こっていた

一人の生徒が廊下を飛ぶ。もつとも、飛ばされた側で自らその力を制御できず100mの地点で背中から落ちたが。

「この、男風情が！」

「ISに乗れない癖にIS学園に来てんじゃないわよ!!」

既に零司は6人に囲まれており、各々トンファーや金属バットを装備している。対して零司が装備しているのは自身が製作した戦闘用グローブ程度で、銃も装備式の砲台も

展開していなかった。

「……………こんなところ、別に来たくて来たんじゃないけどな」

「だったら今すぐ出て行きなさいよ!!」

「でもここじゃないと作れないって言うから来たんだよ。邪魔しないでよ」

ため息を吐く零司。その態度に苛立った生徒たちは零司に攻撃しようとした時、この状況で聞きたくない声が出た。

「貴様ら!! 何をやっている!!」

生徒たちの動きが止まった。しかし零司は止まらなかった。

一番近い生徒の懐に潜り込んで勢いよく腹部に掌打を放つ辛うじて窓ガラスではなく梓に背中が当たり、廊下に倒れた。

「この、男ふぜいああああああツツ!!」

「恵ツ!! この、野蛮じいじいじい——がっ?!」

一人は目を潰し、もう一人の胸を思いつきり掴んで後頭部から落とす。

「……………そんな…………」

「おい貴様ら! その場から動くな!!」

織斑千冬の叫びによって生徒たちは震える。ただ一人、例外として零司だけはウザつたいとしか思っていないので目標を織斑千冬に設定して殺そうと動いた。

「止めて!!」

突然、後ろから抱き着かれた零司はその動きを止める。

「……………楯無さん」

「もう止めて、零司君。こんなことは……………もう……………」

「……………わかりましたよ」

戦闘態勢を解き、グローブの展開も解く零司。教員たちも騒ぎを聞きつけて次々と現れる。中には担架を持って現れる人もいて、負傷した生徒を次々と運んでいった。

「何故こんなことをした? 状況によつては貴様とてただでは済まんぞ」

「向こうから喧嘩を吹っ掛けてきたんですよ。僕はそれを返り討ちにしただけです。それとも何ですか? 家畜程度の存在価値しかない奴らのサンドバッグになれども言うのですか? 高がI S程度で優勝した程度の人間が、この僕に?」

「ちよ、零司君!」

まさかの発言に場が凍り付いた。

「……………別に私のやったことを気に入らないと言うのは構わんがな、それとこれとは話は別だ。それに貴様は負傷していないようだが?」

「まさか、初撃を後の先でぶちのめしただけです。負傷して作れないとなったら馬鹿らしいです。それとも何ですか? 喧嘩を売ってくるような人たちと話し合いで解

決しろとでも言うおつもりですか？」

「そうは言っていない」

「じゃあ今すぐ睨むのを止めていただきませんか？ はつきり言つて、子孫を残すことを放棄するようなゴミとこれ以上会話するつもりはありませんから」

零司は再びグローブを展開し、裏拳を放つ。後ろには一夏がいて諸に攻撃を食らつた。

「な、何しているの!？」

「テメエ、訂正しろ!!」

「……………ああ、君か。訂正？ 何が？」

「千冬姉をゴミ呼ばわりしたことだ!!」

それを聞いた零司は噴いた。

「まさか君、僕と同じ男なのに女というものを信じているの?」

「当然だ! みんな俺の大切な仲間だ!」

「……………ああ、そういうこと。おかしいと思つた。まともな思考を持つならある程度の認識はしても本質的に信じるなんてありえないし。だから楯無さん、君ももう僕の部屋に來ないでね。はつきり言つてウザいから」

そう言つて零司は窓から飛び降り、最短ルートで仕事場に向かった。様々な遺恨を残

して。

しばらくして楯無が部屋に戻った時、零司が持ち込んだバーやゼリーがすべてなくなっていた。

朝からそんな事件があると、生徒会室は陰険な空気が流れていた。原因は言わずもがな楯無である。

楯無がどれだけ零司の事を好いていたか知っている虚と本音は声をかけずらかったが、それが昼まで続くとなれば話は別のようだ。

「いい加減にしてください、会長。いつまでいじけているおつもりですか!？」
「……………零司君に捨てられたから」

「それが理由になると？」

「零司君に好かれていないとか生きてる意味ないもの」

「それ、本気で言っています？」

(あ、これは長くなりそう……………)

そう思った本音は冷蔵庫からケーキをホールごと取り出し、フオークとお皿を包んで生徒会室から脱走した。

中身はイチゴが乗った普通のケーキで、零司が好きなものでもある。彼女はすぐに零司がいる場所に向かった。

たまたま晴文がいて、零司を呼んでもらったが出てこない。だが、呼び出す方法を知っている本音はケーキを開けてわずかな匂いをうちわで扇いで飛ばす。すると零司が現れて本音に抱き着いた。

「もく相変わらずスキんシツプが激しいなあ。もしかして、後悔してる？」

「うん。ちゃんと女の定義を語っていなかったなと思って」

「女の定義って？」

「女には2種類いて、存在する価値がないゴミ——これはISの登場によって自分たちが強いと勘違いして威張る女たちのことで、遺伝子を残す必要性がない奴らの事を言う。もう1種類は本音みたいな愛玩動物で、愛でたりするのが一般的で、場合によっては性行為などを行って遺伝子を残しても良いと思えるような存在の事を言うんだ」

「えっち〜」

それでも零司は抱きしめるのを止めない。

「まあでも、楯無さんがウザいってのは本音かな」

「それ、本人に言っちゃダメだよ？」

「むしろあの人はスキンスリップしにくいんだよね。年上だしどうしても遠慮するって言うか……………」

「じゃあ、朝言ったことは冗談だとか言って会長の機嫌を直してよ〜」

「……………あ、それは困る。だって今日からずっとこつちにいるつもりだし」

「あ〜そういうこと〜」

本音はその会話から零司の真意を読み取ることができた。

あの場にいた本音も最初は簪にフラれたことによつて女性を信用できないと思つてしまつた、そういうわけではなかつた。返り討ちにした女たちにはそれはあれど、単純に楯無に対しては接し方がわからなかつただけだということは理解できた。

「まあ、かいちよーの体型つて下手すればアウトだもんね」

「本音みたいに生ける屍もとい生きるヌイグルミみたいなものならともかく、あれつて完全に女性の体型だしね」

そこでふと、本音はあることが脳裏に過ぎつた。

(そう言えば、れいれいってずっと引きこもっていたよね……………)

一応、更識との交流ある平坂家だが、ある時期を境に零司が出席しなくなつた。楯無

たちが様子を見に行っただが、いつも何かに夢中になって作り上げていた。つまり――一般的な女性に対してあまり交流を持ってこなかったのだ。

故に零司はまともな女性を知らないし、未知と化している楯無（の体型）に戸惑っているのである。

「一応私も胸はあるんだよ」

「……………」

そつと本音を自分から離す零司。彼の顔はこれまでにはないほど赤くなっていて、状況を見守っていた大人たちは零司の反応に温かい目を向けていた。



あれから順調に作業は進んでいった。

僕が僕自身の力を生徒に見せつけたという事もあるし、何よりIS学園では「体育祭」が存在する。みんなその準備にかかりきりなんだろう。余計な干渉を受けずに僕らは順調に作業を進められた。

「エンジン区画はどうします?」

「このコアを使用するつもりだ」

OSの開発は終了し、本格的にフレーム作成に取り掛かり始めた。残り3週間しかないけどそれでも成し遂げるしかない。

「みんなー! 徹夜の許可が降りたぞ!!」

その声に全員が雄たけびを上げる。全員が全員、ロボに情熱を捧げる男たちなのだから当然と言えば当然だろう。

(……………できれば、悠夜にも来てほしかったけど……………)

舞崎さんにも頼んだけど、どうやら僕の親友——桂木悠夜は行方不明らしい。

住んでいた場所も既に引き払っていて、引越し先も不明なんだそうだ。条件の1つ……………というか連れてきてほしいと頼んだけど無理なものは無理なもので、僕は仕方なく

諦めることにした。

(……五反田とか御手洗とかには羨ましがられるけど、この際無視だ無視……)

よし、みんなの士気も大分上がったて来たし、三徹内でやれるところまでバリバリ進めるぞ！

——と、勢いに乗っていた僕らに珍客が現れた

「——今すぐ動くのを止めなさい!!」

そんな声に全員が驚きを露わにした。この現場には似つかわしくない女性の声。女性禁制のその現場に女が現れるなんてことはまずありえない。

「何なんですか、あなたたちは」

近くにいた舞崎さんが対応すると、突然殴られた。

「黙りなさい。下等な分際で我々女に反逆するための兵器を開発していると聞いたわ」

「何を馬鹿なことを!! 我々は政府の命令で開発しているだけです!」

「それをIS学園で? 馬鹿としか言いようがないわね」

僕は近くにいた人たちに作業を中断させ、撤退指示を出す。

その間に嫌な音がしたので確認すると、奴らは僕らに向けて銃を向けていた。

「ど、どういいうつもりですか、それは……」

「——あら、これは珍しい人がいるわね」

僕は指揮する女性に見覚えがあった。いや、知らないはずもない。その女は——悠夜を退学にした女だ。

「まさか子どもが指揮しているとは聞いたけど、まさかあなたとはね。まあいいわ。やりなさい！」

銃声が響く。でも銃弾はどこにも当たらず空中に制止するだけだった。

「何の対策もしていないと思われるとは心外ですね」

「驚いたわ。流石はその若さで抜擢されるだけはあるわね。でもね——邪魔なのよ」
障壁はある。でも僕が持つものはすべて相手を1撃で消せるものしかない。

もしここで誰かを殺したら最後、僕はここには戻れない。だから、耐えるしかなかった。

e p. 6 その誓いは結束を固め……

眼を覚ますと、病院にいた。

右腕以外はすべてギブスが巻かれていて、点滴を打つ為か左腕も一部開放さされている。

「零司君！」

ずっと近くに来てくれたのか、楯無さんは僕が起きたことに気付いて飛びついて来ようとしたようだけど、僕が怪我人だという事を思い出してくれたようで思い留まってくれた。

「零司君、大丈夫？」

「……これが大丈夫に見えますか？」

どこも怪我だらけだし、身体も上手く動かせない。

「……その」

「そんなことより、早く完成させないと……」

「何言っているのよ、そんな身体で——」

「完成させなければ意味ないんだ!!」

そうだ。あんな女がいる以上、こっちだつて黙っているつもりはない。

たった一週間。それでも一週間だ。人間が24時間生きられないという足枷を背負っている以上、無駄な時間を過ごすことはできない。

僕は僕の身体に付いている機器を外すと、ドアが開いて誰かが入つて来た。

「な、何やつてんだよ!?!」

「……………何の用?」

「お見舞いに来たんだよ。それより、その格好でどこに行く気——」

僕は緑色のクリスタルを出して砕き、煙を体に纏わせる。

すると全身の痛みが引き、動かせるようになったのでギプスを取った。

「ちよつ、何をして——」

「このままじゃ動けないから取つてるの。見てわからない?」

すべて壊した僕は外に出ると、どうやら様子を伺つていたらしく織斑君の取り巻きがいた。

「な、何故動ける!?!」

「ありえませんか?! ああ怪我じゃ普通は動くこともままならな——」

ともかく無視だ、無視。相手にしていたらキリがない。

急いでいつもの場所に向かおうとすると、知った顔が僕の前を遮る。

「……………まだ……………続けるの……………?」

「もちろん。そのために行動しているんだけど?」

「……………もう止めて。そんなことをしたらまた——」

「——女の分際で僕に説教かよ」

まさかそんなことを言われなくても思ったのか、簪さんは驚いた様子で僕を見た。でも、もう興味ない存在に時間をかける気はないのでそのまま無視した。

どれくらい眠っていたのかくらい、聞いておけば良かったかもしれない。

僕らが作っていた場所は荒れ果てていて、時間的には開発している時間のはずなのに誰もいなかった。唯一無事なのは、念のために仕込んでいたバリアのおかげでどの装置も無事だったということだろう。

(……………やろう)

あれだけのことがあったんだ。誰も戻ってくることはない。

だから後は一人でするしかないって思い、僕は早速作業に取り掛かる。

まずはフレームの作成。そして次にそれを覆う外殻の作成に入ろう。一人でやるには時間がかかるかもしれないけど、本気を出した僕にならできる。

「——こいつはおどれえた。まさかもうここまで動けるとはな」

すぐさま砲台を展開して装備。声がした方に向けるとそこには開発部の人たちがいた。

「何の用ですか？」

「……………小僧、一つ聞きたい。テメエ、あんな目に遭ったって言うのにまだ続けるつもりか？」

「当たり前でしょう？　むしろそうしない方が疑問ですよ。それとも、あなた方はここで逃げるつもりですか？」

いっそのことそれでも良いと思うけど。どうせ最初から大した期待はしていなかったんだ。今から離脱したいならしたいで構わない。

「そうか。よくわかった——舐めんよ、小童アツ!!」

50歳を超えた怒声が工場に響く。僕はもちろん、みんなを纏めてきたおじさんの周りも驚いて耳を抑えた。

「こちとら妻子はいるがはつきり言つて今の現状は我慢ならねえ!!　ましてやあんな状況で「女のやったことだ諦めろ」と言われて「はい、そうですか」と納得できるか!!」

「……………」

突然の激怒ぶりに僕は心から動揺した。え？　どうしたの？

「お、落ち着いてください大将！ 血圧上がりますよ！」

「悪いな少年。今回のことでちよつとテンション上がっちゃまって……………」

「いえ。それは構いませんが……………で、どうするんですか？」

「ともかくやらせろ!! 今ここにいる奴らは、全員そのためにいるんだ!!」

大声で叫ぶ大将さんに合わせるように男たちが声を合わせる。

「女性なんてぶつ殺せ!!」

「男が弱いだあツ!! 調子乗ってんじゃねえぞダホガアツ!!」

「ぜつてえ許さねえ!! 俺たちの力で見返してやるぞアアアツ!!」

どいつもこいつも野蛮だった。まあでも、いないよりマシか。

「……………問題があるとしたらパイロットだな。ここにいた奴らは全員逃げてしまったんだ」

「ああ。それなら問題ありませんよ」

むしろいなくなってくれてよかったとも言える。下手な奴を1か月みっちり鍛えるよりはるかにマシだ。

「ともかく、僕はこれよりこの空間とあなた方の住居周辺に特殊な陣を敷きます。後は、舞崎さんですが——」

どうやら周りにいないようだ。後で話をするしかない、か。

なんて思っていると舞崎さんが入って来た。

「……君たち、どうして……。それに平坂君、君は全く動けないほどの重傷なはずじゃ—

—」

「あの程度の傷、重傷に入りませんよ。それよりもどうしたんですか？　暗い顔をしていますが、何かありました？」

「……すまない。逃げた人たちを引き戻すことはできなかった」

ああ、そのことか。確かに動ける人間としてはそういう所は気にするかもしれないけど。

「別に構いませんよ。残り3週間でしょう？　だったら問題ありませんよ」

「……そう、なのかい？」

「ええ。問題ありません」

僕が完全に本気を出せば良いだけのことだ。

「………わかった。ならば、進めてくれ」

「わかりました」

少し暗い顔をする舞崎さん。何かあったのか聞きたいけど、今は開発の方が優先だ。



『計画を凍結してほしい?』

「はい。それができずとも、せめて平坂君が動けるようになるくらいまでの期間の延長をお願いします」

舞崎晴文は零司の容体を聞いた後、すぐに上司に掛け合っていた。このままでは計画に支障が出る、故の変更を、と。

しかしその上司は鼻で笑うと同時に晴文が何も知らない事を思い出す。

『残念ながらそれはできません。そちらはあくまでも困だからな』

「……………はい? お、困ですか?」

『まさか君は、本当に1学生程度の指揮でどうにかなると思っていたのかね？ 確かに平坂零司君は優秀な開発者かもしれないが、所詮は16歳の子ども。まともな物ができるわけがない。君が見せた資料はどれも親が手伝った物だろう？』

「お忘れですか!?! かつて篠ノ之束も15歳でISを発表したではありませんか!?!」

『彼女は特別なのだよ。だが彼は違う。君の役目は平坂零司という匣を最大限に活かすことだ。良いな』

はつきりと言う上司に晴文は自分の立場的にこれ以上は何も言えなかった。

ならせめて、他の人間——特に欧米人などパイロット候補生やメカニックには戻ってもらおうと掛け合つたが全員が拒否。とりあえず戻つて零司にこれまでのことを報告しようとした騒がしかつたので覗くと、何故か回復し動いている零司と日本人開発者の面々が騒いでいたのだ。

(……………もう、訳が分からん……………)

あり得ない事の連続に頭を抱える晴文。匣として利用されていることを知らせたくても知らせられないこの現状に呆れながら考えることを止めたくなくなった。

2人の女生徒の間を足が通る。勢いよく通ったその足の主の瞳から光は失われていて、見る者すべてを震え上がらせるほどだ。まさしく、更識楯無は暴走状態にあると言つても過言ではないだろう。

だがその従者である虚も本音も止めようとしめない。したら巻き添えを食らうのは必須だし、止める気が全くないのもある。

「実際、祭りの時つて結構警備が手薄だつて言うのあるわよね。警備に付く全員が全員、味方つてわけじゃないんだし、それは仕方ないかもしれない……でもさ——」

——随分と舐めた真似してくれたじゃない

ちなみに今の楯無は、完全に彼女らに八つ当たりしていた。

零司が早々に復帰したのは喜ばしいことだ。喜ばしいことだが、あの日の翌日、楯無が部屋に戻ると零司の荷物がすべてなくなっていた。晴文に聞くと、今は残った開発員らと寝食を共にしているのだと言う。

これまでほとんど戻つて来なかつたとはいえ、今まではそうだったこともあつてたまには戻つてくると信じずつと待つていた楯無にとつて、これほど不愉快で残念で悔しいことはない。あの後本音に向かわせた時も、本音と目が合ったのにも関わらず舌打ちさ

れたと聞いた瞬間に怒るよりも先に殺意が起こったほどだ。

「はつきり言つてね、今の私の立場つてとてもウンザリする程なの。勝手に変なレツテルを貼られて、何でもかんでも私ができるつて勘違いされてさ。本当は零司君と年頃の女の子みためにイチャイチャしたいしデートしたいし、少し進んだ関係にもなりたい。……でも、あなたたちが余計なことをしてくれたおかげでそのチャンスすらも奪われたのよ」

「…………お、お言葉ですが、会長にはもつと相応しいお方がいます！」

「そうですよ。例えば織斑君とか——」

「つまりあなたたちはこう言いたいわけね。届かない恋心なんて捨てて、手頃な男子と子どもを作れつて？」

「そ、そんなこと言つてません!! それに織斑君は——」

「残念ながら弱いわよ。私を知る限りもつとも弱いわ」

なお、比べる相手が人外級なので一夏が可哀想になるが、残念ながらこの場にそんな同情をする者は誰一人としていなかった。

「お嬢様、今聞くことはそう言う事じゃないでしょうか？」

「……………ああ、そうだったわね。私としたことは、この2人をどうやって殺そうかとして考えていなかったわ」

「拷問だったら任せてよく。ちょうどきつき面白そうな蛇を見つけてきたから」

そう言つて本音は毒蛇を出した。

「……………本音、それをどうするつもり？」

「どつちかの口の中に入れたら良いかなあつて」

呆れる虚に楽しそうにうねうねさせる本音。

そんな混沌な雰囲気を消し飛ばすようにドアがノックされた。

「どうぞで」

「…失礼する。お取込み中すまないが、我々のリーダーから通達がある」

入ってきたのは晴文であり、小さな小包を抱えている。

「何かしら？」

「……………即刻、捕虜を解放してやってほしいとのことだ」

その言葉に3人が驚いた。

「どういふこと？」

「その言葉通りの意味だ。今すぐ解放しろ、だということだ。ただしこれを相手に渡してもらいたいとのことらしいが」

そう言つて晴文は一通の手紙を出した。

「……………これは……………」

「こちらからの手紙だそうだ。君たちの大将に渡してもらいたいとのことだ」

それを受け取った女生徒らはすぐに部屋から出ていく。同時に楯無は銃を抜いて晴文の背中に銃口を当てた。

「どういうつもりですか?」

「さあな。むしろこちらが聞きたいぐらいだ。一体どういうつもりで——相手を招待するという考えに至るのか」

その意外な言葉に3人は驚きを露わにした。

そんなこともあつたが、結局開発は順調に進み、披露日前日に完成した。だが、前日のギリギリでなのでまともなテストをする時間もなかった。

その日は交代で見張りをし、誰にも手を出させないようにして夜を明かした。

「——で、パイロットはどうするんだよ!」

完成したは良い。しかし結局パイロットは見つかっていないのだ。

簡単な試験運用は終えたとはいえ、実戦で出せるほどかどうかで言えば誰もが疑問を抱える。

「おい、テスト経験がある奴らが行くべきなんじゃないのか？」

「でも俺たちは正規のパイロットじゃないだぜ!? 死んだら困る!!」

「だったら一体誰が——」

「——何を騒いでいるの、君たち」

ドアが開くとほぼ同時にそんな声がCピット内に鳴る。全員がそちらを向くと漏れなく驚きを露わにした。

「り、リーダー!? その服は——」

「僕用のパイロットスーツだよ。機動兵器と言っても絶対防御とかはないんだから着た方が良い」

「で、でも、一緒に作り上げた俺たちにはわかる! アンタは天才だ! そんな奴が出ていくなんてマズいだろう!」

「問題ない。むしろ天才だからこそ僕が行くべきだ。それに——僕ならコックピット内で爆発が起ころうとも無傷で生還できる」

零司は自信満々にそう言い、パイロットスーツのリストを押しして圧縮させてサイズをフィットさせる。そしてディスプレイを展開して対戦相手を確認する。日本人という

事もあつて織斑一夏が出て来ていた。

(可哀想な奴だ……)

同情しつつも、零司の顔は笑みを浮かべている。

「良いのか？ 俺が出ると言う手もあるんだぞ？」

「あなたはこれが終わったらその金で妻子に家族サービスをしてくださいよ、大将」

「だがなあ——」

「それに相手はIS。カトンボとは言えすばしっこい。ならばこちらは反射神経の高さでカバーするしかない。安心してください。100%の上50%オーバーでこちらの勝利ですから」

画面を切り替え、続々と入ってくる観客たち。中には政府の人間もあり、今回晴文はそっちの相手をしている。

「……………わかった。だがな、出るなら絶対に無事で帰って来い!!」

「わかりました」

零司は白銀の機体に取り込み、電源を入れるためのスイッチを押す。機体を立ち上げさせ、臨時で換装した機動兵器用のカタパルトに脚部を接続した。

『カタパルトオンライン。進路クリア。発進どうぞ』

「平坂零司、白鋼しろがね、行きます！」

カタパルトが自動で動き、ISよりも巨体である白鋼を動かす。最終地点に出ると同時に放出され、白鋼は着地した。

『あれが俺の相手か………相手にとって不足はねえぜ！』

(………何言ってるんだか)

フィールド中央にカウンターシンボルが現れ、カウントが0になると同時に2機が動いた。

e p. 7 最初からの目的

ふと、私の視界が揺らぐ。このまま倒れると頭から行ってしまうと思っていると、誰かが私を抱えてくれた。

「大丈夫？」

「……………うん。平気」

シャルロットだった。

私は彼女の腕を使つて立ち上がり、離れる。

「あまり無理はしない方が良くぞ。別に休んでいても——」

「大丈夫」

ラウラが話しているのを遮るように断言する。そうしないと、意外と面倒見が良い彼女はさらに言つて来ると言うことはここ数日で学んだ。

「たぶん……この戦いは見ておかないといけないから……」

気のせいかもしれない……でも、なんだかこの試合は見ておかないといけない気がする。

そう思っただけで確証はないけど……さつきから胸がざわついてしまう。

「……なら良いが、あまり無理はするなよ」

「……わかった」

そう返事をして、また試合に視線を戻す。

一夏の相手は誰かわからないパイロット。でも動きは明らかに素人じゃない。たぶん、零司君のシミュレーターで鍛えられた人。あのシミュレーターは本格仕様と言っても過言じゃない。

攻撃後は少し硬直するし、その間に攻撃を食らうとか、ともかく「本格仕様」という四文字熟語並に油断できない。それで鍛えられたのなら、間違く強い。

『くっ……このっ……逃げるな!!』

『……………』

——フツ

耳に聞き覚えのある声がある。え？ そんな……まさか……

「……ありえない……………」

「どうしたの？ 何があり得ないって？」

……もしこの声が私の聞き間違いじゃなかったら、

「……一夏が負ける」

「な、何を言っているのだお前は!？」

急に胸倉を掴まれた。篠ノ之さんだ。

「あり得ません！ 一夏さんはわたくしたちと共に様々な困難に立ち向かって来たのですわよ!! そんな人がポツと出のパイロットに敵わないなんてことはあり得ませんわ!!」

「そうだ。訂正しろ！ 今だって一夏は相手の出方を伺って——」

2人の意見を遮るようにスピーカーから聞きたくない声が聞こえてきた。

『——飽きた』

その声は流石に聞き覚えがあるようで、さつきまで私の意見を否定していた2人も驚く。

「今の声……まさか……」

「ですが彼はメカニックでしょう!! もしかしたら別の場所から音声を送っているだけ

——」

『な、何が飽きたんだよ!!?』

『君と戦うことだよ、織斑一夏』

今度こそ、否定できなくなる2人。その声はどうやらこちらの声も届いていたようで、ため息を吐く。

『それに君の取り巻きつて馬鹿ばつかだしさ。現実を直視できないとか頭おかしいん

じゃないの?..』

『みんなの事を馬鹿にするな!! みんなだって——』

『無理な話でしょ』

そう、無理な話だ。

何故なら零司君は白騎士事件が起こった前後から既に頭角を現していた本当の意味での天才。たぶん私たちの存在なんて最初から歯牙にかけていない。

『こっちは6歳の頃からずっと発明し続けていたんだから。小学生の時なんてまともに話せる奴がいなかったからそりゃ地獄だったよ』

そう言った零司君は一夏に向けて蹴りを放った。



話が合わないなんてことはよくあつた。

面白そうだから読んでいた本も、表紙がエロいとかなんとかつて理由で馬鹿にされ、敬遠された。変態だ何だと否定され、「こういうものはまだ君には早すぎる」と没収された時もあった。

些細なことからの口論。その末に喧嘩に発展したけど僕は周りよりも強いという自覚はあつたから一切攻撃せずに避けたら額を切る大怪我に発展した。そのことで親が呼び出されたこともあつたし、その兄が仕返しということでの友人らと共に僕を袋叩きにした。理由を聞くと勝手に大怪我を負つたクラスメイトの復讐だとか。

——心から馬鹿にした

帰つていくそいつらの位置を確認して立ち上がり、クソ兄貴に対して飛び蹴りを放つた。

そいつはそのまま近くの木に腹からぶつかる。そして、避けないとはどういうことかを教えてやった。取り巻きの股間を蹴つて全員に頭部に踵落として地面にキスさせた。

——違和感を感じたのは、小学5年生の時だ

姉のように慕っていた人が誘拐された。

僕はすぐに準備をして潜入。というか、わざと捕まった。今にも泣きそうになっている姉が少し可愛かったけど、僕にとつてはまさしく好位置。相手は大人ということもあつて遠慮しなかった。しなかったけど、あつけなかった。

全員の四肢を完全に凍らせただけで無害になった。本当に呆気なかった。そこで僕はようやく理解したのだ。僕は天才すぎるんだと。

誰にも作れなかった奇跡。まるで魔術のように作り上げる力。異常とも言えるその力を僕は受け入れた。

「はつきり言つて僕は君のことを過大評価していたよ、織斑君。君に襲い掛かった火の粉を全て払いのけたのだから多少はやるかもしれない。そう考えていたけど———もうでもなかった。ただ何も見えていないだけの雑魚だ」

『ふざけるな！ こっちだって、伊達や酔狂でこれまで生きてきたんじゃない！』

「いくら君が猪武者だと言つてもその口ぶりは許せないな。死ぬ」

僕はビームライフルを展開し、ロックオンをせずに目視でディスプレイに出ている移動するターゲットマークが重なるタイミングで織斑君に攻撃する。

織斑君はランダムで回避するけど、一部自分で当たりに行つたりしてダメージを食らっていた。

『クソツ!? 何で——』

「その程度の回避運動で本当に僕に勝てると思っっているのか、君は」

心から馬鹿げているとしか言いようがないな。

『何か打開策は——』

「あるわけないじゃん。どうせ白式のシールドエネルギーもさつききの攻撃をまともに食らっているから100前後でしょ? まあ、普通なら死んでおかしくない状況なんだから当然と言えば当然だよねえ」

『まさか、そこまで計算して——』

「猿でもできる計算式だよ!!」

ビームサーベルを抜いて一気に加速する。止めは相手の得意なもので、だ。舐めプしても弱いとはこれ如何に。

「終わりだ」

相手がブレードで防ごうとするけど、ブレードに当たる前に相手の胴体を切った。織斑君の胴体が真っ二つにならないのはまさしく絶対防御のおかげと言ったところか。

【試合終了。勝者、平坂零司】

当然の結果がスピーカーから流れる。カメラから織斑君が悔しがっているので慰めてあげることにした。

「ま、悲観することはないよ。本来の君の相手は僕ではなく取るに足らない雑魚だからや」

『……………こんなんじゃないか……………まだ俺には力がないのか……………これじゃあ……………みんなを守れないじゃないか……………』

え？ 今、この男なんて言ったの？ みんなを……………守る……………まさか……………そんなことを本気で……………言ってるの……………？

「……………君……………それを本気で言ってるの……………？」

『……………ああ、本気だ。悪いか！』

「ああ、ごめん。正直滑稽だなんてレベルじゃない。正気じゃないよ、君」

自分の命すら守れないのがわかり切っているレベルで、まさか他人を守るだなんて……………。

「身の程を弁え——何？」

唐突に機体からアラートが発せられる。アンノウンが接近中？

素早く位置を把握する。数は——10。

『逃げろ零司！ そいつはヤバイ!!』

「……………いいや、逃げないよ。一体どこの勢力かは知らないけど、僕に喧嘩を売るとは織斑君と同レベルと見た」

ISは普通、全身を覆い隠すと言うことはしない。絶対防御というバリアが存在するから肌がどれだけ露出していようと問題がないのだ。現に楯無さんの機体も防御もアークリスタルというナノマシンを帯びた特殊な水を使っているから装甲がほとんどない。

（生命反応は……なし？ まさか本当にISの無人機が存在するとは。それができるのは——篠ノ之束クラスの天才。いや、本人か）

笑みを浮かべて待ちに待った獲物を僕は織斑君戦で課していた制限を解除。ロケットブースターを点火して加速する。相手は陣形を組んで攻撃してきた。盾でビームを防ぎながらビームライフルで攻撃する。

『零司君、今すぐ——』

「来るな。邪魔だ！」

『そういうわけにはいかない。こっちにだってやる事が——』
「ひっこめ!!」

通信相手にそう怒鳴る。

「全IS操縦者に告ぐ。援護は不要だ。出撃することを禁止する！ もしこれを守らず出撃した場合、こちらに対する援護ではなく敵対行動とみなし機体を破壊、そして僕にのみ許可された権利を行使する！」

そう宣言した僕は迫りくる敵機の攻撃を回避した。



「な、何を言っているんだ!？」

一夏は驚きを隠せなかった。相手は10機、そして今戦闘可能なのは零司ただ一人。だがその零司は出撃していた場合、落とすと宣言した。

『織斑君、今すぐこっちに戻ってきなさい』

「え? いや、その——」

『私が行く!』

その声ができるや否や真紅の機体がAピットから飛び出す。一夏の所へと真っ直ぐと飛んだその機体は一夏を回収するとすぐに離脱し、ピットに戻った。

そのほとんどすぐだった。白鋼が地面に着地したのは。

「零司君!」

『やっぱり未完成の白鋼じゃこの辺りが限界か……』

そう呟く零司。その声に専用機持ちは一斉に展開しようとするが、突然の雷で全員が動きを鈍らせる。

「雷!? そんな、織斑先生、これは一体どういうことですか!」

『上空を守るシールドが何者かによって解除されている。既に対処しているが処理が追いつかん』

「そんな……!」

I Sを展開しようとする楯無。だがそれを止めたのは——晴文だった。

「待て、更識楯無。出るな」

「あなたは……何を言っているんですか!? このままだと彼は——」

「……………君は彼から彼が持つ権利を聞かされていないのか?」

「……………そう言えば、言っていましたね。何ですか、零司君だけが持つ権利って……」

1年の専用機持ちたちが揃って唾液を呑む。それほど緊張感のある雰囲気か2人から出ていた。

「平坂零司が持つ権利。それは——襲って来た相手の機体とコアを独占できることだ」

「……………嘘。じゃあ、これは——」

「今、彼が最も望んでいた状況とも言えるな」

そう言った晴文の言葉のすぐに、零司の声がスピーカーから聞こえてくる。

『——ターゲット、マルチロック』

今、各所に設置され120度範囲に映し出されるディスプレイには自分を見下ろすI Sを次々とロックしていく。

すべての機体がロックされた瞬間、白鋼の右肩に設置されているポッドからミサイルが発射された。

「そんなもの、当たるか!」

全I0機を操縦している女はそう言い、回避行動を取らせてミサイルを破壊させる。が、爆発する瞬間に違和感を感じた。

次々と画面が消えて行き、すべての画面が光りを放つ黒いディスプレイとなった。
「え!? ちょ、どういうこと?!」

女は投影されたディスプレイを操作するが、ウンともスンとも言わない。それでも忙しくキーボードを叩く女に帰って来たのは、外部から聞いていた音声だけだった。

『ミッシェン完了。12個のコアを確保した。驚くほどに計算通りだったよ』

——や……やられた……

女の口から発せられたわけではない。だが、すべてが計算外だった。

「——だから言っただろ、アイツは容赦がないから止めておけって」

「……………何の用だよ」

「敢えて言うなら見学と言ったところか。で、完全敗北した気持ちはどうだ?」

いきなり現れた男にそう尋ねられ、女は痲癩を起こすが男はすべてを回避、もしくは防ぐなどの手段をとる。

「落ち着けて、東。ここで怒ったところで相手にはノーダメだぜ」

「うるさいうるさいうるさい!! って言うか!」

東と呼ばれた女は男の後ろで椅子に縛られている少女を指差して怒鳴った。

「何でくーちゃんを拘束しているんだよ!!」

「これから起こることはグロいからな。幼気な少女には酷なものになる」

「は？ 一体何を言ってる——」

「だってさっき、零司は12個のコアって言っただろ。つまり——あそこにはISを展開していたのは12機いたことになる。お前が飛ばしたのは10機だろ？」

「……………え？ あ、そーいえば……」

その男の言う通り、今IS学園では——処刑が行われようとしていた。

すべてが順調のつもりだった。

既に完成した機体を襲う部隊がいて、彼女らはそれに参加して徹底的に破壊しようとしていた——なのに、自分たちはどういうことかISを解除されていて、一緒にいた連れは既に——鉄球を顔に食らって動かなくなっている。そして自分は——すでに両手がなくなっていた。

「ねえねえ？ どうして——どうして生き恥を晒せるの？」

以前倒したはずの男は普通に立っていた。おかしい、全治2か月はかかる怪我なのに。

だから、こうして立っている事自体がおかしい。異常事態だ。

「ま、待ちなさい。私たちは私たちの義務を——」

「あ、そう」

そう答えた男は私を蹴り、壁に叩きつけた。

「……………た……………たす——」

「僕つてさ、結構心は広い方なんだよ。でももう無理——」

その瞳は、もはや人間がしているものじゃなかった。

明らかにその目だけで人を殺せるような、そんな殺気が私にぶつけられる。

「幸い、ブリュンヒルデとかどう見ても雑魚だからあ、ここにいる生徒を捕まえて治安の悪いところで解放しようかなあって。そして、生徒を捕まえた奴らが悲惨な目に遭う姿をネットで中継してもらうつてのは面白いよねえ」

「……………な……………なん——」

「え？　だつてさあ——」

——息されることもウザいじゃん？

もう心が壊れていると言つていいじゃないかと思つた瞬間、その男は私に近付いて宣言したのだ。

「ああ、君も君の娘も生かしてあげるよ。特等席で面白い映像を見せてあげる。だから

——絶望しろよ」

それから私は——強い衝撃を食らわさせて意識を失つた。

e p. 8 激怒する零司

すべて終わった。いや、後は白鋼を完璧な状態に仕上げ、さらには手に入れたコアと機体のデータを抽出して——新軍団「ゼロ」創設して世界征服するとかできるんじゃないかな！　かな!!

(邪魔なブタ共は駆逐できたし、予定通りISコアを12個も手に入ったし)

良いこと尽くめとはまさにこのことかもしれない。

「よっしゃー!　このテンションでさらに発明しまくり——」

「——れ・い・じ・くん」

まるで金縛りにあつた気分だった。

後ろを振り向いたら、楯無さんが鬼の形相か殺意を持った笑顔で僕を待ち構えているに違いない。見ていないのに、その様子だけはわかった。

「お姉さん、事情を聞きたいんだけどなあ……」

「た、楯無さん……?　それ以上近付くのは困るって言うかなんていうか……」

一歩、また一歩と後退する。すると後ろから殺気を感じた僕は氷の刃を展開して飛ばす。

鉄球を諸に食らつていたからだそれだけで倒れた。

「ふう。いくら何でも手心を加えすぎたかな」

「……………いや、別の人に手を切断している時点で手心も糞もないでしょ……………」

「つて、じりじり近付きすぎですよ、楯無さん！ 後もう50歩後退してください！」

「どれだけ私の事を拒否しているのよ!!」

プルンはマズいんだ、プルンだ。

「だって僕は織斑君みたいに女を侍らすヤ○チ○クソ野郎じゃないんですよ!」

「言いたいことはわかるけど、別に織斑君だってそう言う存在つてわけじゃ……………」

「経験からわかります。アレは普段から何も考えてない……………所謂即刻処分対象です」

「……………うん。真顔でとんでもないことを言わないでよ」

だって事実だし……………。

僕は気に入らなそうに織斑君を見ていることに気付いたのか、楯無さんがため息を吐いた。

「全く。確かに織斑君にはもう少し現実を直視してもらいたいと思ったことは百回は超えているけど」

「そんなに思っていたんですか!?!」

「でしょう? でも仕方ありませんよ楯無さん。所詮、獣は獣なんです。生殖行為しか

頭にない猿なんです、彼は」

2人で一斉にため息を溢す。しかし楯無さんもそんなことを思っていたとは。昔から話が合うと言うかなんというか……。

感慨深く頷いていると、楯無さんが僕の腕を捕まえて後ろに下げてISを展開する。

「どういうつもりかしら？」

「どういうつもり？ それはそつくりあなたに返すわ、更識さん。あなたはその不穏分子を庇うと言うの？」

さつきまで調査をしていたはずの教員機が僕を狙っていたらしい。後ろからもISが降りたって、僕を狙う。

「不穏分子？ むしろそれはあなたたちの事ですよ」

「放っておけばその男は我々の脅威になる！ だからこそここで排除しておく必要があるわ！」

………やれやれ。勝利したというのにこの仕打ちか。どうやら女というものはつくづく僕を怒らせるものらしい。

「別に直接的は排除はしなくても良いでしょうに？僕は男なんですから、ハニートラップとかで追い詰めるってことは考えなかったのですかね」

「ハニートラップ？ そんなことで我々の希望を潰すなんてありえな——」

「どうやらやつと気づいたようだ。僕も大概だけど、向こうは向こうで全然気づかなかったみたいだ。」

「僕は敵意を感じ取った瞬間から、この空間内にいる全ISをすべて凍らせる魔法を使っていたのだ。……まあ、正しくはそれを再現する力をクリスタルに閉じ込めていただけなんだけど、その説明は不要だろう。」

「な、何これ!？」

「ISが凍っていく……なんて……」

「戦闘態勢に入っていた楯無さん以外の機体を楯無さんの水を伝って固まらせた。当然、ISとは言え凍る。」

「僕は剥離剤^{リムーバー}を出してすべてのISを回収した。」

「これで16個。しかも打鉄とラファール・リヴァイヴも2機ずつ手に入るとは重畳だね」

「……………えっと、零司君。できればそのISは返してほしいなあって……」

「僕に敵意を持った時点で負けです」

「そこをなんとか……ダメ?」

「ダメです。例え楯無さんとは言えコアも機体も渡しません。文句は僕ではなく、愚かにも僕に喧嘩を売った愚女共に言っていただきたい」

何せI S コアを研究する機会なんてめったにないんだ。このチャンスをも有効活用する他ない。

「お願い。デートでもなんでもするから」

「え？ 今何でもするって言いました……？」

つまり、僕が織斑一夏を再起不能にして無理矢理目を覚まさしても……いや、無理だ。むしろ引つ叩かれて「大っ嫌い」と叫ばれる未来しか見えない。こうなったら……

「こうなったらもう……例の薬を使うしか……」

「何をするつもりよ、何を……」

ジト目を向けられた僕は焦った。

「ともかく一度戻るわよ。詳細はともかく、今は休憩しないと」

「そうだね。じゃあ僕は白鋼を動かして——」

「ああでも、逃げないでね」

そう言われた僕は思わず固まってしまった。

白鋼を移動させ、後は皆さんに任せて更衣室で汗を拭ってベンチに座る。身体を休ませるという意味もあるけど、ここならおそらく誰も来ないと考えてだ。だって、男性用更衣室に入ってくる女性なんて普通はいないしね。……まあ、この学園の人間って常識が欠けているのではないかって人が多いからもしかしたら入ってくるかもしれないけど。

(何はともあれ、お疲れさまってところだねえ)

後でみんなで打ち上げをしよう。みんなは頑張ってくれたんだし、お酒も盛大に振舞おう。……後で晴文さんに買い出しに付いてきてもらうか。

そろそろパイロットスーツも脱いで、置いていた制服に着替える。荷物を持って外に出ると——簪さんがいた。

「……………」
僕はゆっくりと後退すると手を掴まれた。

「……………」
誰か教えてください。この状況はどうすれば良いんですか？ 脳内で「この場で妊娠させるまで襲う」という選択肢がどこぞの麻婆外道神父の声で響いた。

「……………」

いや、むしろ良いんじゃないかな。

今すぐこのまま唇を奪って……………いや、廊下だ。ここ廊下だ。どれだけ理性を失っているんだよ。

「……………」

でも、もう一度こいつを自分のモノに……………あれ？　そう言えば僕、簪さんの事を自分のモノにできてくない？

落ち着け。落ち着くんだけ平坂零司。そんなどうしようもない事実なんて今は置いておこう。

「……………」

そうだ。置いておくんだ。幸いここは人気が全くない。今ここで更衣室に連れ込んで襲えば比較的静かな彼女が誰かに言いふらすなんてことはしない——って、落ち着けよ僕！　人としてアウトじゃないか!!

でもようやくできたと思ったら他の男とイチャイチャしているし。そんなの我慢できるわけない。

「ねえ、どうして——」

「——おお、ここにいたのか」

「どうやら誰かが既に近付いてきていたらしい。つて、おっさん？ その近くには舞崎さんもいる。」

「初めまして、平坂零司君。私は高橋信夫。今回、君に人型兵器を依頼した人間だ」

「……………は、初めまして……………」

予想よりでつぷりとした男に戸惑ったけど、どうやらこの人は僕に話があるようだ。

簀さんがどこかに行こうとしたけど、高橋さんに止められる。

「君も残りたまえ、更識君。君にも重要な話になるだろう」

「……………はい」

彼女を残す意味がわからないけど、いざとなったら僕がどうにかしないといけないということはわかった。

「それで、話って何でしょう？」

「率直に言おう、改めて君を私が計画している本当の部隊に入りなさい」

……………本当の、部隊？

意味がわからずに舞崎さんを見ると、バツが悪そうに舞崎さんは視線を逸らした。

「どういうことですか？」

「君が指揮していたあの開発計画は、本来我々が開発しているものに対する隠れ蓑に過

ぎばいんだ」

隠れ蓑……つまり、

「我々はあなたの部隊の囿に過ぎなかった、と?」

「そうだ。だが今回の発表を見て確信したよ。君は我々と共に勝者の道を歩むべきだ」

勝者の道、ね。中二病すらも裸足で逃げ出すくらいに寒い言葉を堂々と吐いた高橋氏にある意味敬意を表したくなる。5割ぐらい馬鹿にしているけど。

「報酬については応相談だ。何なら、我が権力でその娘を貴様専属の奴隷にしてやつても構わん。欲しいのだろう、その娘が」

「……………なるほど。確かに良い条件ではありませんね」

つまり、この男はさっきまで俺たちのやり取りを見ていたというわけか。まあ確かに欲しいね。あんな男の所にいるほど勿体ないことはない。それを権力という力で従わせる、か。

「そうだろう、そうだろう。ワシは寛大だからな。今なら他の女も付けて月100万から給与を渡そう。もちろん手取りでの話だ」

「……………そ、そんなにしてくれるんですか!?! そんな高待遇で、僕みたいな高校生を迎え入れてくれるんですか?」

「そうだ。本来なら君みたいに中卒相当の人間を手厚く迎え入れるなんてしないが、君は別だ。ここまでの所なんて早々ないぞ」

確かにそうだ。僕みたいな人間をそんな額で迎え入れ、ましてや女の世話もしてくれるなんて中々ない。願ったり叶ったりとはまさしくそれだろう。ああ、なんて最高な――

「だが断る」

――クズなんだろうか、この男は。

「……………は？　今、なんて――」

「断ると言っただけですよ。さつきから聞いてみれば女の世話だの高待遇だの。それじゃあまるでこの僕が女一人服従させることができないアホみたいじゃないですか」

はつきり言っただけの不愉快だ。

「いや、待て。なんならもつと――」

「ましてや僕があなたのような政府の人間にこれ以上関わると本気で思っているんですか？　どうせ目当てはISコアなんじゃないですか？」

「……………な、何を言っているのかね。そんなことあるわけじゃないか。ワシは純粋に君の能力を買っているだけだから、それ以外のことは――」

「大体、順序が間違えているんですよ、順序が。本来なら女性優遇制度は既に撤廃して男女平等へと切り替えていくべきでしょう？　普通に考えて女が467人しか生き残れないってことがわかり切っているのに。なのに政府は未だにそれを行わない。普通に

考えておかしいんですよ。異常とも言える。そんな奴らにこれ以上力を貸すのはごめんですよ」

そもそも僕が参加したのは自分だけの機体が欲しかっただけに過ぎない。他の奴らにこれ以上の奉仕は無意味と考えている。

「……………そうか。なら仕方ないな」

「平坂君！ 今すぐ謝るんだ!!」

「君は黙りなさい」

指を鳴らす高橋氏。すると廊下に黒服の男たちが現れて僕らに銃を向ける。

「我々の任務は君を迎え入れるか捕縛。それが叶わないとなれば殺害しかあるまい。更識君、君もだがね。残念だよ。恨むならば平坂零司を恨め」

勝ち誇るデブを見て、僕は思わず笑ってしまった。



——クフフフフ

不気味な笑いが辺りに響く。発しているのは零司であり、三又槍を出していた。

「随分とこの僕を甘く見ているようですね。僕を殺すとは大きく出たものです」

「ハッ！ この者たちは数多くの戦場を渡り歩いてきた猛者たちだ！ 素人である貴様に何ができる!？」

「そんな人間たちとの戦いは既に経験しています。11歳の時にね」

「何を馬鹿な！ そんなことあり得るわけが——」

高橋信夫は啞然とした。さっきまで10 m程度離れていただけの男が、気が付けば自分の目の前にいたのだから当然かもしれない。

信夫を攻撃して吹き飛ばす。同時に信夫を守っていた男たちが信夫を受け止める。

「こっちはですよ」

簪の腕を取って更衣室の中に入る零司。簪は為されるがままに従った。

男たちは零司たちを追い、更衣室の中に入って零司たちがいる一角に移動する。

「馬鹿な奴だ。自ら袋小路に入るとは」

「気を付けろ。もしかしたら仕掛けている可能性がある」

軽く見積もって20人はいる男たちに対して、零司は1人。だが零司は追い詰められている状況を楽しんでいる。

「この状況、まるで5年前のようですよ」

「……………それって」

「ええ。あなたのお姉さんを助けたあの日もこんな状況でした」

——カント

三又槍がタイルを叩くと、8人に電気が走る。以前の戦闘から出力を上げられており、食らった全員が倒れた。

「な、何だ!? 一体何をした?!」

「少々魔法を使っただけに過ぎませんよ」

また三又槍でタイルを叩く零司。すると今度は10人ほど一瞬で全身が凍らされた。

「お、おい、一体どうなっている!?!」

「……………この展開、知っているぞ。まさかお前、あのキャラみたいに幻術でも使えるとで

も言うのか?!」

「生憎私にはそのような力はありません。なので——作りました」

残っている男たちの懐に素早く入り、銃諸共切った零司。その一薙ぎですべての兵が倒れた。

「(ト)……これは……」

「これでわかったでしょう。あなたたちと僕とでは、力の差があり過ぎる」

「黙れ! こうなつては仕方ない。舞崎! 貴様が直接——」

だが命令された本人は高橋信夫を気絶させた。

「すまなかつた、平坂君。今回の件でまた改めて謝罪に来る」

「それは構いませんが、どういうことでしょうか? あなたはその人間の秘書か何かかと思つたのですが」

「確かに。だが、君に本当に依頼した人間は別にいる。今回は君の本当の人となりを知りたいが故に利用させてもらった」

「なるほど。そのような理由が」

信夫をはじめ、すべての兵を縛つた晴文は全員を外に出して零司に別れを告げる。

「では、また来る」

ドアが閉まり、更衣室には2人きりになった。言わば、襲うチャンスとも言える。だ

が零司は——槍の先端を簪の首元に向ける。

「僕が言わんとしていることはわかりますね」

「……………はい」

涙を流す簪に対して容赦なく言った零司。だが簪は膝を付き、懇願するように言った。

「……………これまでのこと……………すべて謝罪し……………あなたに服従を誓います」

「よくできました」

もし簪が頭を下げていなかったらとてもレアな物が見れた。零司が笑みを浮かべながらガッツポーズするという姿を……………もつとも、本人は「やってしまった」と後悔することになるが、それはまた後の話。

e p . 9 我を忘れ、飲んだくれ

さらなる敵もどこかのパイナポーみたいに華麗に撃退した………のは良いんだけど、僕はさらなる問題を呼び寄せていた。

「……………」

「あの、簪さん。とりあえずその首輪は外そう。流石に誤解が生まれると思う」

「……………だい……………じようぶ……………」

「大丈夫じゃない。大丈夫じゃないから」

簪さんに「首輪はないか」と聞かれたので彼女に合いそうな首輪を見せたんだけど、まさかひつたかれて自分で着けるとは思わなかった。というか、考えてみれば僕はこの子に八つ当たりしているし、大分無理しているんじゃないかな？ あの時はいくら何でも酷すぎたと反省しているけど、ちよつと余裕なかつたんだ。

……………もしかしたら、これはその仕返し!?

「……………簪さん」

「……………何?」

「ごめん。実はあの時は、ただ本当に女というのが憎くて仕方なかった——」

説明中にドアが開く。今度は一体誰が――

「な、何だこれは!？」

「これは一体……つて、箒、アレを見て!」

えっと、誰だっけ？

たぶん知り合いじゃなかったはず。それにしても、何でこの2人はISを展開しているのだろうか……あ。

「ちよつと待つて!　これは誤解だ!」

「誤解も何もあるか!　どう見ても襲っているのではないか!　首輪まで着けさせて……不埒な!!」

「……いくら僕でも弁解の余地はないと思うなあ……」

「どつちにしろISは解除しろ!!」

「どうか何で一々制裁にISを使うの?　馬鹿なの?　頭がおかしいと思えな
いんだだけど!」

「とはいえ、叫んだのにどつちもISを解除する様子は見せない。という事なら、こつちもその気だ。」

剥離剤リムーバを出して風の魔法を使って僕は距離を詰めた。意識を飛びかける。この力ならなんとかできる!



「おせえな、小僧」

「また何かトラブルに巻き込まれたりして」

その頃、いつもの仕事場ではお疲れ様会の準備が行われていた。作業員は全員揃っているが、肝心の代表こと零司がここにいないので始めるに始められない。

「揃いも揃って何をしているんですか？」

「おお、舞崎の旦那。小僧がどこに行ったか知りませんか？」

「……ああ、平坂君ですか。大方、逢引きしていた少女とお楽しみだったりして」「そりやあ呼べねえな。じゃあ悪いがそろそろ始めつか！ 腹も空いてきたしよ」「「おおっ!!」」

そんなこんなで賑やかになる仕事場。晴文は氣を利かせたつもりだが、それは色々と裏目に出ていた。

簪にとって平坂零司という男は趣味が合う幼馴染……という認識しかなかった。

というのも零司は昔から能力が周りとは一線を画しており、さらには長いこと籠ることもあり、所謂引きこもりという印象もあった。というより、簪もまた大きな勘違いをしていたのだ。

零司は更識家に行くたびに大体楯無がいて、大体楯無が抱き着き零司もまた顔を赤くしていた。だからこそ簪は妙な敗北感もあったが大して気にしていなかった。

そして紆余曲折あったが、一夏と行動を共にする。零司が現れるのも予想外だった

し、その時にはもう零司の力をあまり当てにしていなかった。決して見限ったというわけではなく、これから藍越学園の方も忙しくなるし時間は取れないという点からである。だからこそ、転校してきたと聞いた時は心から驚いた。

「……………か……………返して……………」

簪は今、かなりのピンチに陥っていた。

零司が暴れた時に簪は後ろからナイフを持つて強襲したのだった。

「……………なるほど。そういうことか」

零司は頭を抱えている。というか、心から呆れている。

「正直さ、来てくれた時も僕に冗談とはいえ服従するって言ってくれた時も嬉しかったんだ。やっと元に戻ってくれるって。あんな奴から離れてくれるってさ。あんな奴と恋愛を続けていればどうなるかなんて簡単に予想できたし。なのにその行動の正体がまさか、こんなことをするためだったとはね……………」

それは零司が悠夜に頼まれて隠していたものだ。

「……………ごめ……………」

「良いよ、もう」

零司はナイフに力を入れると、刃が一瞬で粉々になり、宙に舞う。それを見た後、何かを思い出したのか懐から取り出した。

「そうだ。これ」

懐からメモリカードを出した零司は簪に押し付けるように渡した。

「……………これって」

「マルチロツクオン・システム。って言っても結局は虚お姉ちゃんが完成させてくれたけどさ。僕はもういらぬから、あげる」

「……………あ……………ありがとう」

受け取ったのを確認した零司はそのまま無言で外に出ていく。もちろん、2人から奪った紅椿とラファール・リヴアイヴ・カスタムIIのコアは返却せずに、だ。

「遅かったじゃねえか!!」

ゆつくりと歩く零司を見つけた作業員は声をかける。すると零司は持っていた瓶を奪って飲んだ。もちろん一気飲みである。普段は飲酒喫煙は絶対にしない零司だが、今回ばかりは無礼講のようだ。

「おお！ 良い飲みっぷりじゃねえか!!」

「こつちにもビールはあるぞ!!」

既に出来上がっている大人たちは構わず勧めるが、零司に関して言えば未成年飲酒だ。

「何やってんだテメエら! 未成年に酒飲ましてんじゃねえ!!」

「……………構わねえ」

「「え?」」

酔いが回るのが早かった。

別に零司は常識がないとか、そういうわけではない。ただ物凄く自分を解放したい気分になっていた。

「おい晴文! 料理をもっと頼め!! 寿司もピザもだ!! おいテメエら!! 料理が足り

ねえぞ!!」

「え、いや、でも——」

「今日はそういう気分だ! それに、今日という日のためにテメエらに無茶をさせたのは事実だからな! 吐くまで騒げや!!」

普段では感じられないそのテンションにその場にいた全員が察した。深く突っ込んではいけないと言ふこと。

「大将」

「……………だな。最初にチューハイを渡してその後にはジュースに切り替えろ」

結局、この酒盛りは昼の12時から夜の8時まで続き、零司は楯無が引き取られるまで普段では考えられない量の食事をしていた。

元々身長差が零司がわずかに高い程度で楯無とはあまり差がないこと、楯無もI Sの補助機能を使って持ち上げている。

(……………なんだか懐かしいなあ)

昔は何度もこうしてしたなあと思いつながら歩く楯無。昔に戻れた気がした彼女は嬉しく思い、周りが零司に対して嫉妬の眼差しを向けているのに無視して部屋へ移動。鍵を開けて中に入る。

「着いたわよ零司君」

「……………ん」

楯無は零司を離すと独りで楯無から降りた零司は風呂を入れてその間に着替えの

準備をする。しばらくして、ちょうどいい湯加減になったことを確認した零司は先に入った。本来ならレディファーストで楯無を先に入れるが、かなり寝惚けている零司にその余裕はない。むしろ、80%は寝てるであろうその状態でどうやって思考しているのか疑問に感じるほどだ。

さらに時間が経ち、零司は満足そうな顔を浮かべて出てきた零司はそのままベッドに入った。確認した楯無は風呂に入った。

しばらくして楯無が風呂から出ると、零司が完全に寝息を立てている。気を遣った彼女もすぐに寝ようとベッドに入る。だが自分ではなく零司の方に入るのは年頃の女子としては如何なものだろうか。

だが零司もこれまでの無理もあって完全に疲れているのか、楯無が入っても何も言わない。

(こういうのも久しぶりね)

普段は思い立ったら一直線で自分の体調もいとわずに完成するまで平然と籠って作業をする科学者としての面に加え、戦闘になつたら冷静に相手を見定め容赦なく敵を倒す冷徹さ。大人とも渡り合う技能を持っているが、寝てみれば普通の子どもというギャップを持っている。

(あーもう、この寝顔可愛いわ……あら?)

楯無はふと、零司の顔に違和感を感じて零司の顔を触る。そしてそれを理解した楯無は不可解に感じた。

(……………涙?)

模擬戦闘の後、政府の人間とひと悶着があったことは楯無もすでに耳にしている。だが、涙を流すまでは至っていないはずだというのが彼女の認識だが、それでもすべてを把握はできなかった。

そう、楯無が把握できたのは——寝言だった。

「……………簪の……………バカ……………」

普段、その家族以外は未婚の更識の女子を名前で呼ぶことは禁止されている。だからこそ零司もみんなの前では「さん」を付けて呼んでいるのだ。つまり今は、零司は楯無が近くにいることを知らない。

「……………何で……………あんな男のところに行くんだよ……………」

そう漏らした瞬間、楯無はあの場で何があったのか大体察した。

時刻はまだ午後8時。よほど疲れたことをしていない生徒なら普通は起きている時間である。

その頃、一夏の部屋に1年の専用機持ちたちが集まっていた。言うまでも今回の騒動である。

コアを奪われた筈は沈み、シャルロットは代表候補生と言う立場と元々男装していたこともあつて顔が真つ青になっている。

「……………俺、やっぱり零司に行つて来る」

「一夏……………」

「でも、平坂君はI Sコアを狙っているみたいだし、返してもらえないんじゃないかな」
ほとんど涙声で言ったシャルロット。だが一夏は勝算はあるようではつきりと言つた。

「大丈夫だって。話せばきつとわかつてくれるさ」

「……………」

その言葉に簪はただ沈黙を貫いた。

誰も反対しないこともあつて一夏は早速零司の部屋に行こうとすると、ドアがノックされる。

「誰ですか？」

『織斑君、そこに簪ちゃんはいないかしら？』

その声は簪の耳にも届いていて、立ち上がって玄関に向かう。既に一夏がドアを開けており、楯無と対面する形になった瞬間、簪は察した。

——怒っている、と

だが簪にも心当たりがあり、怯まずに対峙する。

「……………何？」

「簪ちゃん、零司君に何かした？」

「……………」

沈黙を保ったまま頷く簪。楯無は違和感があつたが構わず次の質問をした。

「何をしたのか言ってもらえるかしら？」

「……………箒とシャルロットがコアを奪われた後、零司君にナイフを向けた」

「……………どうということ？」

「どういう事も何も無い。ただ、私が2人を選んだだけ」

「……………そう」

一夏は反応した。しかしそれよりも早く楯無の拳が簪の左頬を捉えて殴り飛ばす。

「簪!?! た、楯無さん! 一体何を——」

「どういふつもりよ!」

楯無は殴り飛ばした簪の胸倉を掴み、怒りを露わにして怒鳴る。普段から考えられないその形相に誰もが怯んだ。

「あなたも事の重大性は理解しているでしょ!?　ここにいる人たちよりも零司君を宥める方が重要だつて!」

「ちよっ!?　それつてどういうことよ?!」

「いくら何でも酷すぎますわ!!」

楯無の物言いに鈴音とセシリアがそう反論すると、楯無が言った。

「酷すぎる、ね。それはあなたたちのことでしょうか?　不必要なISの展開ばかりしているみたいだけど……ところで箒ちゃん、あなたISはどうしたの?　待機状態は左手首にかけていたわよね」

「そ……それは……」

顔を逸らす箒を見て楯無は怪しむ。すると一夏が――

「箒は、シャルもですけど零司にISを取られたんです」

「……………どういふことかしら?　まさかと思うけど、邪魔だからという理由で排除して振り返りにあつた、なんてことはないわよね?」

「ち、違います!　ただ、簪を襲っていたように見えたので……………」

シャルロットの言葉に楯無は心から呆れた。

「自業自得よ」

「……………じ、自業自得って……………」

「そもそも相手がＩＳも兵器も使っているわけじゃない。それなのにＩＳを展開するところが間違いなのよ」

はつきりと言われて全員が口を閉ざす。

「特にあなたたちは専用機持ちだと言うのに使用規則を全く守らない。いくら国に保護されている立場って言っても限界があるという事を忘れないでもらいたいわね。そろそろ退学もあり得るから」

「た、退学って……………」

何でそこまで言いたげな一夏に対して楯無は厳しく言った。

「本来ならそこまでする必要があるからよ。特にあなたも含めて一切の反省もないし、特に織斑君はまともな向上心がない。他の人達も恋愛にかまけてまともな練習もしていない。少しは自分の立場を自覚しなさい」

そう言つて楯無は部屋を出ようとすると一夏が止める。

「待つてください！　じゃあ箒とシャルロットに専用機を諦めろって言ってますか!？」

「……………掛け合つてはみるわ。でもあまり期待しないで。最悪、データが奪われている

という事は覚悟して」

「う、奪われてるって……そんな!？」

「だったら最初からISを使うな!!」

怒鳴られたシャルロットは涙目になる。しかし楯無は遠慮なく言った。

「わからないなら言っただけあげるわ。ISは兵器よ。たった一発で、たった一薙ぎで人を殺せるの。いい加減に自分たちがその力を持つている人間だという事を自覚しなさい」

楯無は部屋から出る。

自分の好きな人がその創造主だという事も自覚している。なのだが、零司はその自覚はあるし楯無は心配ないと思っただけの言葉だ。

(……………零司君は大丈夫。それに……………何かあったら私が守らないと……………)

そう心に決めた楯無。しかしこれから戻ってすることは——その対価である癒しだった。

この時、楯無は知らなかった。零司があることを既に決めていた事を。

e p. 10 それはあくまで天才基準

「おはよー」

周りの生徒が挨拶をする。もちろん僕にはなく他の生徒にだ。

いつも通りの風景。僕はそれに対して今までの疲れを取るために瞼を閉じる。

「……………とここで、アイツなんだけど……………」

「IS学園での仕事を終わらせて戻って来たらしい……………」

もつとも僕は今、IS学園から藍越学園に戻っていた。

色々あったこともあって、僕は転校することを申し出た。当然、舞崎さんは大将たちも残念そうな顔をしたが、大将が「高校生には色々あるからな。また戻れるようになったら戻って来いよ」と言ってくれたことで舞崎さんが本格的に動いてくれた。何故か数

日経つと転校できたけど、政府の力ってスゲー。

「にしても、平坂がIS学園に行つたつて聞いた時は驚いたぞ。戻つて来た時は戻つて来た時で驚いたけどさ。で、どうだった？ 本物の天国だったか？」

「五反田つたら、一体何を期待しているのさ。予想以上に屑しかなかった」
「……………いや、かわいい子の一人や二人いただろうよ」

「実はあまり教室にいなかったんだよね。しかも容赦なく邪魔してくるしさ」

一応備えはしていたけど、まさか本気で襲つて来るとは思わなかったし。

「ところで、そんな下らないことより御手洗はどうしたの？」

「御手洗」とは「御手洗数馬」の事を指し、某天才プログラマーを彷彿とさせる格好をしているけどただのアホだ。

僕はこの五反田こと五反田弾と御手洗数馬とは比較的仲が良い。以前はこのメンバーに加え悠夜ともいたけど悠夜が退学したことで僕らは3人グループとなった。

「く、下らないつて……………ま、まあ、虚さんよりか可愛い奴なんていなかったけどさ」
「……………はい？ えつと、誰つて言つた？」

「布仏虚さん。俺、その人と付き合ってるんだ」

我ながら見事な鞭捌きだどどと思つた。

それほど華麗で見事に五反田を捕らえた僕は拳銃（本物）を向けて尋問を開始しよう

としたところで御手洗が現れた。

「た、大変だ大変だ大変だ——って、何があった?!」

「どうしたの? そんなにテンション高くしてさ」

「それはむしろこつちが聞きたいって言うか……それよりか大変なんだよ!」

「一体何が大変だと言うのか。もしかしてIS操縦者が攻めてきたとか——」

「今度の修学旅行、IS学園と重なったって!!」

「……………は?」

「アハハハハハ。いくら何でもそれは問題だと思うよ、御手洗。あそこは屑の巣窟なんだしそんなことになれば他からも文句が出るって」

いくら何でも無茶苦茶だ。

確かに藍越学園には僕以外にも技術者として即戦力になる人間はゴロゴロいる。もしかしたらそいつらに経験を積ませるって目的もあるだろうけど、あそこはまさしくクズの巣窟とも言える場所だ。そんなところと重なるなんて絶対に嫌だろ——

「男子は賛成派多数」

「この思春期共が!!」

まあ、僕もそんな男の一人だけだね。いや、だったと言うべきかもしれない。

「でも女子からは反対派意見多数だよね! そうだよね!!」

だつて中にはお父さんが酷い目に遭つてまともな生活ができないって人もいるんだから、そうなるもおおかしくはない。

「……………言いくいんだけどさ。それがそうでもないんだよ。やつぱり日本ってI S 発祥の地じゃん？ 元々マークされてた平坂とは別のクラスにされてはいたんだけど、外国人の女子たちが多くて」

「あ、うん。察した」

たぶん、この時の僕は目が死んでいたかもしれない。少なくともまともな判断は下せていなかったのは確かで、虚お姉ちゃんのことと詳しく尋問するはずだった五反田を解放していた。

「もうあんなクズ共と関わるなんてコリゴリだー!!」

刀奈お姉ちゃんにもちろんデータを抜き取った後であの女たちにコアは返したけど、あくまでもそれは手切れ金変わりだったし刀奈お姉ちゃんが困るからってことだったのに、まさか1か月もしない内に再会だなんて……………。

「不幸だ〜」

なんとなく、ツンツンハーレム建設男がそう漏らす気持ちがあつた気がした。



零司が日常を謳歌している頃、豪華な装飾を施された部屋で男がぼつりと漏らす。

「……修学旅行、か」

本来、この男も参加できるはずの行事だったはずだが、とあることが理由で退学することになり、浮浪時期を経て今に至る。

「何だ。貴様も参加したいのか？」

男とそう歳が変わらない少女が尋ねると、男は「さあな」と答える。

「だって京都だしな。まあでも、友人同士の旅行つてのもアリと言えばアリかって思っただけだ。あ、もしかして俺と一緒にいきたいとか」

「そんなことあるか。貴様が使い物にならないのが困るだけだ」

「そっかあ？　ま、零司を止めることができるのは俺だけだしな。って言うかビビり過ぎだぞ、エム。零司がI Sを凍らせて奪えるのはあくまで雑魚だけだ。エムとかスコールぐらいならどうにかできるだろ」

そう答える男に対してエムと呼ばれた少女はため息を吐く。

「当然だ。私を誰だと思ってる」

「明らかに方向性を間違えた子羊」

「何を言うか！」

「……………これ私見だけど、やっぱり近接メインの黒騎士じゃなくて遠距離メインの方が良いと思うんだけど」

「そこなのか?！」

自分の今の現状とかを指摘されると思ったエムは言われた指摘に思わず突っ込む。

「いやいや、とつても重要な事じゃん。いくら篠ノ之東に気に入られたからって遠距離メインのエムが近接に変えるのは色々問題があるだろと思うけど」

「そうしなければ姉さんと戦う意味がないからだ！」

そうはつきりと言うエムに対し、その男はため息を吐く。

「ま、良いけどさ。でもたぶん無様に負けると思うけど?！」

「それならば、所詮私はその程度の存在だったというだけのことだ」

「……………あっそ」

男はそう言つてエムから離れる。エムは声をかけようとしたけど、止めた。

「……………あの程度の女より、俺と戦つた方がよっぽどレベルが上がるんだけどな」

楯無が呼び出され、その現場に行つた時には既に手遅れだった。

零司は涙を流し、壊れていく物体を見つめている。

「……………零司君……………」

「……………楯無……………さん……………」

零司は涙を流している。しかし、まだ笑う余裕はあつたのか笑みを作る。でもそれは

「……………もう良いから」

——それは、零司が技術者として壊れた合図でもあつた。

ふと、楯無は目を覚ます。全身は秋も終盤に差し掛かろうとしているというのに寝汗で一杯になっており、シャワーを浴びたくなったようだ。

服をすべて脱いでシャワー室に入った楯無は適温の湯を全身に浴びる。こういった事は零司がIS学園を去ってから頻繁に起こっていた。だが楯無は未だに一年生寮で寝起きをしている。

(……………会いたい)

こう思う事は一度や二度ではない。虚には心から引かれるほどは思っており、何度も連絡を取ろうとしたがそのたびに断念している。自分が「簪の姉」という立場が彼女の中で障害となっているのだ。

特に今回の件は、更識、平坂間でもかなりの問題となっているのも確かだ。

零司が突然異常を起こしてIS学園を去ったことは周知の事実。もしこの事が平坂家との不和を生み、援助を打ち切られた場合、更識家は間違いなく崩壊する。

余談だが、楯無がこのことに気付いたのはかなり後のことだったりする。

(……………しかも、意図してか今度の修学旅行はほとんど藍越と被ってしまったるし

……………はあ)

今年の1年生が入学してからというもの、織斑一夏を中心に様々なトラブルが起きていることと、さらに専用機持ちたちの専用機無断使用の件に関しての問題指摘などで楯無は本能的にストレス発散をしたいと考えていた。

(……絶対、修学旅行で何かが起きるわ……だって、絶好の機会だもの)

修学旅行は今回は完全に中止にしたいと思ったが、それを止めたのはIS委員会や学園上層部。大人同士の決め事か何かがあるのかもしれないが、だからと言ってそれを持ち込むとなと楯無は心から思った。

(………こんな時に零司君がいてくれたらどれだけ心強いか………)

いてくれるだけで助かる存在であり、私情を挟むなら一夏ではなく零司の方が男性操縦者と出て来てほしかったとどれだけ思ったか。

(………これまでこの事件の事を考えたら、間違いなく早期解決できたわね)

零司なら技術的な面でもすぐにIS適応できるし、ISの訓練も欠かさない。唯一不安なのは、その多彩な才能に各国から狙われるので常に女子生徒が近くにいるかもしれないということか。

ともかく、楯無にとつて私情含めて良いことばかりなのは確かだ。

そんなことを考えていると時間が気になった楯無は考えながら着けていた泡を洗い落とす。デキる生徒会長はそういう所に死角はなかった。

バスタオル1枚という格好で部屋に戻った楯無は、自身の携帯電話に着信があったことを確認して相手確かめる。一瞬、零司かと思ったが当然違う。

「——え？」

しかしその相手は零司の関係者でもあった。



最近、よく眠れない。

虚お姉ちゃんが五反田と付き合っていた事に驚きもあるけど、なによりずっとあの悪夢と見続けているのだ。

(……………怠い)

修学旅行を休もうかと思った。行ったらIS学園の奴らと顔を合わせることになるし、織斑一夏を殺しそうになることは容易に想像できたからだ。

さて、みんなに質問がある。例えば君たちに1つ上の幼馴染がいて、別の学校に行つたはずのその幼馴染が、自分と同じ学校の制服に身を包んでいたらどう思う？

(……………いや、本当にどうなってるの?)

疑問しか出てこないだろう？

いや、本当にどうなってるの!? 何で——刀奈お姉ちゃんは藍越学園の制服を着ているの?!

「……………あ、おはよう、零司君」

僕の部屋はできるだけ普通の暮らしをさせるといふ父親の意向で一般的な一軒家で住んでいる。それでも、一部屋一部屋はかなり大きく作られているほうだ。ちなみに10畳。……………って、それはどうでもいいか。

それにしても、一体どういう事なんだろうか? ちなみにこの「どういふこと」は、決してあの問題の当事者の姉だろうと言う意味ではなく、別の学校なのに他校の制服を着

ている理由の方だ。

「……………零司君？」

不安そうに僕を見る刀奈お姉ちゃん。意識してかはわからないけれど、上目遣いになった彼女の姿はどこかそるものがあった。

「ど、どうしたの、刀奈お姉ちゃん。え？　もしかしてこれって夢？」

「いいえ。現実よ」

「そっかあ……………現実かあ……………ってことはストレス!?　わざわざ藍越学園の制服を手に入れて本格コスプレ?!」

「ごめん。そこはせめて「潜入捜査」とは言ってもらえると嬉しいのだけど……………」

だってそれよりも先に「コスプレ」という単語が脳裏をよぎったんだもん。仕方ないよね。

「それで、一体どうしたの？　もしかして織斑君たちがまた問題起こしてI S委員会から無茶ぶりさせられて織斑先生が独断で色々やつちやつて耐えきれなくなって逃げ出してきちゃった？」

「今日はちよつと別の用なのよ」

そっか。別の用か……………。

僕はふと、ある単語が頭に過ぎった。

「……………お姉ちゃん、もしかして付いてくる気なの？」

「ええ。それとも、ダメかしら？」

「え？ ダメに決まってるでしょ」

何言ってるの!?

というかお姉ちゃんは前にも言ったじゃない!! 去年は北海道辺りに行ったって自慢しているのはまだ覚えている。それに——

「それにお姉ちゃんはIS学園の生徒だから付いてくることは無理……………もしかして、これって護衛!？」

「やつと気づいてくれたわね」

安堵するお姉ちゃんだけど、まさか僕が普通の人間に後れを取ると本気で思っているのだろうか？

「わかっていると思うけど、あなたの技術力は今全世界から注目を浴びているのよ。獲得すれば事実上、世界の覇権を握れると思われる」

「……………そのための護衛、ということ？」

「そういうこと。もちろん、京都での宿泊先でも私たちだけ別室になっているわ」

そうなんだ。……………そう言えば、行動班に入ることはできたけど部屋割りは決まっていなくて言ってた。

「IS学園でも同室なのに修学旅行でもって……………」

「も…………もしかして…嫌?」

「そういうことじゃないよ……………」

ただ、やっぱり常識的にどうなんだって話だ。

そもそも、貴族とかは10代前半で婚約とかしているし、一部では結婚が可能な年齢になるとお見合いするようだけど、それはあくまで基盤を作ろうとする人たちの行動だ。平坂家ではそういうのは一切ない。そういうこともあつて僕の女性耐性は一般的…………下手すればそれ以下だ。

そんな僕が一期期とはいえ女性と同居というのは流星に我慢できない。しかも相手が刀奈お姉ちゃんみたいにボディバランスが整っている美人だったら尚更だ。ただし本音は率先的に抱き枕にする。異論は認めない。

「ともかく、そろそろ集合時間だし行きましょ? 準備は終わっているわよね?」

「流星にね。ちよつと部屋に出て。着替えるから」

そう言つて一度お姉ちゃんを外に出して僕は制服に着替える。準備を終えた僕らは朝食を済ませて最後の身支度を整えて外に出た。

……………ところで、どうして世界はたったあの程度のこと僕を狙うんだろ。人型兵器の設計図なんて、10年前には既に8割作り終わっていたのに。

e p. 11 嫉妬にデートに荒れ模様

「こんなこと、あつてたまるかあああああツツツ!!!」

朝から御手洗は元氣だった。それもそうかもしれない。五反田は彼女持ちだし僕は刀奈お姉ちゃんと一緒に来ているし。状況だけ見れば御手洗は哀れな独り身つてことなのだ。

「何で……何で僕だけモテないんだよ……」

「良いじゃん、御手洗。この状況はむしろ君にとって喜ぶべきことでもあるんだよ」「嫌味か!？」

「だって女に接点を持つことは、殺される可能性だつてあるんだから」

「……………え?」

ただでさえ、女性は嫉妬深い生き物だ。最近では「あなたも殺して私も死ぬわ!」みたいな人間もいるつて話だし、気は抜けない。

「その言い方じゃ、私と一緒にいるのが嫌みたいじゃない」

「やだなあ。楯無さんということは嫌いじゃないよ。むしろ一種の自慢話になるし」

今の世界では国家代表はもちろん、代表候補生すらも有名人になっている。僕と一緒に

に藍越学園の制服を着て修学旅行に来た時は騒ぎになりそうだったのは言うまでもない。幸い、教師たちは知っていたようですぐに静まったけど。

「自慢話って……………」

「こうすればもつと自慢できるけどね」

そう言つて僕は楯無さんに抱き着いた。普段は逆なので慣れていないのか楯無さんは顔を赤くしているけど抵抗しない。……………やつててなんだけど、実は通報されないか少し心配だったりする。

「調子に乗りすぎ」

「ごめんごめん。楯無さんの反応が面白くて、つい……………」

「……………もう」

五反田は羨ましそうに見ているけど、その隣にいる御手洗の顔はまさしく鬼の形相だった。

「この憎しみで……………人を殺せるならどれだけいいか……………」

殺意だけじゃ犯人特定できないしね。

「なんかアイツ、調子乗ってね？」

「IS学園に行つて侍らせた女を連れてきたつてことだろ？」

「むしろ向こうに行つてあのビッチに骨抜きにされてたりしてな——」

「——ちようどここつてさ、良い自殺スポットだよね？」

調子に乗っている奴がいたので、僕は楯無さんから離れてそいつの背後に回る。

「新幹線にエレベーター、人が殺せる道具がいっぱいだ」

「……………な、何が言いたいんだ？」

「あまり調子に乗らない方が良いよ。普段は温厚な僕だけど——あの人の悪口を言われて冷静になれるほど大人じゃな——」

「はいはい。喧嘩はそこまで。向こう行くわよ」

まるでお姉さんを口説きに行つて同行者に耳を引つ張られたり毒に犯されて回収された面倒見の良いお兄さんキャラの如く楯無さんに引つ張られて回収された。

「そういえば楯無さん、IS学園の奴らはもう行きました？」

「そろそろ来るわよ」

なるほど。じゃあ隠れないと。

僕らは面倒なのであの人たちに会わないように生徒に紛れ込んだ。



「ねえ聞いた？ 更識会長が藍越学園の制服を着てたつて話」

「聞いた聞いた。なんか藍越学園の修学旅行に同行するんだつて」

「なにそれ。意味わかんない」

そんな会話がたまたま近くにいた一夏の耳に入り、驚いていた。そしてそれは他の専用機持ちも同様だった。……ただし1人は除くが。

「え？ 何で更識会長が藍越学園に？ 簪、何か知ってるか？」

「……………知らない」

そう答える簪だが、おおよその目星は付いている。

あの事件以降、簪に関してはそう言った情報は全く入って来なくなっている。言うまでも楯無の働きで、今後一切「更識」には関わらせないように動いているのだ。

「藍越学園は、確か嫁が以前に入ろうとしていた学校の名だったな。そういえばこの旅行にも被っているようだが」

「確か共学校でしわたよね？　一夏さん、そこはどういう学校ですの？」

「就職に有利な資格の講座が開かれているんだよ。普通自動車の教習所の卒業資格も普通なら30万前後が当たり前だけど、そこなら20万で済むんだ」

簪と鈴音、そして簪は日本に住んでいてそういう話も出たことがあるから驚いた。

「他にも色々特典はあるけど、やっぱり凄いのは就業に必要な知識や経験、インターンシップもできることだな」

「……………そうなんだ」

簪も素直に驚いている。というのも、零司からはあまりそう言う話は聞いていないからだ。

『え？　藍越に行った理由？　別に普通に行けるからだよ？　高校とかぶつちやけ通過点だろうし』

もつとも、聞いた相手は天才で、高校に関してあまり考えていないのだが。

彼女は少し気になっていた。

妹宛てに送られてきた封筒。とある報告書であり、一枚の写真が添付されている。内容はその女生徒が怪しいということだった。

(会長ならば直接言うはず。ということは、これはあの子からということでしょうか) そもそも、不可解な話なのだ。

飼いならせば自分にとって最大の武器になり得る存在——それが平坂零司だ。わざわざ零司に弓を引くなんて愚かにもほどがある。

(むしろ、この状況ならば敢えて裏切りマークを外された状態で立ち回っている、と考えれば自然……)

だとしたら、何故敵対を? それが——虚にはわからなかった。
(……もしかして、囧?)

意外な行動ではある。だが、理解できる。

確かに織斑一夏は「生徒会」にとつてもちようどいい囧に過ぎない。そのつもりで彼女は動いていた。だが、そのことは簪には一切話していない。

(……………それにしても)

その写真の女生徒は零司がIS学園に来る前に起こった襲撃の際に庇ったことで大きな怪我を負って療養中だ。診断的には既に治つていると言う話だが、聞くところによると機体の方のダメージが酷いのでついでに改修するらしくまだアメリカにいるらしい。

(…既に改修は済んでいて、もう日本に渡つているとしたら……危ないわね)
虚は念のために楯無に連絡し、そのような情報が来たと言う連絡をした。

「そう、わかったわ。一応、気に留めておく。虚ちゃんはその出所を探つて」

『……わかりました』

楯無は既に新幹線に乗っていて、人気のない場所から自分の席に移動する。

自分の席で待つていた零司は寝ており、向かう形で弾と数馬は緊張し始める。

「どうしたの、2人共」

「い、いえ。何でもありません」

「そう？ それはそれで良いけど……」

ふと、楯無は寝ている零司の頬をつく。相変わらず柔らかいなあと思いつつ何度もつんつんと突いた。

「あの、更識さん？」

「何かしら？」

「もしかして、平坂の頬を突くのが好きなんですか？」

「……その、感触が、ね」

ちなみに、御手洗数馬は嫉妬の炎で燃えている。

「あんまり知らないかもしれないけど、可愛いところはたくさんあるのよ？ 昔なんてよく私の後ろに付いてきていたし、一緒に風呂にも入った時だって、「シャンプーハットは使わないよ？」って言って一人で洗ってたりとか——」

——ダンツ!!

一斉に新幹線にいる80%の男子が椅子を殴った。

それもそうだろう。気が付いたら男にとつての楽園であるIS学園に行ったはずの男が、美少女に部類する女を連れてくるのだ。ある意味キレても仕方ない。

「でも凄いですよね。藍越って、結構集団で宿泊することがあるんですけど、俺らなんて起こそうとしたらすぐに蹴り飛ばされましたから」

「そうなんだ」

ふと、楯無は思った。そんなことされたことないな、と。

もつとも、昔はそれほど周囲に敵意を持っていたわけではなかったことと楯無はある

日までは簪の友達として、ある日以降は自分の好きな人として良く接していたのだが。しばらくすると零司は目を覚まし、全員でゲームをすることを提案した。



ようやく京都に着いた僕ら。どうやらI S学園生も一緒に乗っていたようで、隣の車両からゾロゾロと降りてくる。さっきまで僕に殺意を向けていた男子生徒の集団は、今では親の仇を見るかのようにI S学園生を見ていた。

(そう言えば、五反田って本音と会った事はあるのかな?)

もしなければ見せてあげたい。将来の義妹を………つてことは本音が五反田に「お義兄ちゃん」と言われるのか。なるほど。

「なんか五反田を殺したくなつてきた」

「何いきなり物騒なことを言い出してらんだよ!？」

慌てる五反田。まあ、こいつは悪い奴じゃないし、虚お姉ちゃんのこととは大切にしてくれるだろう。もししなかつたら——

「コンクリは甘いな。やっぱり家族諸共あの世に送るか」

「だから物騒なことを言うなつて！ お前が言うのとシャレにならねえから!!」

「……………全くもう」

すると楯無さんは僕に抱き着いて優しくさする。楯無さんの胸が僕に当たり、恥ずかしさと冷静さが混在して大人しくする。

「少しは落ちつきなさい」

「ちよ、楯無さん。外、外だから！」

藍越とI Sの両方から嫉妬と温かさが送られてくる。中には当然、織斑君もいて——
—心から驚いていた。

たぶんこういうのは見たことないのかもしれない。やったね！　なんて言える状況じゃないのは確かだ。

なんとか落ち着かせ、最後にIS学園生をナンパしないようにと釘を刺された僕らは班行動を始める。って言っても、

(やっぱり、被るのは被る、か)

京都は広いって言っても僕ら関東方面にしてみれば珍しいものは多い。観光スポットとかも巡りたいって言うのが本音だろう。

そんな感想を抱きながら僕らは観光スポットを巡り、時刻は午後4時になろうとしていた。

(……………良い景色だな。……………本当ならアイツも一緒にいたかもしれないのに)

なんて思っていると、後ろの方で気配を感じた。周囲にバリアを展開すると、表面に何かがぶつかる。あれは、銃弾か。

そう、高が銃弾だ。今、僕の後ろに立っている脅威と比べたらなんてことはない。のだけれど、どういうことかその脅威は消えた。

「一体、どういうつもりだ……………?」

「どうしたの、零司君」

「……………楯無さん。ちよつと移動します」

五反田に「少し移動する。何があっても電話しないで」と伝えて僕らはすぐにその場所から離れた。

「一体どうしたの？ まさか、敵？」

「ISを所持しているならまだ可愛いんですけどね。それよりも、少し気になるんですよ」

楯無さんに周りを見張ってもらい、その間に方位陣を展開して辺りの景色を映し出す。

「あ、この女!？」

「……………知り合い?」

少し刺々しそうな女性を見て楯無さんが言った。

「亡国機業って知ってるわよね?」

「ISを狙って戦力を増強している奴らだよ。それがどうしたの?」

「……………マズいわ」

顔を青くする楯無さん。どうやらここではかなりマズいことが起こっているみたいだ。

楯無さんはどこかに連絡を入れる。軽く話すと電話を切った。

「何をしてたの?」

「織斑先生に生徒全員を宿に戻すように言ったわ。藍越学園にも、ね」

「……………面倒なことになりそうなのは確かだね。ISを装備しているのは専用機以外

「じゃ誰が？」

「一応、教員は3名。それと山田先生が後からもらう手筈になってるわ」

「……………それは随分と心許ないね」

ただでさえ雑魚の集団なんだ。相手の戦力が未知数である以上、ちゃんとした布陣で臨みたいもの——

「——そうね。私たちが相手をするには随分と少なすぎるわね」

唐突に聞こえた声。楯無さんはISを展開し、僕の前に立つ。

「零司君、逃げなさい。この女は危険よ」

「あら、随分と嫌っているのね」

「当然よ。あなたたちがしてきたことを考えれば、ね」

僕は楯無さんを影にしてゆっくりと後退する。

「そう。じゃあ、用事を早く済ませないと——ね」

素早く僕の後ろに回り、ISを展開した。回避しようとしたけど巨大な何かに捕まった。

「零司君！」

「捕獲成功。あの子は忠告していたからどれだけ強いかと思ったけど、大したことないわね」

「それはどうか」

伸ばしてきた何かを切断して脱出する。全く、少し甘く見過ぎだ。

「へえ。ISを切断するなんてやるじゃない」

「当然だよ。僕ら男はISを相手にするんだから——それに、僕にとってこれはむしろ一般技能だ」

そう言うのと以前に本音に突っ込まれたつけ。「それが一般技能だったら私たちはミジンコだね」って。

「全く。あなたみたいな人間が他にもいるというのは嫌になるわね」

「……………今、物凄く面倒な事をさらりと言ったよね？」

「そうかしら？ でもまあいいわ。それよりも選びなさい」

——私と共に来るか、ここで死ぬか

そんな選択を迫られる。そんなことは決まっているさ。

「僕としてはここでお互いに撤退、としたいんだけど……それは無理、か」

周囲に白い球体が生成される。そう。僕は何も自衛準備を怠っていたわけじゃない。

「まだ童貞だし、色々したいし死ぬ気はないんだよ」

「そう。なら——」

「うん。だから——」

僕は中指のみを立てて女性に言った。

——とつととくたばれ、クソババア

球体から白い熱線が放たれ、それが目の前のオバサンに当たった。



「定時連絡。京都まであと30分」

助手席に座る男がそう話しているのを聞いていた男がふと、自分の目の前にある兵器を見て思う。

「本当に、これがいるんですかね？」

「……………さあな。でも、あのジイサンのお墨付きだから良いだろ」

そんな会話をしていると、重い拳骨を食らった。

「テメエら。向こうは戦場になっていそうだが、死にたいか？」

「め、滅相もございませぬ!!」

「なら気を引き締めろ」

「はい!!」

そう言って自分たちよりも大きな体をした男が去っていくのを見て、言った。

「でも、ちよつと楽しみだよな」

「そうか？ 俺は死にたくないけど」

「そうじゃねえって、もし偶然が重なって仕上がったこいつが実戦投入して無双する様

を考えたらさ」

男は頷く。もちろん、それは彼らだけでない。

この場にいる一人もそれは心から思っていた。

(……………待つてろよ、坊主。テメエの剣、持って行つてやるからな)

巨大輸送車は高速道路を走る。ただひたすら、主を待つ力を届けるために。

e p. 12 揺れる京都

楯無からのメッセージを受けて千冬はすぐに行動した。

班ごとに持たせたPHSに連絡し、回収したのだ。

「後は誰がいない？」

「IS学園は、織斑君に篠ノ之さん、オルコットさんに更識さんです」

「藍越学園はあの2人以外は全員揃っています」

本来、藍越学園は別途に生徒の移動手段を確保していたが今回は緊急事態のためIS学園が用意したりニアには藍越学園生も入るという事態になった。

「わかりました。山田先生、私は6人を回収した後に宿に向かいます。それまでは生徒の引率を——」

「待ってください！」

先に進める千冬に藍越の教師の一人が待ったをかける。

「今、あの2人はどうなっているんですか!？」

「誠に申し上げにくいのですが……今、交戦中とのことですよ」

そう千冬から顔を青ざめる教師。反論する教師を宥めたのは五反田弾だった。

「落ち着いた方が良いつすよ。今はここにいる奴らの事を第一に考えましょうよ」
「何を悠長なことを言っている!？」

「大丈夫ですつて。アイツはIS相手でも普通に勝つたらしいですし。だから、まあ——」

——ちよつと寝といてくださいよ

そう言つて弾は教員に注射器を当てて眠らせた。

「弾、それは——」

「平坂印の速攻睡眠針です。たぶんこういう時用に持たせてくれたんでしょうね」

実際、零司にとつて単独行動をされるのは邪魔でしかない、ISとなれば当然手加減はできないので、1つの場所に留まつていてもらえる方がありがたいのだ。

「すまないな、弾」

「いえ。これくらいは……」

とはいえ、弾も心配じゃないと言えば嘘ではない。何せ相手はIS、一瞬でも気を抜けばお陀仏になるのは目に見えているのだから。

そう、弾が考えている時だった。

——カシユツ

ドアが急に閉まる。不審に思った千冬と弾。ドア上のモニターに変化が起こり、黒く

なる。

「何ッ!?!」

「これって……………冗談じゃねえぞ」

運転席のスピードメーターを確認した弾は徐々に上がっていく数値に戦慄する。

「……………まさか」

「心当たりでも?」

「ああ。山田先生、今すぐ整備科志望でプログラムに精通している奴らを呼んでくれ。特に布仏を優先的にな」

「千冬さん! 平坂に電話して良いっすか!?! アイツならどんなプログラムでも破つてくれます!」

「……………そうだな。頼む」

藁にも縋る思いで頼む千冬。その真剣さを読み取った弾はすぐに零司に電話した。



唐突の電話。僕はすかさずヘッドホンで取ると、五反田の焦った声が聞こえてきた。

『平坂！　今どこににいるんだ!?　今すぐリニアに戻ってきてくれ!』

「無理！　こっちも手いっぱいなんだ!!」

楯無さんと一緒にエアバイクで空を駆けていた。楯無さんは免許持つてるし、こういう時は凄く助かる。……運転してるの、僕だけどね。

「逃げたってどうにもならないわよ!」

「でしょうね。楯無さん、こいつを持って先に言ってください!」

そう言つて僕はメモリースティックを楯無さんに渡した。

「それじゃあ私が時間を稼ぐわ。あなたが行きなさい!」

「こいつよりもあなたの方が早く着く。だからこそ適任だ!」

「でも——」

メモリースティックを押し付けて言った。

「行け！ アンタが戻ってくるまでの時間ぐらいいは稼ぐ!!」

「——っ！ わかったわ」

すぐに楯無さんが見えなくなる。——とと、危ないな。

「選択を誤ったんじゃないかしら？ わざわざ護衛を行かせるなんて、愚かとしか言いようがないわ。あなた、自分の立場はご存じ？」

「心配なくて大丈夫ですよ。自分の格ぐらいいは把握しているつもりですので」
それに、バレたら色々とうるさいだろうから本気を出さなかっただけだしね。



零司と楯無の前に現れた女性——スコール・ミューゼルは戦慄した。楯無の姿が無くなった途端、自分と対峙する零司の気配が変わったのだ。

「へえ。やっぱり女でもそれなりの実力者なんだ」

「どういうことかしら？　まさか、これまで手でも抜いていたの？」

「当たり前でしょう？」

エアバイクが変形する。まるで丸い形になったそれは前方に大きなバレルを装備しており、背面からは翼が生えていた。

「旧世代の兵器、と言ったところかしら？」

「そう甘く見られるのも今の内ですよ、オバサン」

途端にバレルから熱線が飛ぶ。舐めていたこともあつて「ゴールデン・ドーン」の装甲が一部融けた。

「僕がISに対する対策を何もしていないと本当に思っていたのですか？」

「馬鹿な。あなたは人型兵器を作り上げた後、スランプに陥ったはず」

「IS学園から離れたらできるようなったさ！」

とはいえ、その機体には大きな弱点がある。それは——ISの動きを変えられない

ことだ。

(……………だとしても、上がったのはあなたの技師としての価値だけ。やはりあなたは連れて帰るべきね)

スクールはますます零司を欲しくなり、さっきまでの遊びはなくなり本気で取ろうと動いた。

だがその少し後に零司の傍に黒い影が現れる。それは——零司に絶望の表情を浮かばせるのは十分だった。

その頃、一夏は別の人間と対峙していた。

「オラオラ!! やっぱ teme は雑魚だなあッ!!」

「くっ……………またお前かよ!!」

9月中旬、IS学園の文化祭当日。楯無が仕組んだ劇の最中で対面した二人が戦っていた。

まさしく因縁の対決——とも言えるが、一夏が劣勢だった。それも当然だ。そもそも一夏がオータムに勝てたのは楯無の援護があつた故なのだから。

だが今は違う。今の一夏は一人であり、周囲に味方の一人もいない。さらには戦い慣れていない外であり、相手は例え誰が死のうか関係ない。「自分に関わる人間すべてを守る」ことを心情とする一夏にとって戦いにくいことこの上なかつた。

一夏はオータムから繰り出される弾丸の雨霰を回避する。それはまるで文化祭の時に戦つた時と同じだった。

「やっぱりテメエは雑魚だ!!　ここにくたばりやがれ!!」

そう宣言し、オータムはロケットを展開して放つ。計50発に及ぶミサイル群を一夏は荷電粒子砲《月穿》で撃ち落としていくも装填間隔が大きくて間に合わなかつた。

——そんな時だった

一夏の背中からミサイルが降り注ぐ。それがオータムが放つたミサイルとぶつかり、爆発が起こつた。

「一夏!」

「無事か、一夏」

簪と箒だった。それぞれ「打鉄式式」と「紅椿」を装着している2人は一夏を守るように割り込む。

「チツ。また援軍かよー！」

「——これで4対1ですわ。大人しく投降なさいな」

セシリアが《スターライトMk-III》でオータムを捕らえている。簪も既にロツクオンステムでオータムを捕らえており、「アラクネ」からの情報にオータムは情報を整理する。

——だが、決して運命は味方しなかったわけではなかった

突然、簪がどこかに飛ばされる。少なくとも4人にはそう見え、見る見るうちに離されていく。

「簪!？」

「この人はわたくしが抑えます！ お二人は簪さんを！」

「頼むー！」

一夏はすぐに簪を追う。箒もその後ろを追い、一夏と合流した。

オータムはその隙に離脱を図ろうとしたが、セシリアが遠慮なく8本の足を破壊した。

「チエツクメイトですわ」

「……………クソが」

悪態を吐くオータム。セシリアはオータムをきつく縛る。

簪を迫いかける一夏と箒。箒は「紅椿」の単一仕様能力である『絢爛舞踏』を発動させ、2機のシールドエネルギーを回復させる。そのため全開で追えるはずだが、一向に距離が縮まらない。

「どうなってるんだ!?!」

「わからん。だが打鉄式式のスペックならば追いつけるはずだが……」

『——展開装甲なんてものは既にアニメで出ているからな。後はそれを実現させる。簡単な仕事さ』

どこからともなく機械音声が入りに響く。一夏たちは動きを止め、怒鳴った。

「簪を返せ!!」

『ああ、それは無理。俺は彼女に用があつてこうしてさらったわけだから』

さらりと言ったその声に箒は驚く。

「さらっただど!?! 貴様、私たちの仲間をどうするつもりだ——」

『こうすればその真意は理解できるか?』

徐々に切れた音声に一夏と箒は驚く。

機械音声は徐々に解除された。それは2人にとって良いことではあつたが、発せられた

音声の問題だった。

「お……男!？」

「ありえん！　I Sと同等のスピード——いや、引き離せるものに男が乗れるわけが——」

「俺は運が良かっただけだ。運が良かったからこそ、ここにいる」

その機体はさらに加速し、姿を消した。あまりに一瞬のことで呆然とする2人。レーダーも目視も見たが、さつきまでであったはずの反応はない。

「くつつそおツツ!!」

一夏の叫びが木霊する。しかし沈みつつある太陽からは何の返答もなかった。

スコールから逃げていた零司。しかしある存在を感じたことで初めて零司は絶望した。

——I Sがもう1機現れた

ふざけるなど叫びたくなる零司。ただでさえ1機に手こずる状況に、スコールと同じ

タイプの機体が現れては流石に舌打ちする。

そもそも何故零司がここまで手こずると言うかと、単純に相性の問題もあった。

零司が最も得意とする「零度結界」フリースワールド。これは大気を凍らせる技で、ISのパーツすらも破壊する能力を有している。だが、自分を襲う2機はどちらも炎を使い、瞬時に溶かしていくのだ。それも、ISに冷気が到達しないとと言う状況なのだ。もともと、理由はそれだけではない。何より今いるここは外。アリーナのように一部を塞げば発動できる場所ではないのだ。

「待たせたな、叔母さん」

「その言い方はよしなさい、レイン。それより彼を捕らえるわよ」

「わかっているって!!」

零司に近づくレインと呼ばれたIS操縦者。しかし零司は地面の壁を作り出し、怯ませたところを攻撃する。

「ちよつ、アリアかよ!?!」

「油断しないで! この男は魔法を使うというのは知ってるでしょう?!」

「わかっているけどよお。じゃあ、こうすれば良いんじゃないね」

そう言うレインは黒い炎の玉を生み出し、幅が狭い弾幕を張った。その速さに驚きながらも零司は回避するが、突如玉の一つが零司の機体に直撃した。

「よくやったわ、レイン」

まるでスコールを避けるようにレインが出した炎の玉が道を開ける。背部から伸びる尾が零司が乗る機体を掴んだ。

「チエツクメイトよ、平坂零司。あなたには一緒に来てもらおうわ」

「……………なるほど。少々悔っていましたよ、亡国機業」

「ならば反省することね。裏の人間を本気で怒らせると怖いわよ」

「ですが、どうやら周りが見えていない様子。僕が操作するラジコンにここまで釣れるとは思いませんでしたよ」

瞬間、レインとスコールは無理矢理地上に降ろされた。

「これは……………重力反応だど?!」

「まさか自分諸共私たちをといて魂胆かしら?」

「いいえ。僕には帰る場所がある。その場所を壊そうとする人間を生かすほど愚かではありませんよ」

ISが解かれた2人。それを確認した零司は2人の前に姿を現す。

「そして、2機のISを僕のエリア外でまともに戦おうとするほど狂ってすらいない。故に、少々特殊なステージを用意させていただきました」

零司は両手で覆っていたものを解放すると、其処を中心に境界が開かれ3人を呑み込

む。

——そこは、まさしく幻想だった

今では見られない壮大な空。さらに木々が癒されるほどに伸びており、見る人すべてがその場所に呑み込まれそうになる。

「()はど()かしら……？」

「なんつーか、癒されるな……」

「なるほど。冷酷無比と思つたミューゼルにもその感情があつたとは」

2人のミューゼルは声の方を向く。

一人の男が無防備に立っている。彼女らにとってそれはまるで捕食される餌が何の警戒もせずに立っている様子そのものだった。

「ああ、ISを展開できないのはこの幻想境域ファンタズムボウダーが発する特殊な電波を発しているからですよ。ところであなた方は——強いのですか？」

一瞬だった。

まるでISの装備かと思えるほど圧倒的な展開速度。スコールは炎を出すと、自身がそれにできると驚いた。

「驚きましたか？」

「まさかあなたもISを使えるとはね。しかも、さっきのは嘘」

「70%正解というところでしようか。確かに、さっきのはすべて正しいわけではありません。確かに補助機能は殺せるところまではできませんでした。しかし残念ながら第三世代兵装——特にあなた方ミューゼルのISやギリシャの「ゴールド・ブラッド」、そして「ミステリアス・レイデイ」の能力を封印することはできないようです。まあでも——」

——これで本気で戦えるでしょう、お互い

零司の言葉にスコールは意外にも笑みを浮かべた。

——ええ、本当にね

レインは、これまで感じたことがないスコールの殺気に恐怖する。彼女でもこれまで付き合いがあった叔母がここまで濃厚な殺気を浴びたことがなかったからだ。

「下がってなさい、レイン。あなたにはちよつと刺激が強すぎるわ」

「……………あー……………一応言っておくけどよ、さっさと降参した方が良いぜ」

親切心からかレインが零司にそう言うが零司は首を振る。

「裏で有名なミューゼル。その現当主である彼女を倒さねば、こちらに未来はない」

「……………あー、そうかい。全くよ——」

途端にレインの姿が消えた。突然のことに驚きを露わにするスコールだが、零司が補足する。

「彼女は無事ですすよ。戦う気を無くしたのでご退場願っただけです」

「それを信じて良いのかしら？」

「ええ。今頃突然戦場に戻されて、この世界を攻撃しているかもしれませんね」

「そう言いながらも零司はスコールに狙いを定める。そしてスコールも自身が操る炎で球体を作る。」

「——果てろ」

「——燃えなさい」

熱線と球体の弾幕が交差し、2人の間に爆発が起こった。

しばらくして結界が消える。

一足先に出ていたレインは1つの影が倒れているのを見つけ、駆け寄った。

「叔母さん！」

「レイン……本当に生きてるとはね」

「一体どうしたんだ……ってあれ？ 無傷？」

「どうやら最初から逃げるのが目的だったようね。初弾を発射したと同時に姿を消したわ」

その言葉に安堵するレイン。あの時のスコールと同等ではないとすら思う殺気を放っていた零司。もしかしたら、京都だけでなく日本すら破壊してしまうのかと恐ろしく感じたが、杞憂だったことに安心した。だが――

(……………冗談じゃねえぞ)

レインは心から零司を嫌悪する。

彼女は零司を一目見た時から嫌な予感がしていたのだ。言うなれば、零司に纏わりつく気配が何か良くないものを感じさせた。それがあの時――顕現したんじゃないかと思っていたのだ。

――そしてその予想は、すぐに当たった

零司はすぐさまリニアに向かう。すると目の前をローブに身を包んだ何かが現れる。
(……………こんな時に……………)

舌打ちをする零司。彼はプラスチック弾を装填して無理やり押し通そうとした瞬間、その者たちはローブを捨てた。同時にバイクのリーダーからとんでもない反応が示される。

「あ……ISだと!？」

しかし生命反応は何も示さないこのパターンから、目の前の機体がどういうものかわかった。

「……ふっぎけるなああああッ!!!」

思わず激昂する零司。それも当然。今回はISと渡り合える白鋼はない。あるのは対人装備用の武装のみ。さっきの戦闘機状態はかなりのエネルギーを消耗するし、スコールの実力が学園の専用機持ちを遥かに上回っていたから使用してしまっているのでエネルギーを回復させないといけない。

そう思った時だった。

突然、そこに別の機体が現れて一気にISを薙ぎ払う。

「——平坂零司、ですね」

「誰だ？」

「私は選定者です。選んでください」

そう言つてIS操縦者は2つのモノを零司に向かって放る。瞬時にそれが爆発物でないと判断した零司は受け取った。一つはナイフで——

「そのナイフは先程のような人型ISに有効です。そしてもう一つは——」

説明を止める操縦者。それもそのはず、本来光るはずがないコアが突然光り始めたか

らだ。

まるで共鳴するように、零司の服の中から光が放たれる。それがまるで磁石のように引つ付き、コアが消失した。

「……そのネットワークスはどこで？」

「コアのデータから、親父に頼んで調達してもらったクリスタルを加工してデータの入ったチップを入れてたんだ。それが一体どうして——」

「なるほど。あの方の言った通りですね。あなたも既にあなたなりにあなた自身の I S を生み出していた」

すると I S は上昇する。さらにプレゼントなのか端末が降ってきて零司はキャッチする。同時にまた——人型 I S が湧いた。

「是が非でも僕をリニアに向かわせたくないのかい」

エアバイクを消した零司は靴の姿を変える。そして地面を蹴った零司は足から噴射される暴風とすら言える風で加速し、瞬時に人型 I S の懐に入り切りつける。

「なるほど。少しはこの武装は信用していいと見た」

切れ味、そして一瞬で破壊できる現実に満足した零司。途端に目の色が変わり、笑みを浮かべる。

「一体何が目的か知らないけどさ——」

——僕を怒らせたことを心から後悔しろ

ある人は言った。決して平坂零司に手を出してはいけない、と。

零司には優しさがある。天才ではあるが他人の事を決して見下さず、その努力も行動も評価する人間味がある。しかし残虐性を持っており、猛威を振るえば恐ろしい存在になる、と。

『クリエイト
創造』

渡されたナイフを複製し、顕現し、滞空させる。

『ファイア
発射』

それらが一瞬で解き放たれ、襲い掛かる人型ISを蹴散らせた。

e p. 13 交換条件

リニアの方は絶望的な状況にあった。もし零司の判断に従わず、楯無が少しでもあの場に留まっておけばスピード超過によって線路を離脱。事故故に繋がっていただろう。

なんとか零司が用意したアンチウイルスによって事なきを得た。だが、

「我々はもう帰らせてもらおう」

藍越学園側は荷物を纏めさせてすぐに京都を離れる意向を示した。しかし、零司がまだ戻ってきていないのだ。

そのため教員が一人残ることになり、他の人間は先に離れることになると思われた。『息子の事は構いません。先に戻っていただけで結構です』

保護者にそう言われた。何度か抵抗したが、それでも校長や理事長からのお達しとなれば、流石に引かざる得ない。形としては見過ごすことになるが。

とはいえ、例え死んだとしても訴えないと誓約書まで書かれてしまつてはもうどうすることもできないのは事実だ。それにこれ以上留まつていてもこれから起こるであろう戦いに巻き込まれれば死亡必須だ。

それに、零司を見捨てるというのにはある意味正しい選択でもあった。

もはや零司の存在は、「一般人」としての枠組みを遥かに超えている。しかもそれを亡国機業に知られてしまつては今後狙われることがあるからだ。そうなれば、一般人しか在籍していない藍越学園にいると他の生徒にも被害が及ぶ。

そのため、藍越学園の生徒の避難は早急にするべきでもあつた。そして戦力にならないという観点はIS学園の生徒たちにも当てはまるため、別ルートを通じて彼女らも避難させられた。2校は近い場所に建てられてはいるが、藍越学園の生徒たちが嫌がったのである。

「おいおい、女の癖に逃げるのかよ」

「アイツら、戦力にならないからつて逃げてんだぜ？」

「日頃威張つてる癖にさ。どうせISなければ男に勝てないんだろ」

周りから嫌らしいような、侮蔑するような視線が彼女たちに向けられる。傍から見れば酷いことになるが、女性はほとんど日常的に男に同じようなことをしているのだ。だからと言つていいいかと問われれば否定されるが。

「何よアイツ。ちよつと殴つてくるわ」

「落ち着いて、鈴。そんなことをすれば問題になるよ」

その護衛をしていた鈴音が飛び掛かろうとするが、シャルロットに止められる。

しばらくして藍越学園、IS学園の生徒の避難が完了した。京都の住人たちも現時点

で各々避難を開始しており、あと30分ぐらいで終わる予定だ。

千冬は軍に要請し、平坂零司と更識簪の両名を捜索させている。そして一夏たち他の専用機は別室で待機させられていた。一夏たちは不満そうだったが、

「お前たちは戦って体力を消耗している。今は体力を回復することを務めろ」

そう指示して今は抑えているが、正直臨海学校で女子たちが勝手な行動を起こしている。今回もまたしいとは限らない。とある存在が一夏たちを抑えているが、千冬もあの女は苦手だ。

「それで、一体どうする予定ですか？」

「……ここで一度、迎え撃つのもあるかとは考えているがな」

不安要素は更識簪の行方だ。一夏たちの証言から男の操縦者が連れて行ったという話だ。下手に動く和最悪の場合、更識簪の無事は保証されない。

(……ここで放置すれば、今度のIS学園の生徒に被害が合う、か)

一瞬、自分の機体のことを思い起こす千冬だが、それこそどんな状況に陥るか、そもそも動くかすらわからない。さらに言えばその機体は今学園の地下にある。学園から支援助資は届いているが、今の零司の立場が藍越学園にある以上は協力を得ることはできないだろうと予測する。

(……ああは言ったが、本当は戦わせたくないんだがな)

軍と共同で作戦を立てるかとか千冬が考えてしまったそんな時だった。

「織斑先生、付近に人の生命反応があります」

「すぐに確保し、軍に渡せ。そこからなら避難させてもらえるはずだ」

教員にそう指示した千冬。だが、オペレーターとして残っていた本音が小さく「違う」と言つて外に出た。

「おい、布仏！……まさか」

千冬は報告した教員にその映像を拡大させると、画面には全員が知る顔が映っていた。そう、平坂零司が。



襲つて来た奴らは打ち止めだったのか、僕はそいつらに対抗しうる武器を手に入れたこともあつて返り討ちにして残骸を集め、量子変換してから戻つて来たんだけど……。

(……………なんか疲れた)

それもそうか。対 I S 用の兵装とか自分の体力と引き換えに発動する大空間を展開したりとかしたんだから。ちなみにあの結界はどちらも僕の体力を展開する機械だから、決して魔法じゃない。それに……使ったら体力の消耗って激しいんだよね。

(帰ったらシャワー浴びて、それから寝よう。たまにはちよつと甘えても………恥ずかしいから無理だ)

一瞬で現実に思考が戻つてしまう。まあ、仕方ないよね。一瞬抱き着いて寝てしまうことを考えてしまったけどさ。だって僕も男の子だもん。

旅館のドアを引いて開けると、急に楯無さんが抱き着いてきた。

「れ……零司君……」

「良かった。無事だったんですね」

「バカ！ それはこっちのセリフよ！」

涙を浮かべる楯無さん。でもま、ISを相手に戦っているのだから最悪死ぬよね。

抱き着いて離れない楯無さんの背中を叩いて離れさせる。その理由は——本音が温かい目を見ながら僕らの状況を眺めているからだ。

「でも良かった。あなたが無事で……」

「とりあえず中に入って寝ていい？ ちょっと疲れた」

「良いわよ。そう言えばさつきコンビニのお弁当だけど調達したの。食べる？」

「もらおうかな。今の状況じゃ体に悪いとか言ってられないしね」

特にさつきまで殺し合いをしていたわけだし、なんて思っていると急に身体が重くなり、僕は膝を付いた。

「……………あれ？」

「ど、どうしたの…………？ ちょっと、零司君!？」

「どうやら楯無さんと談笑したことで緊張の糸がほぐれたようだ……………あれ……………？ なんだか眠く……………」



それから零司は仮設の医務室に運ばれた。

見た目通り、大した怪我は追っていないかった。しかし零司はいざという時のために戦闘データを取っていたため、様々な情報が持たされることになった。

「ほとんど人型サイズのISに、所属不明のIS。第三勢力が出て来ている、というのは厄介だな」

「……………どうしますか、織斑先生」

「……………そうだな。敵の兵力や使用してくるモノの目処は大体わかったが、やはりな」

うるさかったので気絶させているが、こちらにも「オータム」という人質はいる。どうにかして交渉できないかと考える千冬。

すると仮設されたIS学園用の作戦司令室の中にある大型ディスプレイから映像が

流れた。

「こゝ、これは……」

「は、ハッキングです！ どうやらこちらの通信に紛れ込んだようで……」

「対応は？」

「ダメです。解除できません」

『そりやそうだ。こちらのメッセージを無視されたらお互い困るでしょ？』

男の声。それが司令室に留まらず、館内すべてに響き渡る。

「こゝ、この声はさっきの!？」

『やつほー、専用機持ちの諸君。元気かな？ 元気かね？ 元気だよ？ まさかまた別ルートで襲撃されてるとか間抜け展開とか俺やだよ？ 時期に館内の放送は止めるから、全員作戦司令室においでよ。あ、オータムも連れて来てね。一応、話をしたいからさ。』

(………まるで束だな)

と、内心思う千冬。ちなみに箒も同じようなことを思っていた。

専用機持ちが全員司令室に集まる。それをカメラを乗っ取って見ていたのか、男が画面に現れた。その姿を見た楯無、そして箒は驚きを露わにする。

「か、桂木悠夜!？」

『久しぶりだね、篠田箒……いや、今は篠ノ之箒だったかな?』

「知ってるのか、箒」

桂木悠夜——それは零司の親友の名前であり、そして篠ノ之箒がかつて剣道で戦った相手の名前である。

あの時はお互い全国優勝者ということもあり、接戦で悠夜が勝ち、箒はいずれ再戦を希望したが——当時の悠夜は言ったのだ。

「アンタが俺のレベルに達したら、ね」

あの時、その言葉を聞いたほとんど全員が訳が分からないと言う顔をしていたが、たった一人、観戦していた人間はその言葉を理解していた。

そのことを説明すると、悠夜が言った。

『だって、あの時の俺は3割程度しか力を出していなかったんだ。でもさ、俺は前みたいなギラギラとしていた篠ノ之の方が好きかな。なんていうか今のアンタは前よりも弱くなっているって感じがしてるな。やっぱりそこにいる織斑一夏って雑魚のせい?』

「黙れ!!」

箒が立ち上がる。他の1年専用機持ちたちも立ち上がるようにするが、それを制止したのは千冬だった。

「座れ、貴様ら。それで、貴様の要求は何だ?」

『人質交換かな。こつちにいる更識簪とそつちにいるオータムを交換。もちろん、お互い I S 付きで』

「……その要求が通ると思ってるのか？」

『じゃあ、こつちの子を見捨てるんだ。生徒に対して情は厚いつて話は嘘だったかあ』
「貴様……」

『まあ、更識の決定的にはぶつちやけどつちでも良いだろうけどさ、人の命をそう簡単に粗末にするのは許せないと思うけどなあ。ましてや、それがそちら側の悪魔の贄になる資格のある女だったら尚更だ。ブリュンヒルデと言えど、流石にオバンじゃ相手は無理だろうし』

その言葉にとある20代が舌打ちをした。

『ちなみに場所はここだ。今は誰も使われていない工場跡。そこで取引と行こうか』
「……その必要はないわ」

全員が楯無の方を向く。

「その取引にこちらは応じない。その子は煮るなり焼くなり犯すなり好きにしなさい」
「な、何言ってるんだよ、更識さん!？」

「そうですよ。捕まっているのはあなたの妹なのに——」

箒の言葉を遮るように楯無は言った。

「それがどうしたの?」

楯無が箒に向けた瞳はとても冷たいものだった。

普段から——それこそ、一夏たちに見せていたものとは圧倒的に違う。それこそ——

——殺戮者の瞳とも言えるそれを一夏らは気圧される。

「先程、本家から連絡があつたわ。最悪の場合、更識簪を見捨てるとね」

「……じゃあ何か? アンタは家の命令だからって自分の妹を見捨てるって言うのかよ!」

「そうよ」

冷静に告げる楯無。すると一夏は言った。

「この……人でなしが! よくそんなこと言えたな!」

そう怒鳴るようにな夏が言った時だった。

『——じゃあ、篠ノ之箒やセシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒがアンタに恋をしているというのに向に好きという感情に気付かないアンタは何様なんだ?』

突然の暴露にはば全員が顔を赤くした。一夏に至っては何を言われているのか理解できないと言う顔をしている。

「ちよ、ちよつと何を言っているのよ?!」

「そ、そうですわ!! 一体何の話をしていますの?!」

「じよ、冗談はよしてよ!!」

「? 何を照れているのだ?」

「……………き、貴様あツ!! 隠れていないで出て来い!! 今すぐ斬り伏してやる!!」

ラウラは平常運転だったが、他の4人は慌てる。当然だ。突然第三者によつて自分の恋愛感情が暴露されたんだ。冷静でいられるはずもない。

『そう言えば、弾の妹……………確か五反田蘭だっけ? そいつも好いているしお前を追いかけてI S学園に入ろうとしているのに安請け合ひしたとか。いやあ、ホント——冷静に考えてありえねえ。普通、友人の妹を破滅の道に入れようとする? しかも自分の立場もわからずに未だに友人の家に出入りするなんてさ——あたかもそこを狙ってくださいって言っているようなもんじゃん。いやあホント——頭悪すぎ間抜けすぎだよ、織斑一夏』

「テメエ、何でそんなことを知ってるんだよ!」

『ああ、弾に相談されたから。妹のI S学園の入学を諦めさせるにはどうしたらいいかってさ。あ、先に言っておくけど、俺は元々藍越学園生で弾や数馬、それに零司とはクラスメイトだったんだよ。ああ、そうだ。つて言うか今の話はどうでも良いか。それよりも取引だよ、取引。そっちの都合は良いから、朝の8時に指定する場所に来てくれ

「……いや、行かせろよ」

「……行かせろというのはどういう意味だ？」

ラウラの質問が悠夜に飛ぶ。悠夜は笑みを作って言った。

『連れてくるのは平坂零司の一人で、だ』

「待つて。今の零司君は藍越学園の生徒よ。このイザコザに巻き込めないわ！」

『仕方ないじゃん。織斑千冬は司令官ぶってて話にならないし、たぶんブランク酷くて相手にならない。そこに隠れて様子をうかがっているアラサーには興味ないし。つて言うか零司じゃないとこいつを誘拐した意味ないんだつて』

「……どういふことかしら？」

楯無の問いに、悠夜はハッキリと言った。

『俺の本当の目的は、平坂零司とガチバトルをすることだから。それにぶつちやけ、オータムもこの女の子もどうでもいいしね』

平然と答える悠夜に、全員は同時に「危険」だと思った。

e p. 14 少年たちの行動

『まあそういうわけだからさ、零司は絶対出してくれ』

「それは承諾しかねる。平坂は——」

『I S 学園の生徒ではない、だろ？ だから言ってるじゃん。こっちの本当の要求は平坂零司とのガチバトルだって。そうじゃないとこの女には死んでもらうしかないかなあ』

カメラが簪の方に移動する。彼女椅子に座らされている。だがそれはワイヤーで支えられており、大元を断てばその瞬間に簪が串刺しになるのは容易に想像できた。

その未来を考えてしまった楯無は、嫌な気分になってしまう。

「て……テメエ!!」

『わかってくれた？ まあ、どうやらアンタらじゃ少し話し合う必要があるみたいだし、何なら少し待ってあげるよ』

「そんなことよりもだ、テメエ！ このオータム様を見捨てるつもりか!?!」

混乱する一同の思考を遮るかのようにオータムが喚く。

『あ、いたんだ』

「いたよ！　ずつとここにな!!　　つて言うかテメエが連れて来いつて言つてただろうが!!」

『あー。そう言えば。どうでもいいから忘れてた』

「ふっぎけん!!」

扱いの酷さにふと、一夏は自分がされていることを思い出したがすぐに考えるのを止める。

『つてことでさ、少し考えな。じゃあまた後で』

そう言つて通信を切つた悠夜。司令室にはただただ沈黙が流れた。

その頃、悠夜がいる廃工場には複数の I S 反応があつた。悠夜はそれを感じたからこそ通信を切つて警戒を始めたのだが、今となつては向こうはそれはわからない。

悠夜は指を鳴らすとワイヤーに括りつけられた椅子に座る簪が消えた。実はあの簪は投影された偽物で本物は丁重に保護されている。まあ、単純に殺したところで悠夜に

とって色々な不利益が出るので避けているだけだが。

「さつてと、暴れますか」

悠夜は黒い両刃の大剣を出し、全身を特殊なスーツで覆ってフードを被る。そのまま工場の外に出ると、周囲にはISが滞空している。自身はISを動かさないのでもう見ても絶体絶命だった。

「桂木悠夜だな。貴様を拘束する」

「……いいぜ。その代わり——俺を拘束できたらな」

そう言った悠夜はその場から消え、3秒後に姿を現した。すると1機のISの装甲が吹き飛び、落下した。

「俺が高がIS程度の装備で攻めてきたことは褒めてやる。だがな——」

全員が驚愕する。あり得ないと思ったからだ。

本来、ISを倒せるのはISのみ。そしてこれまでたくさん人間がISすら破壊できる装備を開発してきた。しかし、結果は同じ。

だが今、自分たちの前にその常識を覆す存在が現れ、戦慄する。

「——いくら何でも、全て量産機って舐め過ぎだろ」

そう言った悠夜は彼女らの頭上に紫のビームを展開し、雨のように降り注いだ。



眼が覚めた。まだ少し眠いけど目が覚めた僕は一先ず現状を把握する。

どこか座敷みたいなところで寝かされていて、周囲には誰もいない。

(……………どこだろう?)

場所がわからないので検索すると京都らしい。まだ京都の中をうろついているんだっけ。よく見つからなかつたと僕の運を褒め称えたい。

(とりあえず腹ごしらえ、かな)

あと、シャワー。勝手に借りるのは申し訳ないけど、僕としては一度サツパリしたい

気分なんだ。

先に腹ごしらえのために手を洗い、座敷の外に出ると——誰かがこつちに向かつて走ってくる………つて、

「れ、零司!？」

「織斑君? 何慌ててるのさ?」

何か問題でも起こしたのだろうか? まあ織斑君だしあるかもしれないな。学園きつての問題児だし。

「た、大変なんだ! そ、そうだ! とにかく一緒に来て——つてどこに行くんだよ?!」

「食料調達」

「そんなことよりも大変なんだ!」

「君の大変とか大体は君の自業自得でしょうが。じゃあね。僕は君と関わる時間すら惜しいから」

そう言ったのに織斑君はしつこく、僕の腕を掴んで来た。

「待てよ! そんなことよりも重要な——」

「どうせ下らないことですよ。それに第一、僕はもう君たちとは何の関係もない。I Sは君たちの領分だろう? だったらもう僕を巻き込まないでよ」

大体、もううんざりなんだよ。というかISに関わってから僕は碌な目に遭ってない。しまいにはISに殺されかける始末だ。あの時は助けてもらったけど、もしどこかの誰かに助けられていなかったらと考えると寒気がする。

「……………桂木悠夜、知ってるよな」

「……………何で君がその名前を知ってるの?」

藍越学園を退学させられた奴の名前をIS学園の奴が知っているのはどう考えてもおかしい。

「そいつが簪をさらったんだ!」

「……………はあ」

バカバカしい。どうやら織斑君の頭は末期状態だったようだ。まさかIS適性がなかった男がIS操縦者をさらうなんてあり得ない。それに悠夜は武力や人間の管理能力は高いけど、何かを開発する能力は低い。まあ、手先は器用だから覚えれば色々作ってそうだけど。

「これ以上、君の冗談に付き合ってもらえないよ。オオカミ少年をするなら余所でやってくれ」

「じよ、冗談じゃないんだって! 本当なんだ!!」

「その非現実性はIS方面に向けてください」

ともかく、どこかで食料を調達だ。その後でゆっくりとシャワーを浴びれば良い。そう考えていると織斑君が僕に向かって叫んだ。

「——会長といい、零司といい、とんだ人でなし共だな!!」

「……………はあ?」

何が言いたいのか、この男は?

それに何より、今の発言はない。だとしたら誰の恋愛感情にも気付かない君はドクズじゃないか。

「そんなに簪が嫌いか!? 自分より無能だったらどうでも良いって言うのかよ!? ええッ?!」

「……………どうでも良いかな」

本当に、この男はムカつく。一体何を考えて無能という枠組みを簪さんにあてたのか。

それに第一、彼女もＩＳを持っているはずだ。それを悠夜が誘拐したなんて到底考えられない。まあ、あの機体が仮に実現していて、もしそれが悠夜の手元にあるならば話は変わってくるけど今のＩＳの技術力ではまず無理だ。だってそうじゃない。一体何をどうすれば次元を飛び越えられるオーバースペースを作ることが可能だというのか。

「ど、どうでも良いだど!」

「だつてそうじゃない。簪さんは専用機持ちで既に完成しているんだよ? しかも現在最高レベルのスペックの第三世代機だ。それを使って勝てずに誘拐されたっていうなら、それは彼女の実力不足だったということだよ」

そもそも彼女は機体開発の専門家じゃない。一体何をどうしたというのか、楯無さんが一人で機体を開発したと言う偽情報に踊らされて今に至っているだけだ。実は僕に協力してほしいって頼みに来ていたんだけど、本人からは「簪には黙ってほしい」と言われていたから黙ったままなんだけどね。

「たつたそれだけで馬鹿みたいに騒がないでほしいものだ」

「……………それだけで、だど? 幼馴染……………なんだろう? それなのに、「それだけのこと」で終わらせられるって言うのかよ!」

「うん」

というか、正直もうISの相手なんてコリゴリだ。

どういう経緯かわからないけど、仮に悠夜がどこかの組織に属しているとしたらおそらくIS操縦者と一緒に組んでいるんだろう。そして敢えて不意打ちか何かをするために自分を出したつてところかもしれない。変なところで知恵が働く悠夜のことだから可能性は高い。

「……………何だよそれ。あり得ねえ」

「残念。それが現実だ」

そう言つて僕は外に出て買い物に行く。途中で妙な気配を感じながら、だけど。

しばらくしてから僕は何も持たずに戻つて来た。全部店が閉まっていたのだから。中には荒れているものもあるけど、荒らされた状態でこれ以上は、という思考にはなれなかつた。

「……………駅にでも行くか」

織斑君と別れた後、五反田に電話した。どうやら藍越学園は僕を除いて全員避難していたようで、僕を置いて言ったのは父からの指示らしい。信頼されていると取るべきか否か迷うところだ。

でも、こうなると電車があるとは思えない。だとしたらどうにかしてここから逃げ出すか……………。

そう考えていると、僕がいた施設から聞き覚えがある声が聞こえてきた。

『———で、結論は?』

悠夜の声だった。

いやいや、まさか……………たまたまでしょ? そんなわけがないはずだ。

かなり大きな音だ。どうやら近くにスピーカーでも仕掛けられていそうで——

『問題外だ。もうこちらと平坂零司は関係ない』

『わつからない人だなあ。だから女つて嫌いなんだよ。ロマンも何もわかっちゃいないんだから』

あれ？ 見たことがない端末だ。もしかしたらあの戦いの最中に持っていたのかも
しれない。

申し訳ないなど思いながら冷静に考えると、疑問が起こる。どうしてあの端末から声
が聞こえてくるのかと思考する。つてまさか——

『誰がなんと言おうとこちらはN oと言わざる得ない』

『……それに、さつき話したけど興味なさげだったぞ』

『何?』

『……織斑君、それは一体どういうことかしら?』

刀奈お姉ちゃんの本気で怒っていた。長年の付き合いからわかる。これ、僕がやり過
ぎてお姉ちゃん部屋の一部を壊した時のモノとは完全に違う。

『さつき、零司に会ったんだよ。それで事情を話したけど、全然乗り気じゃなかった。む
しろ、「捕まった方が悪い」っていう態度で——』

——パンツ!!

端末の中から乾いた音がした。もしかしたら織斑先生が織斑君に制裁を加えたのか

もしれない。

そもそも考えてみれば織斑君がしたことは機密事項を漏らした情報犯罪だ。叩かれるだけならむしろ優しいと思う。

『な、何をしているんですか!?!』

『貴様、いくら嫁がしたことが間違いだとは言え何も叩くことはないだろう!?!』

……あれ? 確か今のつてポニーテールと銀髪ロングの声だったよね? この2人つてたまに見かけていたけど織斑先生に頭が上がりなかつたんじやなかつたつけ?

記憶を辿っていると刀奈お姉ちゃんが何かを言い始めた。

『……………確かに零司君は強いわよ。そう。強いわ。そして私は何度も思ったわよ。あなたじゃなくて、零司君がIS操縦者だったら良かったって』

……………刀奈お姉ちゃん、もしかしたら虚お姉ちゃんもだろうけど、どれだけIS学園でストレス溜めてるの?

そう言えば夏休みに入って少しした時に汗臭い状態の僕に躊躇なく抱き着いてたけど、やっぱりあれってそう言う事? だって去年はしてなかったし……………。

『ど……………どういことですか、それは』

『確かに桂木悠夜が言う通り、零司君は強い。だからって何? じゃあこれからもずっと戦えって言うの!? ふざけないでよ!!』

聞いたことないほどの悲痛な声だった。

『もう藍越学園の人間だったのよ!! それなのに I S に襲われて、みんなを助けるために自分を犠牲にしたって、その上でもう一度 I S が潜んでいるかもしれないところに付けて言うの、あなたは!!』

『……………そ、それって一体どういう——』

『要するに君が死ぬってことじゃない? まあ、一目瞭然だよ。あつさり目の前で僕に誘拐されるだけの木偶の房にはさ』

……………ん? どういう意味?

あつさり目の前で誘拐された? ちょっとそれって何の話?

『そ、それは——』

『まさか俺が瞬間移動したから逃がしたとか下らない理由を上げるとか言うなよ?』

……………ああもう、頭が混乱する。つまり何? 織斑君は自分のミスを僕に押し付けようとしていたってこと? ハハッ、本当に笑えない。

——君如きが、いつ偉くなったの?

自惚れ? 自信過剰? 高が I S を動かせるということの何が凄いか全く分からない。まさか、あんな雑魚のために僕が犠牲にならなきゃいけないの?

(……………冗談じゃない)

君が弱いからじゃないか。君が何も理解していないからじゃないか。なのに僕が行く必要があるって言うの………本当に、馬鹿らしい。

だから僕は端末の電源を切って寝た。それにそもそも、これはI Sの領分だ。僕には関係ないことなのだから。



零司が寝始めた頃、状況が進まない悠夜はある映像を送ることにした。

それは先程自分がしたことであり、今簪以外にこれだけの犠牲者がいるというアピールでもある。

次第に向こうの反応が届き、中には映されている現状を信じられないと言う声もあるが、

「残念だけど、これ現実なのよね。アンタらとの会話内容を軍にも送つたらすごいこの。これだけの兵力で攻めてきたから思わず倒しちゃった。ま、死なない程度にいたぶったけどこつちには更識簪以外にもこれだけの人質がいるってわけ」

そして説明。おどけた口調は崩さないように心掛けている。

「だからさ、そろそろ零司を引つ張り出すのは考えてもらいたいんだよね。大切なのはわかるけどさ。でもま仕方ないよね、アンタたちの中に強い奴がいらないんだから」

そう言いながらも意外に思っていることがある。さっきの司令室での会話の最中に零司が端末を消したことだ。

更識簪を誘拐すれば零司が食いついてくる。そう思っただが、反応が薄い。

(……………まさか本当に仲違いした、なんてことか……………?)

事実を確かめたいが、残念ながら悠夜にはそれができなかつた。

軍に対して勝利し、捕縛して別の場所に移動させた時に今のパートナーが首を振って禁止したのである。

(どうして零司を裏切ったのか聞き出したかったが……………)

ともかく今は待つしかないかと思つた悠夜は、先にベッドに入った。

I S学園勢のチームワークは最早最悪と言つてよかつた。

簪を助けることに揉めに揉め、今では楯無に對して心のバリケードを置いているような態度を取る一年専用機持ち。千冬はその状況を見て言った。

「更識。お前は本部で指揮を執れ」

「お、織斑先生!?!」

「山田先生、落ち着いてください」

驚いた真耶を落ち着かせる千冬。しかし驚いたのは楯無もだった。

「ど、どういふことですか……」

「簡単だ。本来なら代理を務める山田先生は防衛に守らせる必要がある。そして更識妹は「僕がするよ」何ッ!?!」

本来ならそこにいること自体があり得ない声に全員が驚いた。

その声の主はいつの間にか司令室の中心におり、投影された映像を遮っている。

「い、いつの間に……」

「れ、零司君!?!」

「一体どこから入って来たんだ!?!」

ラウラに楯無が驚きを声に現し、一夏が掴みかかろうとする勢いで飛び出した。だが零司にとつてそれはとても遅く感じ、簡単に投げる。

「アンタねえ!!」

「仮にも代表候補生だつて言うなら、自分が今狙われているつてことくらいは認識してもらいたいんだけどね」

そう言つて零司は指を鳴らす。すると楯無と本音以外の全員にビットが狙いを定めており、今にもビームが発射されそうになっていた。

e p. 15 自ら進む混沌の道

平坂並びに更識が使える秘匿回線から連絡が来たのは僕が寝ようと思った時だった。

僕はその電話を取ったのはただの気まぐれで、たぶん父が僕に連絡を取ろうとしたから、ぐらいいにしか考えていなかった。

『……久しぶりだな、零司君』

「……………え？ 茂樹おじさん？」

刀奈お姉ちゃんも簪さんの父親の茂樹さんからの連絡だった。

『単刀直入に言うが、頼みがある。簪を……助けてほしい』

「……………あんまり気のりしないんですけどね」

『わかっている。確かに、今回の件はこちらが彼女を放置し過ぎたのが原因だ。それに、まさかあの子があんな行動に出るなんて予想をしていなかった。本格的な発表はまだだが、12月ぐらいいに簪に対して絶縁状を出すつもりだ』

「……………へ？」

え？ いやあの……どういうこと？

僕は驚きながら思考を回す。でも、どうしても僕には更識家が簪さんに対して絶縁す

る理由が思いつかない。

「ちよ、ちよつと待つてください！ 一体何があつたんですか?! え? 絶縁って……嘘でしょ?!」

『本当だが……刀奈から何も聞いてないのか?』

「初耳ですよ」

そんなことになっていたのか……。

僕にはそんなことは知らされていないのは、刀奈お姉ちゃんの気遣いかもしれない。

『……本当は、この頼みは君にすることではないのは十分に承知している。だが、残念ながら私の部下には I S を倒せるほどの武装を持つ者を相手どれる人間はいない。

……頼む。簪を助けてくれないか?』

「……少し、考えさせてもらえませんか?」

その言葉は予想していたのか、茂樹おじさんは少し時間をくれた。

電話を一度斬つて情報を整理する。

おそらく簪が絶縁されている状態なのは、僕を拒絶ことかもしれない。僕の実力は世界を終わらせる力がある。簪が僕を拒絶したことで更識家は再獲得に動いたのだろう。今回の旅行で刀奈お姉ちゃんが来たのはその辺りが原因かもしれない。で、絶縁は仮に僕を迎え入れることに成功した場合、簪を見て逃げられることを防ぐためってことか

な。でも、それじゃあ足りない。

僕を迎え入れるのに、たった一つの存在だけじゃ足りないことは向こうも理解している。

今度はこちらから電話をかけると、茂樹おじさんが出た。

『零司君か。それで、どうだ……？ 簪の事は——』

「2つ条件があります」

そう言うに向こうは喉を鳴らした。もしかしてとんでもないことを頼むのではないかと思っているのだろうか？

「1つは簪の絶縁を破棄すること。そして、あなたの娘をどちらに渡すこと」

『……………最初からこちらはそのつもりだ』

「なるほど。ならばこちらとしても是非とも動かなくてはなりませんね」

だとしたら、もう僕の真の目的もバレている、か。

相変わらず情報が早いというか。

「では、是非約束を違わぬように——僕の本当の目的のためにも、ね」

『……………そうか、最初から君は——』

僕はその言葉を肯定し、電話を切った。



千冬も、そして現役国家代表であるアリーシャ・ジェセフスターフですらもその存在を感知できなかった。それもそのはず、零司にはそれぞれの警戒域というものを完全に把握する能力を持っているからだ。

もつとも、そのビットは指を鳴らすと同時に展開したもので、最初から展開して滞空させていたわけではないが。

「どういっつもりだ？」

千冬ではなく、一夏からその言葉が発せられた。

「何が？」

「さつき言つてたよな？ 行く気がないって。捕まった簪が悪いって！ なのに何で行く気になつてんだよ!？」

「気分」

「気分かよ!？」

騒ぐ一夏に対して零司は冷静に返す。

「それもあるけど、まあここで僕が行つておかないと後々面倒になるつてのは目に見えているし」

「何が——」

「どーせ君たちが行つたところで全員殺されてI Sを奪われるのがオチじゃん。そうなつたら誰が責任を取らされるかって話だしね。だったら僕が行くよ。僕の方がまだ生存率は高くなる」

「許可できない」

千冬の言葉に零司の気配が変わつた。

「それは僕が一般人だから？」

「そうだ。それにI Sも、以前に作ったマシンも持っていない。そんな奴を相手が指定しているかと言つて送り出すつもりはない。安心しろ。私たちなら絶対に更識妹は——

「ISを使わなければ男の上に立てないあなた方をどう信じろと？」

千冬の頬が少し反応した。どうやらそれはアリーシャも同じようで、攻撃態勢は取らないが警戒は強めている。

「……………生憎だがな——」

「——とここでさつきからどこを見ているのかな？」

全員がその言葉に訳が分からないと思った。何故なら、目の前に本人がいるからだ。ならば他にいるわけがない。それが、その場にいるほぼ全員が思ったことだ。

「僕は……だよ」

そう言つて零司はドアから入ってくる。

「よくできてるでしょ。このホログラム、結構自信作なんだ」

「そういう問題じゃないサ」

横から伸びる腕を零司は回避した。

「冗談にしては笑わないサね。君はもう私たちの信用を失っているサ」

「だったらこっちは好きにさせてもらいますよ。ここに来たのはあくまであなた方雑魚を試すためですから」

2人の殺気が濃くなつていく瞬間、それを楯無が遮った。

アリーシャも零司も手を止める。最初から本気を出す気はなかったのか、彼女の寸前で手が止まったが楯無は引かなかった。

「零司君。あの子はもう捨てるわ。だから——」

その日、その場にいる全員が啞然とした。

何故なら零司は楯無の唇を——己の唇で塞いだからである。突然見せられたキスシーンに楯無はもちろん、他の専用機持ちたちは驚きを露わにし、シャルロットは何故かラウラの目を塞いだ。

アリーシャも、そして千冬も彼女らよりも成長した大人だが、IS操縦者という点であまりそういう存在と巡り合えていないので耐性はない。もし彼女らに変なプライドが無ければ目を背けているほどだった。

ようやく口を離した零司に対して楯無は恥ずかしさからか顔を赤くする。

「な、何をやるのよ!?!」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん。僕は死なないし死ぬ気はないから」

「そ、そういう問題じゃない! それに、あなたはスコールたちに狙われて生き残ったばかりなのに、また死ぬような目に遭うなんて、私は——そんなの、堪えられない」

彼女は普段、感情を表に出すことはない。だけど今の楯無はどこまでも女の子で、純粋に好きな人をまた死地に向かわせたくなかった。だけど同時に、彼女は相反する感情

を持つている。

「でも本当は、簪の事を助けてほしいんですよ」

「それは——」

「別に僕に遠慮する必要はないよ。だって僕は仲違いしている君たちじゃなくて、一緒にいて笑っている君たちを見たいんだから」

そう、楯無は本当はそう思っていた。

本当は零司に行つてほしかった。零司ならどうにかしてくれるかもしれないという希望が楯無にあつたからだ。

「……………お願い」

絞り出すように言葉を出す楯無は、けれどもはつきりと言つた。

「簪ちゃんを……………助けて」

「わかつた」

快諾する零司。だけどそれはとある声に待つたをかけられる。

「待つてくれ！ 俺はそいつを信用できない——」

その言葉は無理矢理中断させられた。

楯無の前から移動していた零司は一夏の鳩尾を殴っていたからだ。

「アンタねえ——」

「貴様アツ!!」

鈴音とラウラが立ち上がろうとするが、それを制した千冬だった。

「座れ、貴様ら。それで平坂、本気で貴様を信じて良いのか？」

「教官!？」

「僕は賛成できません。いくら何でも危険すぎます！」

「じゃあ逆に聞くけど、僕が悠夜と戦っている間のここの守りはどうするって言うのさ？ それに、取引するにしたって向こうには最低でも2機はISがあるんだよ？」

「さらさら言えばISの反応を持った機兵がうじゃうじゃいる。悠夜が相手である以上、他の奴らを相手にはできない」

零司の言葉に全員が沈黙する。そして結局、零司が悠夜と戦っている間にIS操縦者たちがそれらを牽制もしくは各個撃破という作戦になった。

簪は自分が椅子に座らせられ、後ろ手に拘束されていることに気付いた。

今の彼女の体調は最悪とも言える状態であり、まさしく倒れる寸前だった。

そんな彼女の前に悠夜は座っている。

「さて、アンタに聞きたいことがある」

「……………何？」

「どうして零司を裏切った？」

単刀直入だった。

悠夜は虚ろな瞳で簪を観察する。簪は何も話そうとせず、ただ俯いて沈黙している。

しかし業を煮やしたのか悠夜は簪に銃口を向けた。

簪は一瞬怯えたが、それでも負けじと睨み返す。そんな時、その場に第三者の声が響

いた。

「悠夜様。その手は止めておいた方が良いかもしれません」

その第三者は幼女という言葉が合っていた。首には犬や猫に付けるような首輪がさ
れており、彼女の首を氣遣ってか少し大きめになっている。ただ、簪はそれよりも――
―その少女がとても篠ノ之束に似ているという事に驚きを隠せないでいた。

そんな簪を放置し、2人は話を続ける。

「どういうことだ、楓」

「先程、彼女の記憶や思想を辿る際に彼女にワールドページを施しました」

「……………確か、篠ノ之束の所にいる遺伝子強化素体が見える奴か。まあ、今更お前に「何でそれを使えるか」なんて聞くのは野暮だってわかってはいるが……………何を見せた？」

「とてもシンプルなものです。ただ、言うなれば——彼女は平坂零司と寝ていました」
「……………は？」

突然のカミングアウトに、簪は顔には出さないようにしているが激しく動揺していた。

「ちよつと待て。それって一体どういうこと!？」

「詳しく言えば、2人は裸になり俗に言う「愛を確かめ合っている」という表現が正しいというか……………」

「それって間違いなく零司だった!? もしかして織斑一夏の間違いだとか……………」
「間違いなく平坂零司でした。何でしたら、映像を見返しますか？」

楓は端末を差し出して悠夜に見せる。確かに相手は零司だった。というよりも親切心か零司以外はすべてモザイクであり、簪の声が聞こえる程度ですべて見えなくなっている。

悠夜がこの行動を起こす前、とある筋から聞いた話では簪が零司に刃を向けたと言う

事だった。

その事で更識本家は簪を捨てることを選択していることになっていて、それでも彼女を誘拐したのは難易度と、零司が一生懸命に彼女のために作っていたことを知っている。夏休みでの計画でもそれと同時にこなしていたのだから。

(そのために選んだが、こいつは一体……?)

悠夜は更識簪という女を読めないでいる。一体どのような理由で更識にとつてもメリットである零司を裏切ったのかというか。

「楓。こいつに聞く時間が惜しい。お前が知った情報をすべて話してくれ」

「はい。彼女が平坂零司に刃を向けた理由は至極単純な理由です。平坂零司を振り向かせるためです」

「——どうして……それを……」

「あなたは織斑一夏に確かに好意を抱いていた。しかしそれは恋愛感情ではなく、乙女しかないI S学園の中で唯一自分と趣味で語り合える存在だったから」

「!？」

「え？ 凶星？ ……で、その趣味って——」

「特撮ヒーローものですね。後はアニメ全般です」

「………確かにI S学園に話が合いそうなのって早々ないもんな。特に特撮系は」

さらに補足すると、零司はほとんど特撮系は見えていない。

そもそも零司は「そんな暇があるなら作る」という典型的な発明家であり、6歳の時から一切見ていない。アニメの知識も実はロボット系以外は全くなかったりする。

悠夜の視線はとも同情的になるが、楓は話を続けた。

「話を戻しますと、織斑一夏と行動を共にしていた彼女はある時、自分たちを狙う存在に気付いたのです」

「……………ああ、レイン・ミューゼルのことか」

「そういうことです。そのため、どうにかして零司と距離を置きたかった彼女はああいう手で遠ざけたわけです。ま、理由はもう一つありまして」

「何?」

「彼女の姉の更識楯無が平坂零司の事を好いていたので、ああいう形で別れたら間違いなく平坂零司が甘えると考えての行動だったようです」

「……………その目論み、ある意味正解だったみたいだけどな」

実際、今回の修学旅行では藍越学園の生徒たちが零司に襲撃しようと考えていたほどだ。

「ん? ということは、最悪こつちを見捨ててこない可能性もあるんじゃない?」

「それはないかと。現在、こちらに向かって——」

楓は言葉を切り、悠夜を突き飛ばして自分も飛ぶ。するとさつきまで2人がいた場所に熱線が通った。

「悪いな、楓」

「いえ。主人を守るのも奴隷の役目ですので」

「……………ロリコン?」

「悠夜様に特殊な性癖はございません」

そんな会話が繰り返されている所に、激しいバイク音をかき鳴らして一台のバイクが乱入してきた。

「久しぶりだな、零司」

「そうだね。じゃあこれ返す」

そう言つて零司は背負っていたオータムを思いっきり投げるが、悠夜は避けたことでオータムは壁に激突した。

「……………テメェら!! このオータム様になんて仕打ちを——」

「それだけ話す元気があれば大丈夫ですね」

「だな」

「だね」

楓、悠夜、零司の3人から蔑ろにされたオータム。しかし簪も含めて誰もオータムを

助けようとするな。

「楓、更識簪を守れ」

「わかりました」

瞬間、零司が楓に接近するが悠夜がそれを阻む。

「落ち着け、零司。楓は俺の忠実な下僕だ」

「……………ロリコンになったんだ」

「見た目よりもしっかりしているぞ、こいつは」

「そういう問題じゃないけど……………それで——」

—— 一体何の用？

確信に迫る零司に対して悠夜は笑みを浮かべた。

その頃、IS学園勢と亡国機業の専用機持ちたちが激突した。

e p. 16 人外たちの狂宴

「そうだ。零司に面白いものを見せようと思ったんだ」

そう言つて悠夜は端末を零司に放る。零司は受け取り、それを確認した楓は簪を連れてそこから逃げた。

ちなみに端末にはさっきの映像が流れていて、今度は簪のモザイクが取れているタイプのものだ。

「……………悠夜……………これ……………見た?」

「ああ。にしても驚いたぜ。まさかあの嬢ちゃんがお前を裏切つた理由つて言うのは――」

瞬間、悠夜は顔を逸らすと熱線が通り、余波がオータムの鼻先をかすめた。

「なるほど。……………見たんだ」

零司は端末を放り、展開した銃で破壊する。

「……………零司?」

「死ね」

さっきのモノとは比べものにならない出力が悠夜に連射された。

零司と悠夜が出会っていた頃、I S学園の専用機持ちたちは2人1組で行動をしていた。箒と鈴音、シャルロットとラウラ、セシリアと真耶、そして一夏と楯無。さらにアリーシャがI S学園が陣取っている旅館の周囲を警戒しており、4組はそれぞれ個別に行動していた。

「こちら更識。早速遭遇したわ」

楯無の視線の先にはスクールがいて、彼女もまた楯無を見つけI S「ゴールデン・ドーン」を展開する。

「見つけたわよ。オータムを返してもらおうわ」

「何の話かしら？ そちらの要求通りオータムは返したわ」

「……………どういふこと？」

スクールを疑問を浮かばせる。そして、その犯人がスクールの脳裏に過ぎり、舌打ちをする。

「なるほど。あなたたちも踊らされたということね」

「どういう意味だ!？」

「桂木悠夜が勝手に算段を整えたということよ。こちらにも何の連絡もなしに、ね」
すると指定した場所に爆発が上がる。

「あれは!？」

「確か言っていたわね。平坂零司と戦いたいって」

その言葉に不安が過ぎった楯無。彼女はただひたすら、零司の無事を祈りたいが先にすることがある。

スコールに攻撃を仕掛けようとした楯無。しかし先に楯無たちの下にビームが降り注いだ。

「——見つけたぞ、織斑一夏」

「お前は……何だ、それは!？」

声からして以前に出会った「織斑マドカ」と名乗った少女と思つた一夏。それは確かに正解だが、彼女が駆っている機体はイギリスから強奪した「サイレント・ゼフィールス」ではなかった。

「貴様の力を見せてみる、「黒騎士」！」

その言葉に応えるかのように「黒騎士」の装甲が光りを放つ。一夏と楯無の所にシャ

ルロットとラウラが合流した時、突然陽気な声が聞こえてきた。

「にやーん。せっかくの「黒騎士」の華々しいデビューを邪魔させないよ☆」

「あなた……」

驚く楯無を余所に束は右手に持つステッキを回す。

「きらきら☆ポーンっ♪」

すると楯無とシャルロット、ラウラのISが動かなくなった。

「……………これは……………重力……………」

「くそっ！ ここのまで強力なのか!?!」

3人はなんとか動こうとするが、ピクリとも動かない。

「にひっ。束さんの最新作、空間圧作用兵器試作八号こと《キングス・ファイールド王座の謁見》は如何かな？

ちよっとだけ出力高めでお送りするよん♪」

してやったりという顔をした束。そして――

「ついでだから、ISのコアを頂いちゃうよん」

無力化だけでは飽き足らず、IS自体を奪おうとする束は楯無の方に近づく。楯無が相手だからか、束はこれまで楯無が感じたことがないほどの濃密な殺気を放つ。

まるで命を刈り取られるのではないかというイメージを見せつけられた楯無。束があと一步という所に近付いた瞬間、何かにぶつかった。

「びぎやっ!？」

予想外の衝撃に混乱する束。瞬時に受け身を取った束はぶつかつたものを確認すると、見たことがない存在はそこにいた。

今まで小石程度でこかされたことが束はその行為に苛立ちを覚え、普段は聞かせない声のトーンでその存在に話しかけた。

「おい」

しかしその存在は束の方を振り向こうとしない。どうやら自分が呼ばれていることに気付いていないみたいだ。

その存在は左腕に装備している砲台を自分の正面に向けて短刀サイズの両刃剣を展開する。

「——とりあえず、死ね」

もし、この場にいるのが楯無ではなく簪ならば、全員に警告していたかもしれない。だが今この場にいるのは楯無なので、そうはならなかった。

「——ホーリーレイ」

砲口から白い熱線が飛び出す。それは突然現れた円を通ると砲口を転換し、ある存在を狙う。しかし狙った相手が攻撃を察知し、同様の攻撃で相殺する。

「——チッ。やっぱり倒せないか」

「——ねえ」

予めわかつていたのか、その存在こと平坂零司は舌打ちをすると後ろから掴まれた。それがまずかった。

反射的にトンファーを展開した零司は素早く束に攻撃した——が、束はそれを防いで反撃した。

「この束さんに喧嘩を売るなんて、随分と間抜けだねえ」

「零司君！」

「……………あれ？」

ようやく零司は現状を把握したのか、辺りにISがたくさんいることに気付いた。

「零司君、大丈夫？」

「うん。つて言うか楯無さん、危ないから下がってて」

「今この状況で言うセリフじゃないからね!？」

「……………まさか今ので無事なの？」

束はかなり力を入れて攻撃したが、ピンピンしている零司を観察する。それに彼女が気に入らないのは、自分の事を無視して話を進めていることだ。次第に怒りはじめ、もう一度、今度は零司に対して《王座の謁見》を行使した。だが、さっきの3人みたいに跪かない。

「な、何で!? あり得ないよ……まさか、故障?」

「何の話をしているのかわからないけどさ、たぶん機械の故障じゃない。あなたが何かをした時に瞬時に見極めて相殺する能力を使ったわけだよ」

零司の説明が終わった瞬間、東の上から刃が降ろされる。東は回避するが肩をかすめた。

「やあつと来たね、ちーちゃん!」

現れた千冬は零司を庇うように降り立ち、安否を確認する。

「大丈夫か?」

「……………見つけた」

そう呟いた零司は姿を消すとどこかに向かった。嵐のように去っていった零司にその場にいる全員が呆然とさせる。ちなみにその上空では一夏とマドカが戦っている。

「でも良いの、ちーちゃん。今頃あの旅館にいる人、襲われてるよ」

「何を——」

まるでその言葉を証明するように、さっきまで千冬たちがいた旅館が爆発した。

悠夜は逃げた。ひたすら逃げた。

何故零司が殺気全開で自分を殺そうとしているのか理解していないが、それでもたった一つ理解していることはある。

——殺される

故に、悠夜はひたすら逃げた。例え何と言われようと逃げ出した。

「——見つけた」

そんな声が聞こえたため、悠夜は足を止めた。

「……零司」

「さて、悠夜。死ね」

「待て零司！ さつきから何に怒ってるんだ!？」

心当たりがないため、生き残るため零司に直接質問する悠夜。零司は殺気の濃密度をさらに高める。

「……………何について……………決まってるじゃないか……………君が、簪の裸を見たことだよ!？」

「至極誤解だしテメエの好きな相手の裸を見るほど馬鹿じゃねえよ!!」

「まあいいや。疑わしきものは惨殺って言葉もあるし。IS学園から4人は助けた後に

全員に消えてもらうとして」

「洒落になってないことを言うのは止めろ!!」

悠夜は直感した。ちゃんと理由を説明しないとこの世界は終わる、と。

「落ち着け零司。もうお前だつてわかつてると思うが、俺はお前に話があつて呼んだんだ」

「そんなのとづくに知つてるよ。でも死ね」

「だから見てねえしそれらしいものは見たけどちゃんと加工されていたから!!」

「……………ほう。僕が受け取った時にはされていなかったけど?」

「——それはたまたまあなたが受け取った時に動画があなたに見せるための無修正タ
イプに進んだからでしょう」

悠夜はその声に焦り、現れた少女に頭を抱える。

「……………ロリコン?」

「いえ。ただ私は悠夜様にとって手頃な物というだけです」

「零司と同じで天才なだけだから。中二病を理解できるってだけだから」

楓が現れたことでさつきまでのギスギスした雰囲気は一変し、和やかなムードになつていた。

簪が場を伺いながらゆっくりと現れる。零司はすぐに感知し振り向いた。

「……………れい……………じ……………」

「……………簪」

零司は簪に近付き、腕を伸ばせる。簪は零司にハグしようと近付くが、零司が先に彼女の両頬を抓った。

「……………いひゃい」

「当然、だろうが！ 何で僕が渡したデータを無駄にしてんの!? あのシステムにはマルチロックオン・システム以外にもスペック強化のプログラムも仕込んでたんだよ!? 耐衝撃とかその他諸々が!!」

「……………使つてない」

「使えよ!! 何のために作ったかわからないじゃないか!!」

「……………アンチバリアウイルスと即効性の睡眠ウイルスが仕込んでいたので効くのは当然ですが?」

そうなのだ。悠夜が攻撃した時、打鉄式式にはこれまで開発されることがなかった特異なウイルスが仕込まれ、簪はすぐに眠ってしまったのである。そのためあっさりと捕まり、抵抗しなかったのだ。

「仕込んであったんだけどなあ……………」

彼方を見る零司。そんな彼に楓は端末を渡した。零司は受け取って言われるがまま

再生すると、楓が素早く零司の耳にイヤホンを入れてプラグを刺して彼にのみ聞こえるようにした。

それによつて零司は徐々に顔を赤くする。次第に鼻血を流すが零司は視聴するのを止めない。簪は必死に止めようと行動するが、零司はまるで見えているのか攻撃を回避して最後まで見終えたと同時に地面に倒れた。

「まだだ……まだ終わらんよ!!」

そう叫びながら立ち上がろうとする零司。致死レベルの血を流しているが、そこは例の回復コアで回復する。

「とりあえずだ。簪が僕をどう思っていたのか正直色々と処理し切れていないけど理解した」

「……それは俗に「理解していない」と言うのでは?」

「こいつの場合、理解しているが本当に思われていたことに処理が追いついていないんだ」

悠夜が楓に説明すると、零司は真剣な顔で聞いた。

「で、話つて何?」

「……………何のことだ?」

「純粹に戦いたいなら時期を見て攻めれば良い。だけど君はわざわざ簪を誘拐して僕を

おびき寄せたという事は、他の奴らには聞かれたくはないってことでしょ？」

「……………名答だ。だがそれは——」

悠夜は簪を見る。零司は悠夜の意図を察して簪に離れてもらおうとすると、爆発音がした。

「……………旅館が爆発している？」

「オータムか。そう言えば放置してたな」

「完全に存在を忘れていましたね」

「……………でも、IS学園の教師は全員何らかの武術の心がある。そう簡単には——」
その言葉で零司はある存在を思い出す。

「……………ISの反応を持った人型兵器か」

「ああ。俺たちから離れたオータムが呼んだんだろうな。篠ノ之東も面倒な物を作る」

呆れを見せながら悠夜はそう言った。そしてあることを思い出して零司に告げる。

「零司、お前の機体を乗せたトレイラーがここから北東に行つた場所にある。お前は機体を受理しろ」

「……………悠夜、君は敵なんじゃ——」

「目的のために亡国機業に入っただけだ。ま、実力で入つただけだな」

さらりと凄いことを言つた悠夜は零司の背中を押した。

「行け」

零司は少しふらつきながらも体勢を立て直してそこに向かう。

「更識簪、これを」

「……打鉄式」

その待機状態である指輪を受け取った簪は一度会釈してから零司の後を追った。

「……それにしても、説明しないで良かったのですか？」

「面倒なのは目に見えているからな。今は合流して亡国相手にも立ち回れることを証明させた方がよい。……それに」

「それに？」

「説明しようがしまいが、どうせ零司は暴走しない限り自分から乗らないからな。というか仮に暴走したら——たぶん俺以外の誰にも手を付けられない」

確固たる自信をもって答える悠夜。楓はまるで甘える猫のように悠夜にすり寄った。

「……死なないでくださいね」

「死にやしないさ。ただ近畿地方を中心に日本が割れるのが最小被害だ」

「……それは困ります」

悠夜の右手の中指に嵌められた黒い翼が鉋物を囲う姿を象った指輪が光った。

合流する途中、零司は追いついた簪に一つだけ頼みごとをしていた。

「悠夜と会話していたってこと、秘密にしておいてくれないかな」

「……………もちろん」

頷いてから簪は零司の腕を取り、自分の方に引き寄せてキスをした。

不意打ちだったこともあって零司は反応が遅れる。そして、さつき自分がしたことがそのまま帰って来たので楯無が思ったことを理解していた。もつとも、零司は楯無に好かれていることに全然気づいていないが。

「と、とにかく、今は旅館の方だ」

「……………教師の事が心配？」

「本音以外は興味ないかな」

そう言いながら旅館に仕掛けたカメラで状況を観察する零司。そこには——打鉄を纏った本音とアラクネを纏ったオータムが戦っていた。

e p. 17 最悪の覚醒

爆発音を聞いたのは、当然ながら零司たちだけじゃなかった。

敵を見つげるために分散していた箒と真耶、そして鈴音とセシリアもまた感知しており、旅館に向かっていている道中で4人は合流していたところ、強襲された。

「この先は通行禁止だぜ！」

「その声……やはり更識さんの言う通り、ダリル・ケイシーさんなんですな」

「そう言う事だぜ、山田先生」

黒い炎を辺りに展開して放つダリル。4人は回避するが濃密な弾幕に徐々にダメー
ジが減らされる。

「逃げられるものならば逃げてみな！」

先に放出された黒い炎よりも純度が高くなったものが放出され始める。鈴音は回避するが炎の玉が爆発して鈴音に当たった。

「鈴さん！」

「鈴！」

「大丈夫。かすり傷よ」

そう言って宥める鈴音。しかしシールドエネルギーは大分消耗しており、今すぐに補給する必要があるほどだ。だが、鈴音はそんな状況に関わらず個人間秘匿通信プライベートチャネルで指示する。

『それよりも、箒と山田先生は今すぐここから離脱して旅館に向かってください。ここはアタシたちで食い止めます。やれるわね、セシリア』

『もちろんですわ!』

『……わかった。山田先生、行きましよう』

『………はい。お二人とも、くれぐれも無茶はしないようにしてくださいね』

真耶は教師として本当は残ろうと考えたが、これまでの彼女らのことを考えて任せることにした。

とはいえ、この炎の弾幕から逃れる術は今はない。おそらく、生徒3人ならば何の打開策もなかっただろう。

『篠ノ之さん、私に考えがあるので上に乗せてください』
『わかりました』

真耶はかつての一夏のよう^{幕上}に箒の上に乗ると、自身が駆るラファール・リヴァイヴ・スペシヤル「シヨウ・オブ・マス^ト・ゴ^レオン」のウイング状に繋がっている巨大シールドが箒と真耶を包んだ。

「今です！ 加速してください！」

真耶の指示に従った筈は紅椿を加速させると弾幕を無理矢理突破する。

それを確認した鈴音は防ごうとするダリルに向けて衝撃砲を撃った。

「チツ。まあいいや。オータムもたぶんアラクネを回収しただろうし」

内心「また捕まるんじゃないかねえかなあ」と思ったダリルだが、今は目の前の2人に集中することにした。



「簪、先に打鉄式式で向かってくれ！」

「……わかった」

僕から距離を取り、打鉄式式を展開した簪は先に旅館に向かう。あの軽やかな動きは本当に凄くなって思ったりする。僕なんてマジックコアに頼りきりだからなあ。

言われた通りの場所に向かっていると、銃弾が飛んでくるので前方にシールドを張る。

「待て！ 坊主だ！」

「……大将、あなたたちも来ていたんですか」

「ウチのボスの指示でな。無事合流できてなによりだ。それよりもだ。あそこにお前さんの目当てのモノが寝かせてある。プレゼント付きでな」

「わかりました」

返事をした僕は指示された方向に移動すると、僕を待っていてくれたのか見知った顔が手を振った。

僕は素早く移動してトレイラーの中に入る。聞いた通り、確かに機体は寝かされていたのでコックピットには背中から入る必要がある。

(それはそれでワクワクするけどね)

不謹慎だけど、笑みを浮かべる。パイロットスーツは来ていないけどこの際仕方な

い。

機体を起動させてエネルギーが機体すべてに行き渡るのを待つ。あと5……3……2……1……起動完了。

そこで僕はようやく気付いた。白鋼が——本来の姿になっているのを。

(……………プレゼントってこれか)

そう言えば設計図はすべて渡していたんだった。僕が戻るのをずっと待っていてくれたんだ。

「……………ありがとう」

僕は遠隔操作でトレイラーのハッチを開き、上昇発進させるためにハンガーを移動させる。そして——

「平坂零司、白鋼、行きますー！」

ハンガーから分離させると同時に上昇させ、ウイングスラスターからエネルギーを放出させて移動した。目指すは——簪のいる場所だ。



簪が目的地に着いた頃、既にその場には箒と真耶が到着していた。しかし2人はオータムと戦っておらず、別の存在と戦っている。

(…零司から聞いた、人型でもIS反応を発する存在……………)

荷電粒子砲《春雷》で人型ISを破壊する。それで2人は簪の存在に気付いた。

「更識さん、無事だったんですね!？」

「大丈夫か? あの男に何もされていないか?」

「……………うん。それよりも、本音は——」

施設の一部が吹き飛ぶ。その音の方を向いた簪は打鉄を纏った本音が倒れているのを見つけた。

「本音!」

「かんちゃん！ ダメ！」

本音の方へと向かう簪。しかしそれは本音を仕留めようとする人型 I S が阻もうとする。

「くっ!？」

「簪！」

簪に取りつこうとする人型 I S を箒が《穿千》で破壊する。

「大丈夫か!？」

「私は大丈夫。それよりも本音を——」

「布仏は山田先生が——何っ!？」

箒が真耶の方を見る。確かに既に本音の前に出ていたが、何故か苦戦を強いられていた。

「オラオラ、どうしたあツ!! どいつもこいつも弱えゾオツ!! 最高だなあ! このマルチロックオン・システムって奴は!!」

「……………まさか」

アラクネは第二世代型 I S の中でも特殊な存在だ。BT兵器のように4本の I S が独立的に稼働し、ナイフや銃で攻撃する。それがマルチロックオン・システムでさらに強化されているのなればとんでもないことになる。

しかもそれは——

「まさかそれ、USBから——」

「おうよ。とんだザルセキユリティだったぜ」

簪は冷や汗を流す。

零司は簪に使わせるために渡したと言っていた。そのためセキユリティレベルを敢えて下げていたのだろう。それがまさかこんなところで敵に回るなんて……。

(……………使っておけばよかった……………)

だが、今ここでそんなことを後悔しても遅いし、敵はせつかちだという事もあった。ゆつたりしている敵を見逃す気はない様だ。

オータムは1人はボロボロとは言え4人が相手だと言うのに引かない。

「しかも搭載されている武器はどれもこれも強力だ。気に入らねえが、スコールが平坂零司を欲する理由がわかったぜ」

レールガンを展開して攻撃する。真耶はいち早く前に出て3人を庇った。

「死ねッ死ねッ死ねッ!!」

装填が早く、尚且つ威力が高いこともあって3人は攻撃に転じれないその時——別の場所で爆発が起こった。

威力と音が大きい爆発に5人全員がそつちを向く。ハイパーセンサーが爆発した機

体とその破片、そして落下していく搭乗者。それは——零司だった。

それを確認したオータムは瞬時加速でその場から離脱する。

「逃がすかッ!!」

箒がオータムの後を追う。だが箒は別の指示をした。

「箒! オータムよりも先に零司を確保して!!」

「! わかった!」

箒も薄々気付いていたのだ。零司が自身の姉と同等の存在かもしれない、と。それをオータムが確保した場合、自分たちにとって大きなマイナスになるということを。

故にすぐに箒の指示に従った箒は零司を助けるために向かった。



目の前には黒い炎の弾幕が迫って来た。僕はそれを回避すると、さらに僕を追って炎群が迫ってくる。それを回避する。

(どうやらこれを突破しないといけないみたいだ)

面倒な存在だけど、簪の反応は既に旅館に近付いているから大丈夫だろう。だから僕はダークグレーのI Sに攻撃を仕掛ける。

「白鋼!？」

「君たちは後方支援を。特にそのチビはボロボロだから無理しないでね」

「誰がチビだ!!」

「大丈夫。チビにだって需要はあるから。何なら僕の知り合いに紹介しようか? オー
ルナイトで帰れても白濁まみれかもしれないけど」

「それは嫌あッ!!」

心から叫ぶおチビちゃん。迫ってくる黒い炎を相殺すると攻撃してきた女に舌打ちされた。

「……………またテメエとか。今度は変な結界張らないんだな」

「いやあ。あれって結構消耗激しいんだよ？　だからやらないし、やる必要もない——かな!!」

僕の周囲にさらなる機体反応が現れる。

「そんな、あれは——BT兵器!？」

「舞え、《サーヴァント》」

10基のビットが僕の思い通りに舞う。相手もかなり驚いているけど、学園のビット使いは雑魚か何かだろうか。

「どうなってるんだ。前まではただのロボットだったはずだろ!？」

「どうして僕が雑魚に本当の白鋼を見せなきゃいけないのさ!!」

大体、最初から自分たちで作れば良いのに。材料があるのに作れないなんておかしいとしか思えない。

「墜ちろ!!」

「当たらないよ。僕らはね!」

《サーヴァント》を戻して迫りくる弾幕を回避する。こうした方が楽に回避できるからだ。別に同時回避ができないわけじゃない。

「厄介な存在だな。テメエは!!」

「ISとは違うんだよ、ISとは!!」

炎の弾幕を盾を使って抜け出した僕はまた《サーヴァント》を飛ばして攻撃させる。当然、自分もビームを撃って攻撃する。

「そんな………わたくしとは圧倒的にレベルが——」
後ろで何か言っているけど気にしない。

ある程度接近したのでビームサーベルを展開して攻撃するが、回避された。

「機動力はあるようだね」

「当然だ！ 雑魚共と一緒にするな——」

「それはこっちも同じだ」

相手は黒い剣を展開して斬りかかる。それを回避した僕は相手の動きを先読みして攻撃するけど、反応が良くて攻撃が当たらない。相手のレベルは相当なものだということか。

「もらった!!」

また弾幕か。でも、そんなものは僕には通じない。

迫りくる火球を回避し、牽制の中に本筋を入れても相手に通じない。戦い慣れしているタイプか。それに相手は炎を操るミューゼル。なら、こっちも出し惜しみはなしだ。

操縦と同時に氷のマジックコアを使用しようとしたところで、それは起きた。

気が付いた時には、僕は落下していた。

コックピットから出たわけじゃない。確かいきなり、機体にアラームが発生したんだっけ。

追加でウイングスラスターを装備したのが問題だったのか……？ いや、そんなはずはない。あの人たちの技師としての腕はかなり高い。そんな些細なミスをするほど落ちぶれていない事は知っている。じゃあ、だとすれば何だ？ 当たったってわけじゃないし、コックピットにビームが直撃しても、1発や2発じゃ破れないようになってい

る。
考えている間に僕の落下する感覚はなくなつた。

「……………捕まえたぜ」

バイザー越しに嫌な顔を浮かべられる。

「ごまあねえなあ。まさか機体が爆発するとは思わなつただろうよ」

「……………どうして……………それを……………」

聞き返した僕に対する答え。それが――

「だってそれはこのオータム様が爆弾を仕掛けさせたからだ。感謝しろよ？ スコールのために生かしてやったんだからなあ!!」

……………爆弾を、仕掛けた？ しかもこの女が……………？

たぶん戦闘のゴタゴタでの出来事だったんだろう。意外にこの女は頭が良い。

「君の評価を改めてあげるよ、オータム」

「オータム様だっつってんだろが!!」

「曲がりなりにもこの僕を出し抜いたんだ。そのずる賢さは十分に評価に値する。でも

――

オータムの顔を殴った僕は怯んだ隙に蹴りを食らわせて離れる。

「デメエ!! ぶっ壊してやる!!」

おそらく足か、それとも腕か。どっちにしろ、スコール・ミューゼルの命令で動いている以上、僕を完全に壊せない。

落下する僕を追ってくるオータム。下降するスピードを緩めた僕に驚いたオータムは慌てて機体を止める。その隙に僕は剥離剤を使ってオータムから機体を分離させた。

「なっ!?!」

「何を驚いているのさ？ これくらい、ISを相手にするなら持つていて当然でしょ」

するとオータムは手を挙げて高らかに叫んだ。

「戻って来い！ アラクネ!!」

だがアラクネは剥離剤から分離しない。当然だ。そんなこと、ありはしないのだから。

「な、何でだ。織斑一夏は戻せたのに!?!」

「君の使い方が荒かったんじゃないの?」

冗談めかして答えた僕はオータムを掴んで滞空した。

「は? 何で浮いて——」

「風魔法なら飛べるよ。ま、使えるのは僕だけだけ」

とりあえずまだ戦闘が続いている区域に放り込んで戦闘を中断させるか。チビと金髪はレイン・ミューゼルと交戦しているし、手っ取り早く終わらせるのはスクール・ミューゼルを黙らせるしかない。

そう判断した僕は織斑たちの戦闘区域に移動する——と、信じられないものがあつた。

「——白騎士?」

何故かそこには白騎士がいて、黒い機体と戦っている。データ共有した時にみたサイレント・ゼフィルスに見えるけど、かなり様子が変わっていた。

(……………まあいい。今はスコールを探さないと……………)

スコールは既に見つかっていた。楯無さんと直接戦っており、僕は加速して2人の戦いに割って入った。

僕の三又槍はISと同じ素材で使われているし、それ自身がビットとして動くので止めるのに最適だ。

「零司君!」

「平坂零司。それにそれは——オータム?」

「スコール、もう撤退してくれない? この女は返すから。それとも——今すぐ殺して良い?」

今僕らがいる高度は300m。重力魔法を使えば時速1000kmのスピードでオータムを殺すことができる。

後ろで楯無さんが何か言いたそうにしているけど、意外にオータムを人質にしたのが効いたのか「わかったわ」とスコールは答えた。

「……………え?」

「交渉成立だね」

実は僕も結構動揺している。今度攻めて来たら真っ先にオータムを人質に取ろうと思った。

とりあえずオータムを返却すると僕は突然誰かに押された。

(しまった。油断し——)

反転して攻撃態勢を取ろうとした瞬間、僕は目の前の光景を疑った。

何故なら攻撃を受けたのは楯無さんで、彼女はそのまま下へと何の抵抗もせず落下したのだから。そして僕はその犯人を見た。その犯人は——白騎士だった。

——力の資格が無い者は、死ね



「楯無さん!!」

落下した楯無さんの傍に零司が降り立つ。ISの展開は解除されている。零司は脈を図ったが正常でどうやら気絶しているようだ。

しかし零司は安堵することはしない。半ば放心状態でどうすれば良いかという考えがすべて飛んでいた。

「零司! お姉ちゃん!」

簪に箒、セシリアが着地する。簪は楯無に駆け寄り様子を確かめる。

「零司、一体何が——」

簪は楯無が無事だったことに安堵し、次に零司に触れようとした瞬間、伸ばした手を止めた。

「……………れい……………じ……………どうしたの……………?」

「……………僕は……………勘違いしてた」

その言葉を皮切りに、さつきまで黙っていた零司は話し出す。

「2人を守るためには、ただ現れた火の粉だけを払うだけで良いんだって思ってた。でも、違った。IS学園も、女権団も、亡国機業も、そして世界すらも壊さなきゃいけなかったんだ」

「おい、何を言っている」

「——そして、ISすらも、壊さなきゃ……いけなかったんだ」

すると、零司の胸から漏れる。独りでに零司の服の中からネットクレスが浮かんできた。

——じゃあ、私を使って

その声は3人に聞こえなかった。

「……………何を——」

——私は、あなたの力。あなたが望む最強を示す力

「僕の望む最強を……示す……力……？」

「さっきから何を言っているんだ、お前は——」

零司に近づく箒。すると力が箒を拒絶し、箒の手を弾く。

「っ!? これは……一体……」

「——箒ちゃん、離れて!!」

条件反射というものだろうか。

箒は言われた通りその場から離れる。すると誰かが零司を蹴り飛ばし、その衝撃で零司からネットクレスが分離する。

「大丈夫、箒ちゃん？」

「姉さん! いきなりなんですか!？」

「ちよつと邪魔者を排除しようと思つてさ」

そう言つて東は零司のネックレスに触れようとすると、ネックレスから棘が生え、東の手を貫通させた。

「篠ノ之博士!？」

「姉さん!!」

「大丈夫だよ。にしても、まさかこいつもアンチISSコアを持っていたとはね」

「アンチISSコア？」

「うん。どこの誰が開発したのかわからないけど、対ISS用ISSだつてさ。それがあればISSとも対等に渡り合えるつて話だけど、人格そのものを破壊するつて危険なシロモノなんだよ。ま、馬鹿な人間たちにはお似合いの偽物——」

「——残念ながら、偽物じゃありませんよ」

その声の方を向いた箒は唾然とした。何故ならその声は楓であり——東とうり二つなのだから。

「……………お前」

「初めまして、篠ノ之束^{オリジナル}。そのコアはアンチISSでもなければISSでもありません」

楓はそう言うのと、徐々に分離を始める。

「死ねッ!!」

「残念ながらこれは幻覚。あなたがどれだけ攻撃を加えても意味はありませんよ」

「つて言うかどういことだよ!? まさかこの東さんが知るコアが他にもあるとでも!?」

「マジックコア、そして——今あなたが破壊しようとした平坂零司のRコアですね」
東が振り向くと、零司が倒れた場所には何もなかった。零司は既に立ち上がっており、ネットワークスを回収している。

「……誰だ、お前は——何故姉さんと同じ顔をしている!?!」

「ご本人にお聞きください。ただ私は忠告をしに来ただけですので」

——死にたくなければ、今すぐここから去りなさい

簪の身体全体が震える。簪は知っているのだ。この恐怖は誰からのモノかを。

「——簪」

名前を呼ばれた簪は零司を——まるで懇願するように見る。

「……………なん……………ですか……………」

「彼女を頼む。ここから南に行つたところに戦闘前に呼んでいた医療船があるはずだから。このパスを使えば彼女を治療してくれるはずだ」

「……………わかり……………ました……………」

投げ渡されたパスを受け取った簪は楯無を抱えてすぐに離脱した。

楓も既に消えている。束は嫌な気分になったが、今は零司を優先して潰そうとした瞬間——信じられない光景が目に入った。

「……………何で……………男のお前がI Sを——」

零司は答えない。目の前に敵がいる。彼にとって——それだけで十分すぎる理由なのだから。

「……………消えろ」

激突する2人の前に現れた零司。白騎士は即座に敵と判断し、攻撃する。

しかし白騎士が付き出した《雪片壱型》は折られた。

「……………何故——」

「当然だ。僕は——生まれながらにして最強なんだから」

そう言って零司は白い球体を右手に生成し、それを白騎士にぶつけた。

e p. 18 破壊と惨滅のロマン

「……………逃げよう」

東が去った後、簪はそう言った。

「に、逃げると言っても、まだ一夏たちも見つけていないのだぞ!」

「……………見捨てる」

「み、見捨てるってあなた、よくそんなこと言えましたわね!!」

セシリアが簪の首根っこを掴む。そこでようやくやく、簪の顔が彼女の髪以上に青くなり、震えていることに気付いた。

「……………勝てるわけない……………勝てるわけないよ……………あんなの……………」

「仮にも代表候補生でしょう!?! 全員揃えばどうにか——」

「——ならねえよ」

上空で爆発が起こると同時に全員が聞こえた男の声を追った。

「桂木悠夜……………貴様——」

「更識簪の判断が最良だ。お前ら、今すぐここから離脱しろ」

「あなたの指図は受けませんわ!」

「犯罪者の言う事を聞く気はない！」

「……………そうか。ともかくだ、その雑魚女2人はともかく、更識簪は今すぐ平坂コーポレーションの医療船に移動して姉を預けて来い。たぶん、そいつが死んだら地球が崩壊する」

突然のカミングアウトに2人は呆然とする。ただ簪だけは頷いて楯無を連れて消えた。

箒とセシリアは簪が行った方向を睨んだが、悠夜がため息を吐いたことで我に返った。

「一体どのような経緯で平坂さんがあなたを逃がしたかわかりませんが、わたくしたちがあなたを捕まえますわ」

「覚悟しろ、桂木悠夜」

「……………そんなことよりも、良いのか？」

「何がだ？」

「俺に構うのは良いが、白騎士がお前たちが好きな織斑一夏なんだが？」

二人は驚きを露わにする。さつき零司から受けたダメージは絶対防御があるとは言えシャレにならないレベルだ。

「クソッ!？」

「今日の所は見逃してあげますわ!!」

「うっわー小物くせー」

棒読みでそう言った悠夜。2人の姿が無くなったのを確認した悠夜は自身も白鋼と同じ機体を展開して目的地へと向かった。

白騎士がダメージを食らって落下する。それを見たマドカは信じられないという気持ちもあつたが、何よりも急に現れて横取りをした存在に殺意を芽生えさせた。

「おい……貴様……」

「……………」

「……よくも……私の獲物をおおおおおおッ!!」

斬りかかるマドカ。しかし零司はその攻撃を蹴りでいなし、怯んだマドカに容赦なく

連続で蹴りを入れる。

フィニッシュと同時に吹き飛ばされたマドカはいくつかの施設を破壊して——突
然斬られた。

「何ッ!？」

マドカは目を疑った。それもそうだろう。さつき飛ばしたはずの白鋼が自分の背後
にいるのだから。

「貴様、どうやって——」

「——弱い」

白い装甲に紫の筋が現れる。白鋼の背部スラスターから紫色の粒子が放出される。

「消えろ、ゴミが——」

白銀の剣を展開した零司はマドカに振り下ろしたその時、とある機体が乱入した。

「横から失礼」

「桂木悠夜!?! 貴様が何故 I S を——」

「普通の I S とは違うんでね。零司、ここは引け。更識楯無をやったのはこいつじゃない
い」

「……………」

悠夜に言われた通り、零司は武器を収納する。

「……………君、その機体をどこで手に入れたの？　今の技術じゃ黒鋼の再現なんて無理でしょ」

「お前の白鋼と同じ経緯だ。楓が開発したRコアによって生み出した。だからほぼ全機能が使用可能だ！」

ドヤ顔をする悠夜に零司は笑った。

2人にとつてこうしてバカをするというのはとても楽しく、至福とも言える時間でもあった。もつとも、零司にとつては簪の世話を焼いたり楯無と話をしたりする方が楽しいが。

「——おい」

だがそれはマドカにとつて関係のないことだ。

「何を談笑しているのだ!!　どけ！　悠夜！　何なら今すぐミンチに——」

「余計な喧嘩を吹っ掛けるな。悪いな零司。この戦闘狂、織斑一夏にご執心でさ」

「こつちこそごめん。君の彼女を再起不能にしてしまう所だった」

「誰が彼女だ!?!」

「全く。少しは状況を見ろよ。お前の敵は白騎士だろうか？」

悠夜は冗談めかしてそう言うと、零司の笑みが消えた。

「……………ああ、そうだった」

周囲に殺気が漏れ始める。それを感じた悠夜は笑みを浮かべるが、触れれば消滅する気すら感じるマド力にとって恐怖を感じ始める。

「本当はね、悠夜。君と全力で戦いたいけどまた今度にしよう」

——ここは地球だから

そう言つて零司は穴を生成し、その中に飛び込んだ。

「……………撤退した、のか……………？」

「そんなところだ。ま、確かに俺たちが戦う舞台は地球じゃ狭すぎるな」

笑みを浮かべながらそう言った悠夜は、どこかに行こうとするマド力を掴んだ。

「離せ！ 私織斑一夏を——」

「今は止めておけ」

悠夜の顔は真剣だった。

まるで愛しい人——とまでは行かないが、まるで大事な何かを思う目をマド力に向ける。

「お前じゃ、零司は勝てねえよ」

「ふざけるな!!」

マド力が叫ぶ。その叫びはまさしく何かを折られそうになり縋るそのものだった。

「私はたくさん努力したんだ。ずっと死に物狂いだっただんだ！ それを、あんな訳の分

からない存在のために諦めろって言うのか!？」

「そうだな」

悠夜は残酷にもそう言った。

マドカは《フェンリル・ブロウ》を展開して悠夜に攻撃する。しかしそれよりも早く悠夜がある剣を展開して《フェンリル・ブロウ》を破壊した。

「……………例え、お前が努力したところで——超えられない壁というものは確かにある」

「……………」

沈黙するマドカ。あまりの呆気なさ故に放心してしまった彼女に通信が入る。

『エム、今すぐ撤退しなさい。……………エム?』

「こちらで通信を確認した。エムと共に帰投する」

『……………あなたには色々と聞きたいことがあるわ。桂木悠夜』

「お好きなように。ただ答えられないものは答えない。それだけだ」

マドカを掴んだ悠夜は離脱した。

既に話は通っていたみたいで、簪の姿を確認した船はヘリポートに着陸を指示する。指示に従った簪を既に準備されていたストレッチャーと医師団に楯無を預けた彼女は自分の父親である更識茂樹に連絡した。

『……………何のつもりだ、馬鹿娘が』

「どのような内容で、零司に私を助け出させましたか？」

簪は本音を助ける時、予め本音から今回の騒動の断片を聞いていた。その中で簪がとても気になってものが一つだけあったのだ。

——零司が簪を救出すると言ったこと

一夏曰く、最初は参加を拒否していたとのことだが、それが急に参加すると言い出したのだ。本音もどう考えてもおかしいと思ったが、あの時は作戦行動中だったので通信を制限されていたが今は違う。状況はたった一人の乱入によって混乱している。だからこそ簪は確認を取るために電話をかけた。

『……………一つはお前の絶縁を白紙にすること。そしてもう一つは——お前たちを零司君に譲渡することだ』

「……………そうですか」

そう言つて簪は電話を切り、楯無を渡した時に案内された部屋に入ろうとすると後ろから声をかけられた。

「——更識、他のみんなを知らないか？」

「……………さあ。もしかしたらもう手遅れかもしれません」

「……………何を知っている？」

千冬から少し殺気が放たれる。しかし簪は物怖じせず答えた。

「平坂零司が怒ったこと。それによって——世界消滅の危機に瀕していることです」

そうはつきりと言った簪。千冬はその言葉を信じる事ができなかった。

気が付いた白騎士は自身の損傷率を確認する。咄嗟に防御をしたことが功を奏したか左腕部装甲のダメージのみで済んでいた。それもまた、異常な回復力で完治しつつある。

そしてまた白騎士が飛び立とうとした時、さつきまで白騎士がいた場所が——消失し、クレーターを作った。

『……………』

「……………」

2つの白が対峙する。白騎士は既に目の前の存在を消すことを決めており、ビームで迎撃して隙を作る。しかし目の前の白にビームが当たるとはなく、10cmほど前に展開されているバリアにぶつかり相殺される。

『……………化け物が』

「随分と人間らしいことを言うじゃないか。機械風情が」

白騎士の背部にビームが直撃する。シールドエネルギーが大幅に減るが、後ろに気を取られた白騎士は前からの高速移動からの斬撃を諸に食らった。

———それほどまでに、零司の攻撃は早かった

手の平に球体を瞬時に生成後すぐに無数のビームを白騎士に向けて飛ばす———と認識した瞬間に白騎士は既に斬撃を食らう。その硬直を狙ってかビームがぶつかり、白騎士にダメージを与えていく。

『……………あ……………ありえない……………こんなところで……………私が……………』

「君程度のレベルなんてこの世にゴロゴロいるさ」

零司の手から白い球体が生成する。しかしそれはビームを放出するタイプではなかった。

白騎士は離脱する。だがその行為自体が無駄だった。

まるで箒の思いに応えるかのように紅椿が加速する。だがそれは悪手だった。

「この白鋼は僕の理想を体現している」

箒は零司を斬った。でもそれは残像であり、箒は後ろからエネルギーの塊を食らわせられて吹き飛ばされる。装甲の大半が吹き飛んでいた。

「後は君だけだね、セシリア・オルコット」

「……………こんな……………ありえない……………」

「本当だね。僕だつて驚いている」

——君たちがここまで弱いなんてね

そう言った零司はセシリアの眉間を狙撃銃で貫いた。もつとも、絶対防衛が発動して彼女は無事だが、その威力はいくらダメージを負っているとは半分以上あったシールドエネルギーを空にしてセシリアを気絶させるには十分だった。

零司はようやく終わったと一息入れると白鋼のハイパーセンサーに次々と機体の反応が現れていく。

「……………妹やられて姉登場？」

どの機体も展開装甲が装備されている。しかし零司は臆することなく、次々と専用機持ちたちを自分の方へと引き寄せ、箒を回収し終えたばかりの真耶の方へと飛ばす。

「さっさと消えてくれるとありがたいんだけど」

「い、一体何をするんですか!？」

その質問はするべきではなかったかもしれない。零司を喜ばせるだけであり、今も零司は笑顔を浮かべている。

「サンプルはもう十分だし、この場で回収したところでどうせ没収される——なら、後を残さず消えてもらおうとするさ!」

両腕をそれぞれ対局の場に伸ばす零司。すると彼の両横に亀裂が入り、穴が開く。そこから放出されるエネルギーが白鋼に吸収される。

「おっと。ここじゃ場所が悪いか」

零司が消えた。少なくとも真耶にはそう見え、新しい反応が現れるまでそう思っていた。

真耶の機体に白鋼の異質な反応が示された時には零司は真耶の上において、横に伸ばしていた腕を自分の胸に持つて行く。認識性なのかある程度の位置に腕が移動したとき、エネルギーが球体に収束されていく。

機体が零司に攻撃を開始する。しかし——すでに遅かった。

ビームというビームが球体に吸収されていく。そして——零司はそれを解放した。

「——デイメンション・ブラスター!!」

開放されたエネルギーが強襲した機体を一体残らず消失させた。それを近くで見

いた真耶は——文字通り絶望した。

Rコアとは正式名称を「リフレクト・コア」といい、篠ノ之東のクローンである篠ノ之楓によって生み出されたその人間が思い描く「最終地点」を顕現する第二のISコアである。

基本性能は普通のISと同じであり、白鋼にもハイパーセンサーはもちろん、絶対防御機能も備わっている。ただ違う所と言えば男にも扱えることができ、尚且つ性能は人それぞれなのだ。言わばその人間が目指す最終地点を生み出すコアである。

それ故に楓はそのコアを3個しか作らず自身を解放した悠夜とその親友でタフな零司に渡した。

「……………正直、平坂零司にコアを渡したのは後悔している」

「そう言うな……………って言いたいんだけどな。流石に……………これは……………」

「とはいえ、あなたも似たようなものですけどね」

厳しい言葉に悠夜は視線を逸らす。

「仕方ないじゃないか!! 男にとって「大量殺戮」と「綺麗な攻撃」のハーモニーは絶妙なんだから!!」

「仕方ないもくそもないでしょう」

睨む楓だが悠夜は臆するところか平然と楓の頭に触れた。

「だがアイツも俺も、「宇宙」に対する警戒心は強い」

「……………それもそうです。ま、それでもかなりアウトな機体ですが」

楓がそう言うコアを作ったのは、それが一番手っ取り早いから。

そもそも楓も普通のISコアを生み出すことができ、さらに普通のタイプで男でも動かせるコアを作り出すことができる。だがそれを安易に公表するのは今の社会を最悪の形で荒れさせることを危惧したからだ。

悠夜が持つ黒鋼、そして零司が持つ白鋼ならばそれは起こらない。装着し、理想の体を登録したところで機体は装備者のモノとなり、開放するにはそれこそ無謀とも言える難題を解かないといけない。解こうとすれば割に合わないほどの時間がかかる。さらに言えばいずれ来るであろう宇宙からの侵略者などを撃退するにも必要だったりする。だからこそ、東製のISがあれだけのスペックを持つていてもある意味おかしくないのだが。

「ともかくしばらく様子を見ます。あなたは？」

「……亡国機業に戻る。最悪お前と合流することも視野に入れるさ」

そう言うのと楓は悠夜の頬にキスをしたあまりの不意打ちと全く警戒していなかったことから悠夜は受けたが、様子から悪い気はしていないようだ。

e p. 19 牙を向く零司

「……………は？」

攻撃を初めて5秒も経たない内に消滅した自分の傀儡たち。その光景に束は呆然とした。

あり得ないと、目の前で流れる光景を眺める。いくら天才と言っても、他次元に干渉してエネルギーを吸収、放出するなど今の自分にもできないことをやってのけた相手に対して顔を引きつらせる。

「ただいまー」

のんきな男の声が室内に響く。束はまるで兎の如く飛び出して男——悠夜に対して飛び蹴りを放つが、悠夜は回避と同時に服をひん剥いて洗濯籠に入れた。

「あ、下着も脱げよ」

「そういう問題じゃない!!」

「落ち着け束。今はクロエを愛でるのが先だ」

「気持ちはわかるけど今はこっちが先!!」

「……………ふむ。確かに敢えて束の服を着せて「この服、ぶかぶかです」とか言わせるのも

また一興だな」

「だからこつちの話を聞けえ!!」

舌打ちをする悠夜。しかしクロエを引き寄せて頭と同時に尻を撫でることは忘れな
い。

「……………止めてください。セクハラです」

「良いじゃんか。俺とクロエの仲じゃ〜ん」

これでも悠夜はかなり我慢している方である。本来ならクロエみたいな背景はともかく美少女の部類に入る少女は自分の部屋でじつくりと仕込みたいと言るのが本音なのだ。ちなみに束に対しては、自分に従順で忠誠を誓うなら考えても良いと思っ
てい
る。

「……………嫌ったら嫌です」

「……………まあ、それなら仕方ないけどさ」

渋々と諦める悠夜。そしてどこからともなく円を描いて空間に穴を開ける。

「じゃあ行こうか。向こうも俺の話の聞きたいだらうし」

そう言つて悠夜は平然とその穴に入った。

簪は打鉄式を纏った状態で未だに空を見つめる零司に近付く。ある一定の距離を詰めた時、簪は思った。

(……………まるで子ども……………)

それは決して零司を馬鹿にしたわけではない。実際、零司は目を輝かせていた。

「……………素晴らしい」

「え？」

「素晴らしいよ！ ここまでの出力があるなら僕の最終目標に到達するのに10年は短縮される！ それに既に篠ノ之束に対しては僕にも技術力を証明しているから、もしタッグを組めばコロニー開発は僕が生きている内に実現する可能性が高い！」

幼馴染が考えていることがさらけ出されたことで簪は啞然としていた。

「あれ？ 簪？ どうしたの？」

「……………その……………大丈夫？」

「うん。余裕だよ？」

すると零司は何かを思い出したようでハツとなり、簪に詰めよった。

「簪、楯無さんは!? 楯無さんはどうしたの?!」

「……………大丈夫。絶対防御を持ったから、今は気絶してるだけ…………」

その言葉にホツとする零司。だが逆に言えば——気絶程度の攻撃ですらこうなる
と言う意味でもあった。

京都府はほとんど消滅しており、ほとんど廃墟と化している。

「そっか。じゃあ帰ろっか」

「……………うん。——待って!」

零司は盾を周囲に展開して攻撃を防ぐ。当然、簪を守るのは忘れない。

「……………雑魚が」

周囲には打鉄やラファール・リヴァイヴが多数展開されており、全員が零司と簪の方
に狙いを定めていた。

「平坂零司! 並びに更識簪! IS強奪及び大量破壊の罪で逮捕する!」

「抵抗するな! すればさらに罪を重ねることになるぞ!!」

どれも強力な武装を積んでいる。だが零司は——軽く指を動かした。すると武装
をビームが貫き、他の方向からビームが全機体を襲った。

「僕が……………罪……………?」

先程の攻撃で半数の機体がやられ、絶対防御に守られながら数人が落ちて行く。

「簪、離れてて」

「……わかった」

今の状態だと自分は足で纏いになると思い、簪は零司から距離を取る。すると一人が簪の方に接近したが、その操縦者は突然爆散した。

「何?」

「愚かな。宇宙に出るといふ事がどれだけのことか理解せず、ただ戦力増強することしかできない無能が——僕に指図するな」

そう言った零司は目の前にいた打鉄の操縦者に対して一瞬で詰め寄って切りつける——つもりだった。一瞬の間にアリーシャが間に割って入って攻撃を防ぐ。だが——

「——ぐっ」

「へえ。流石はブリュンヒルデ。でも——さようなら」

——インパクトナツクル!!

剣を離れた零司はアリーシャの腹部を殴る。手抜きされなかったその拳はもろに急所に入ったことで絶対防御が発動。さらに零司は容赦なく至近距離から高威力ビームを食らわせてその衝撃でテンペスタの装甲をすべて持って行き捨てた。

「ブリュンヒルデが……アリーシャ・ジョセスターフが……負けた……?」

「そんな……どうやって勝てば良いのよ……」

「勝てるわけがないわ……」

「でも、軍からの命令に背くと銃殺刑。君たちはどっちみち僕から逃げられないのさ」
もはや軍に対しては絶望的だった。逃げてでも死亡、かと言っても立ち向かっても命の保障はないこの絶対的な状況に。

それは軍上層部も同じだった。

圧倒的な戦力。たった一機で戦力差が多数の I S を大きく上回る所属不明機。撤退指示を出したところで破壊を繰り返されたら目も当てられない。そう思っていた時だった。

「——こちら、I S 学園所属、更識簪。軍のみなさんは今すぐ撤退をお願いします」

「何?」

「あなた、何を——」

「あなた方にとって今の彼は脅威ですが、あなた方がこれ以上の危害を加えないのなら暴れることもありません」

その宣言に隊長はすぐに簪にコンタクトを取る。簪は何度か話すと軍所属の I S はすべて撤退。負傷者もすべて回収された。

簪の予想は正解だった。

確かに零司は破壊を楽しんでいる。しかし今は彼にとつて一番心配するべきことが存在する。だからこそ撤退させることがまず先決なのだ。

「零司……」

「わかつてる。今は楯無さんの所に急ごう」

零司は簪を抱きかかえ、そのまま楯無の所に移動した。

「さて、平坂零司とあなたがISを持っている理由を教えてくださいませうか？」

「理由なんて大したことはないんだけどな。ただ、俺たちはそういう人間だからって言うか……」

「悠夜？」

「……………わかつたつての」

悠夜は呆れながら話し始めた。

「ま、あれは零司が望んだ本当の「白鋼」だ」

「……本当の白鋼、だど？」

「そ。人型兵器の白鋼はあくまでこの世界のレベルに合わせて作られた機体でしかない。しかし零司が本当に目指している白鋼は四元素を余すことを操り、その延長上である氷などを操る魔術師にしてロボットを作るつもりだったんだよ」

束の頬は引き攣る。似たようなことを数か月前に聞いたからだ。

「ちよつと待つて。それつて——」

「ああ。だから俺たちは意気投合した」

悠夜もまた、似たようなことを考えていた。

「言うなれば俺たちは、ある意味ではISという存在に魅入られていたとも言えるな。10年前では異常スペックの塊ではあるが、宇宙は何があるかわからない。だからこそ俺たちは「最強たる力」を求めたんだ。それをRコアは実現させた」

Rコア。その単語に反応した束。

彼女にとつて楓という存在は気に入らない紛い物だが——

「そう怒るな。アイツも「楓」という一つの存在としてしているんだ。お前が消す道理なんてないだろ」

「……それはコピーされたことがないから言えるんだよ」

「だろうな。だが、ダメだ。楓に手を出すと言うのなら————相応の覚悟をしてもらおう

ぞ。誰であろうとな」

悠夜が殺気を放つ。波打つそれを全員が警戒した。

「まあいいわ。それで、彼女をこちらに連れてくることは——」

「しない」

はつきりと宣言する悠夜。それほどまで彼の決意は高く、何を言っても揺るぐことはないと思つたスコールは一先ず諦めることにした。ただ——

「そうそう、悠夜」

「何だ？」

「これからはレインと寝なさい」

そう言うところは静まり返り、マドカは哑然としてレインは顔を赤くし、束とクロエは怒りを露わにした。

IS委員会はもはやお通夜だった。

圧倒的な破壊力。多数のISすら物怖じしないその性能に全員がド肝を抜かれている。

「異常だ……異常すぎる……」

「白騎士事件がまだ可愛く見えますな」

「どうしますか？ また捕縛作戦でも……？」

「そうなる今度は日本以外のISを終結させねばなるまい。どう考えても無理だろうよ」

正直、委員会もお手上げだ。

束も確かに異常だ。10年前は彼女の技術力で世界が圧倒されたが、今度はこれである。

「幸いなのが、彼には気に入っているのがロシアと日本にいるということでしょう。もしくは彼の父を逮捕し、平坂コーポレーションを一時的に潰すのも——」

「——ダメですね」

唐突に会話を遮る声がかかる。

「……轡木十蔵」

「彼はこちらで引き受けましょう。中立であるIS学園ならば通わせるのも問題はないのでは？」

「……………なるほど。それで彼を飼い殺す、とでも?」

「ええ。これならば発表されるもすべて平等になるでしょう」

そう答えた十蔵。しかし彼は——全く別の事を考えていた。

京都が壊滅した数日後。零司は藍越学園からIS学園に移動することになった。

藍越に置いていた荷物を回収した零司は外に運び出すと、窓からその様子を見ていた人が物を投げる。

それが零司の頭に当たりかけたところで零司は受け止めた。

「化け物は出て行け!!」

「今すぐ死ね!!」

それを皮切りに物が零司に飛んでいく。教員はそれを止めようとするが、突然空中にスपीカーが現れて零司は言った。

「うん。確かに僕は化け物だ。君たちみたいな雑魚に比べて僕は遥かに強い。強すぎる

とも言えるけどね」

零司は荷物を置いて浮かび上がり、かつて悠夜を退学にした女生徒の前に滞空した。

「君の母親が所属する組織に伝えると良い。僕はいつでも挑戦を待っていると。そして——僕の大切な人をさらった場合、君たちの大切な存在を君たちの目の前で消してやるとね」

その言葉は嘘ではなかった。

女生徒も、その友人たちも笑い飛ばすことができなかった。それほどの殺気が彼女たちを襲い、震えさせているのだから。

リムジンが止まる。その中から織斑千冬と晴文をはじめ黒服の男たちが現れて零司と荷物を車の中に入れる。

「という事でお前は今日からIS学園の生徒になる。何か質問は？」

「授業は受けないといけないんですか？」

「当然だ——」

「——その必要はない」

黒服の一人がサングラスを外しながら言った。

「舞崎さん」

「君はI S学園の授業を受ける必要はないというのがI S学園上層部の意向だ」
「ちよつと待て。こつちはそんな話を聞いていないぞ」

「このことは揉めに揉めたからな。むしろ、その技能で学園を守護させるべきだと言う話だ」

晴文の言葉に千冬は舌打ちをした。

「じゃあさ！　じゃあさ！　僕は色々作つて良いの!？」

「ああ」

「やったー!!」

無邪気に喜ぶ零司。あの騒動の時とは全く違う様子に千冬は唾然とするが、年相応かと思うことにした。

零司は早速電話する。一体どこに電話しているのかはすぐにわかった。

「あ、コーポレーション建築部？　悪いんだけどI S学園にこの前渡した設計図と装置持つてきてくれない！　とうとう作るからさ！　僕専用の研究所！　そう、プランD！　え？　土地？　そんなの僕が生み出してどうにかするって！」

さらりと爆弾発言した零司だが、実際この男はどうかできるので質が悪い。
要請されたところはため息を吐き、社長室で確認を取った後に準備をさせた。

零司が以前使っていたベッドに零司自身が横たわった。

初日は理事長に土地使用の申請したり、生徒会の方に顔を出したりして時間がなくなったので寮の部屋で寝ることになった。

「……………いつまでそこにいるのかな?」

「——あー、バレちゃった」

部屋のカーテンがなびく。そこにはワンピースに白いエプロンをして頭にカチューシャをした天災——束がいた。

「で、何か用? もしかして早めにつぶしに来たとか?」

「本当はそうしたいけどさ、正直もう認めるしかないかなあって。ちよつとウザいけど悠夜の事は認めてしまっているし、私並みの天才となれば大歓迎だしさ」

「……………どう考えても勢力争いする未来しか見えないけど?」

「それはないよ。だって君、箒ちゃんに全く興味ないでしょ?」

もちろん。確かに胸は大きいと言う点じゃ女性として魅力を感じなくもないけど、正直いらぬ——それが零司の本音だ。ましてや零司はつい最近刀奈の婚約者になった。胸に関しては色々な意味でお腹一杯だろう。

「だから私も君に不干渉。そして君も私に不干渉ってことでOK?」

「悪さをするつもりはないっていう認識で良いのかな？」

「そうだねえ。というか、そうそうできないかな」

笑顔は絶やさず、それでいて真面目な雰囲気を出す東は言った。

——今の世界は、楽しい？

その質問に零司はこう返す。

——つまらない。でも僕はさらに楽しくするよ。それが僕という天才の義務でありやれるべきことだと思うから

「ついでに、僕が生きている間にコロナーの一つでも作ろうかなあ？ 君も参加する？」

「だとしたらそれはそれで面白そうだよ。その時は私も誘ってね♪」

そう言つて東は消える。零司は動くことなく見逃すことにした。

立ち上がつて開けっぱなしにされているベランダへのドアを閉めようとすると、鳥が一羽中に入った。

鳥は零司宛ての小包を渡すと主の元へと去つていく。零司は中身をチェックしてから開けると、手紙とクリスタルが入っていた。

『これはあなた用のＩＳコアです。一般的なものはこちらをお使いください』

零司は舌打ちすると同時に温かい目をＩＳに向ける。明日からは——もう一つの最強のＩＳを作ろうと心に決めたのだった。

Last episode 僕らの黒歴史—原点回帰—

僕と篠ノ之東の間にちよつとした不可侵条約みたいなのが結ばれてからというもの、学園は平和だった。

本当に何も無いと言うべきだろう。

「……………零司君」

「何?」

刀奈お姉ちゃん——もとい、刀奈が僕に抱き着いてくる。

「何か憂いている顔をしているけど、どうしたの?」

「ああ。こここの所、平和だなあと思って」

「……………平和、ね」

刀奈が何度か頷いて同じような顔をして答えた。

「そう言えば、以前に「多額の補償金を払うから平坂零司をアイリス王女の夫に迎えた」と言われたんだけど?」

「それ僕の所にも来たよ。何か近衛騎士団長も一緒につけてたけど丁重にお断りした。そう言うのはいいじゃないし」

たぶん、あの事が原因かもしれないけど。

1月の中頃、IS学園でアイリス・トワイライト・ルクーゼンブルク王女が来日された。

そこで彼女は王女特権のつもりか織斑君を引つ張りまわし、挙句連れて帰ると公言したので凰さんと篠ノ之さんが王女とその近衛騎士と決闘することになった。結果としては凰さんと篠ノ之さんの圧勝だったけど、課題が残る試合でもあった。

で、その時にアイリス王女が負けを認めず攻撃しようとした時に僕が割って入って止めたんだけどね。軽く説教を含めて攻撃の手本を見せたってわけ。

「確か「攻撃とはこうするものです」と言っただけでそのまま浮遊したわよね？」
「重力使うから仕方なかったんです。悠夜だって同じことしてました」

黒鋼も重力使うから——むしろ黒鋼の方がそれだから。挙句高機動機体だから気が付いたら死んでるのが普通だ。

「でも良かった。私たちより高待遇だから——」

「美女二人が嫁になっっているのに行くわけないじゃん」

そう言っただけは刀奈を自分の方に引き寄せてキスをした。

今日からまた新しい春が来た。僕も2年になったけど、言うまでもなく新しいものを作り続ける。けど、僕の仕事はそれだけではなく専用機の強化にも手を貸していた。

あの時に自分たちの力がどれだけ弱いものかと自覚をしたように、機体をしつかり治した後に僕の所に直接乗り込んで来たのだ。ついでに織斑君と篠ノ之さんは監禁して自分の立場を叩き込んだ。そのかいあって、最近織斑君も自主練しているみたいだ。

……まあ、正直コアに当たらないようにしていたけど全て壊れていなかったのは意外だった。

(とはいえ、流石に手は抜かないとだけ)

今日は入学式。そこで僕と織斑君は戦闘することになった。多少は成長しているし、華を持たせるのも悪くないとは思っている。ま、華を持たせるついでにアレを社交界という名の世間デビューを僕が本気を出して押していくことも考えている。そうすれば僕がIS学園にいられる時間は多くなるし、刀奈や簪と一緒にいられる時間が多くなるからだ。

「次は代表生2名によるISバトルを行います」

今年の入学式はかなり華々しい。去年は更識家の仕事で刀奈も虚さんも学園を離れていたのが一般的なものになったが、僕が更識家を吸収させたことによつて時間ができて第三アリーナで行われている。

『零司。織斑君がピットから出てきた』

「了解。平坂零司、白鋼、行きます!!」

カタパルトが作動し、接続されている白鋼が自動的に移動、射出される。

既に織斑君が滞空しているので、僕は戦闘態勢を取った。

「行くぜ、零司!」

「見せてもらおうか、成長した君がどこまでできるかを」

織斑君は最初に瞬時加速がパターンだった。しかし織斑君はいつもとは違って荷電粒子砲を放った。確か《月穿》だったかな。

そこから瞬時加速を使わずに普通の加速を使って接近する。うん? 威力が小さくなった分、連射速度を上げた来たのか。

「そっつ!」

僕は袈裟斬りを行う織斑君の攻撃を足で防ぐ。しかし織斑君もそこは読んでいたのかすぐさま《月穿》からクローに変えて攻撃してくる。

——ガッ!!

織斑君の攻撃が当たる前に右腕を出して受け止める。

「くっ。流石は零司だ。でも、まだ——」

「ところで織斑君、今年は男子が入学してこなかったね」

「は？ 何言ってるんだよ。ISは俺たちにししか動かせないだろ？」

一般的にはそうなっている。僕が本当のことを話していないからだろう。

「じゃあ、ちゃんと僕も本気を出しておこう。僕がこの世界の最強であるという事をね」
織斑君に迫る僕。どこからか黄色い声援が聞こえてきたけど、僕は構わず攻撃した。

「ライトニングインパクト」

「静かに言ってる割に容赦なさすぎだ!!」

「これでも出力はちゃんと抑えているんだからね」

そう言ってる僕は左腕に装備されている砲台《ブラストカノン》を織斑君に向けて連射する。出力が低い代わりに数で攻撃できるタイプだ。

「当たるか!」

「当てる気はないよ。僕の狙いは——《サーヴァント》!」

織斑君の背部からビームの雨が降り注ぐ。

「うわっ!?!」

「ごめんね。強くってさ!!」

《ブラストカノン》からエネルギーを放出。それが途中で分離して織斑君に直撃した。

「どうだい？ 自主練でも、オルコツトさんでもできない技だ。存分に食らうと良いよ」

「まだだ！ まだ終わらな——」

織斑君は何かに気付いたような顔をする。

「……なんだ……それは……」

「僕は負けず嫌いなんですね。ただの一度も負けたことないのさ」

「いや、意味が全く分からね——」

織斑君の言葉が熱線の中に掻き消えた。

「特大砲台《ブラストカノン・フュージョン》。機体各所から伸びたノズルによってパワーアップしてところだよ」

そう言ってドヤ顔を見せた僕にブーイングが起こったのは言うまでもない。そして

僕は——上空に向けて発射した。

「ちよっ!! 何やってるの!?!」

出力を一気に上げて遠慮なく撃ったそれは上空にいる隕石に直撃した。

「楯無、今すぐ生徒たちを避難させて。新たな敵の予感だよ」

「……………わかったわ」

僕も白鋼をRコア仕様の白鋼にして空けた穴から出て一気に接近した。

ハイパーセンサーに表示されたものは虫のような形をした何かと叫ぶべきだろう。僕はそいつらを殲滅していく——すると急に黒いエネルギーが僕のいる方に飛んできた。

回避した僕の下に黒い機体が高速で接近してくる。

「どうとう来ちまったか」

「……悠夜、どうして君が？ 後さっきのはわざとかな？」

「もちろん。お前なら避けるってわかっていたからな」

頷く悠夜を殴りたくなったけど、今はそんなことを言っている場合じゃない。

僕と悠夜は《ブラストカノン》と《ダークカリバー》を構えて攻撃する。

「とりあえず目標はあの隕石だ」

「……了解。今は詳しく聞かないでおくよ」

僕らは今は上空を舞い、虫共を殲滅した。

それから少しした後、学園に専用機持ちたちが集結した。

「フォルルちゃん、これがダリルの彼氏」

「殺すっス!!」

飛び掛かるフォルテ・サファイアを受け止める悠夜。

「言っておくが、俺は何もしていなからな」

「この意気地なし!! そこは期待に応えるべきでしょうが!!」

「はいはい。茶番はそれくらいにして」

「発起人はお前だから」「発起人は君っスから!!」

確かに僕から弄ったけどね。まあ、それはともかく——

「悠夜、君は随分と知っていたみたいだけど説明してくれない?」

「そうだな。今回、IS学園上空で交戦したのは「イマージユ・オリジス」。ここ最近、隕石が降っているというニュースがあるだろう? アレは全部こいつらが降って来たのが原因だ」

「へー……そんなニュースがあつたんだ」

そう言うと全員が僕の方を見た。

「……相変わらずだな。で? 今は何を作ってるんだ?」

「IS白鋼用の換装パッケージ。ちなみに瞬間着脱可能タイプ」

「笑顔を作りながら作ってる姿が目には浮かぶぜ」

流石は親友。わかってる。

「じゃあ、俺たちはこれからそいつらを殲滅すれば良いのか？」

「織斑一夏の割には良いところを突いたな」

「いや、何で俺に割について——」

「亡国機業内じゃ、織斑一夏は取りに足らない雑魚となっている」

「怒つてるところ悪いけど、こいつも白鋼と同じ機体があるから下手に逆らわない方が
良いよ」

そう言うのと全員の顔が青くなった。

「あの、良いところを突いたってどういうことでしょうか？」

シャルロット・デュノアが敬語でそう言ったけど、こいつ君と同一年なんだけどね。

「今回、殲滅任務に出るのは俺と零司だけだ」

「ちよっ!？」

「それ、本気で言ってますの!？」

「ああ、本気だ。それに今回殲滅するのは——敵の本陣だ。楓が既に見つけている」

「さっすが! ってことはこれからテレポーターションで宇宙拠点にでも移動?」

「そういうことになる」

ということとは例の機能を使うわけか。

「でだ、貴様は我々に何を求めに来た？」

織斑先生が睨みながらそう言うと、悠夜は真面目な顔をして返す。

「お前たちは万が一、俺たちが撃ち漏らして地球に落とされた虫を倒してもらおう。奴らは人を殲滅してこの星を狙いに来ているんだ。文句を言われる筋合いはない」

きっぱりと言った悠夜に対して誰かが「対話」と言ったので、悠夜がとある映像を見せた。

——その映像は、グロかった

すぐさま停止して悠夜の頭を殴る。

「君バカあ？ そんなことして戦意削ぐ気かい!？」

「どつちでもいい。俺たちがやることは殲滅だ。やる気がないなら出撃せずに縮こまっ
ている。行くぞ零司」

「りよーかい。あ、でもその前に——」

僕は楯無と簪にキスをする。その光景を見ていた一同が啞然をしたり羨ましがったりしているけど、僕は気にしない。

宇宙。それは無限。

本来ISはその宇宙を開拓するために開発された。パワードスーツ。僕らはそれらよりも先に黒鋼と白鋼を展開して外に踏み出した。

「零司。ここから先はどうなるかわからないぞ」

「知ってるさ。でも、生き残る。だって君と僕がいるんだからさ——」

——それこそなんでもできるよ

今、この映像は全世界に配信されている。一体どんなタイトルで流れているか楽しみだけど、それは後で確認するとして——

「行くよ、悠夜！」

「ああ、零司!!」

「コード、メタルフュージョン!!」

ハイパーセンサーに「コード承認」という文字が現れて僕らの間にコックピットが作り上げられる。僕らはそれに移動すると白と黒の装甲が次々と作り上げていく。それによって生み出されるのが合体ロボ「破鋼」だ。

破鋼が飛行形態になって加速していく。悠夜が操作し僕が狙いを定めて撃ち落とすて行く。

「悠夜。まどろっこしいからアレ、やるよ！」

「そうだな。遠慮なくぶっ放せ！」

破鋼の両隣に空間の穴が出て来て、破鋼はそこからエネルギーを取り込む。胸部から球体が出て来て収束されたエネルギーがビーム状で放出された。悠夜が操作して向きを変え、次々現れる敵を蹴散らす。

一通り放った後は今度は悠夜の番だ。

「零司！ エネルギーの管理を頼む！」

「任せて！」

鋼の前に等身大のダークカリバーが展開。それを取った破鋼からエネルギーがダークカリバーに伝わる。

「地球に住むすべての人々のために……………」

悠夜がらしくないことを言い始める。そう言えば今の亡国機業ってISによって酷い目に遭っている国の救済もしているんだっけ？

「そして、俺たちが本気を出せないから溜めてしまったストレスのために——」

その言葉ですべてのカッコいいが無くなった気がした。

でも気持ちちはわかる。

「とりあえず死ね!! ダークカリバー!!」

本拠点に一太刀を浴びせる破鋼。だけど悠夜のことだ。この程度で終わらせはしないだろう。

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね!!」

「死ね」の回数につき悠夜は斬りまくった。ひたすら斬りまくった。僕はただ敵に同情した。

「ごめんね。地球人の能力が低すぎるばかりにこんな目に遭って」

「テメエの考えとかお見通しなんだよボケが!! 偶然で男女別の温泉が混浴になるかあああああツツ!!」

「本当にこんな理由で倒してごめんね!!」

そう言いながら僕も周囲を守ろうと必死になっている敵を倒した。

「ようやく終わったな」

「そうだね。見るも無残にバラバラになったね」

巻き込まれた敵はひたすらかわいそうとしか言えない。

「……………マテ……………」

どこからか声が聞こえた。すると何かが破鋼に取りついたのでか機体が揺れる。

「何だ!？」

「敵影、下! どうやら取りつかれたみたいだ」

「……………コノママデスムト、オモウナヨ……………イツカ……………ワレワレガチキュウニスムマデ……………」

「つまりそれって、他にも君たちみたいなのがいるってこと?」

「……………ソウダ。ソシテ……………ワレワレノシカバネヲコエテ……………」

「わかった」

そう言っただけはさらに次元に干渉して破鋼が許容できるエネルギー量をギリギリ保持。そして、さらに干渉すると同時に太陽に向かって撃った。

「……………ちなみに、この攻撃を濃縮したら太陽系はもちろん、銀河系にすら大きな影響を与えるんだ。君を治療してあげるよ。そして伝えるんだ。僕らのサンドバッグになるつもりなら来いってね」

「……………クルツテル」

「何言ってるの? 狂っているのは当たり前だよ? だって僕は家族に手を出したら—

——その組織はもちろん、一族郎党生かしたまま燃やすから」

フランスとかでやったら怒られそうだなあ。

なんて思いながらもとりあえずは介抱して離れた。後から「生態を調べる必要があった」とかクレームを入れられたけど、僕が笑ったら誰も何も言わなくなった。

この戦いの後、僕は平和に暮らした。ただ気になったのが、僕の姿を見た生徒たちがモーゼが海を割った時のように分裂して平伏していた。

こういう平和な日常はずっと続くものだ。

悠夜と別れてから、僕はまた半ニート生活に戻ってる。

「零司君！」

部屋に入ってきたのは刀奈だった。

刀奈は僕ともう一人——簪を見て笑みを浮かべる。

「さつきまで簪ちゃんに相手してもらってたんだ。浮気者」

「とか言って、本当は何だかんだで嬉しい癖に」

僕はキスをした。

イマージュ・オリジスを撤退させてからというもの、僕らの関係はかなり進んでいた。子どもこそはまだできていないものの、実際は時間の問題かもしれない。

それでも、何人子どもができようが絶対に養う。

「零司。私も」

「うん」

さつきまで寝ていた簪が寄り添って来る。僕は彼女の期待に応えたすぐにキスしてあげた。

もう僕は迷わない。彼女らのために何でも潰すつもりだ。

「……………2人とも、愛してる」

——もう絶対、危険な目にあわさない。例え何度攻めてきても、僕がすべてぶっ殺す

そう一人で誓って、今日もまた2人を抱いた。